転生したら霜男だった件　それいけジャックフロスト

機関銃くん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

友達とスキーしてたら死んじゃったぜ！

このまま天国にでも行くんだろうな、そう思っていた俺だったが目が覚めたら転生していた。

しかも、あろうことか人間ではないと言う。

これは俺の異世界ライフを書いて行く冒険譚である。

因みに俺、霜男。

俗に言うジャックフロストなんだぞ。

目次

1話《転生したら霜男だったんだぜ》 1
2話《リムル大捜索》 11
3話《泣いた赤鬼と俺》 19
4話《俺のスキル》 29
5話《特訓、特訓、特訓!!》 39
6話《ガビルVS俺!?討伐依頼、豚頭帝》 50
7話《豚頭帝》 59
8話《豚頭帝　ぱーとつー》 68
9話《豚とスライムと時々霜男》 76
10話《新たなスキルと胃袋小話》 85
11話《解離者と絶氷者》 94
12話《薄氷の子》 103
13話《真剣勝負》 112
14話《シュニィの実力》 120
15話《白刀・凍雪》 129
16話《ガゼル・ドワルゴ》 139
17話《中央都市リムルに災害来訪》 146
18話《人間のお客さん》 154
19話《暴風大妖渦》 161
20話《大激闘》 166
21話《大勝利からの宴会祭り》 173
22話《ユーラザニアの使節団》 180
23話《盟主代理って何ですか?》 186
24話《……命をかけて……!》 192

２４．５話《仲間の死》――――――――――199
２５話《覚醒魔王なりました》――――――――204
２６話《改めまして極悪霜男です》――――――210

1話《転生したら霜男だったんだぜ》

「……さ、む……しぬ……こ、れ」

俺は今、大雪が轟々と音を立てながら吹く雪山で現在進行形で遭難している。

視界は一面白景色で一寸先も見えはしない、寒さで手足が悴んで録に前にも進めない。かといって止まればもう動けはしないだろうと言う確信が有り、それは死を意味する。

嫌だまだ死に無くない、そう思って無駄に足掻きはすれど背後にピッタリと死が付きまとう。

「……なんで……俺が、こんな目に……」

こんな状況を呪いながら何で、何でと意味の無い自問自答を繰り返す、けれど仕方がないだろう。何かを呪っていなければ折れてしまいそうなんだから。

事の始まりは今朝の事だ。

今日は暫く続いた出張から戻ってきて久しぶりの休日だった、だから部屋でのんびりグダグダしていたんだが、何処から聞き付けたのか中学からの腐れ縁で長い付き合いの親友から連絡が入った。

「げっ……今日はゆっくりしたかったんだが……」

一瞬知らんぷりでもしてやり過ごそうか等とも考えたが、一向に鳴り止まない着メロに観念し通話ボタンを押してしまった。

ここで維持でも無視していれば未来は変わっていたのかも知れないが、後のも悔やみである。

親友からの電話はこうだった。

『今からスキーに行かないか!?俺めっちゃスキー嵌まってんだよ!!なぁ!!いいだろ!!』

元来ここまで押しの強い奴ではないのだが、長らく出張で会えていなかった訳だし、久々に会いたいのだろうか。

親友にここまで頼み込まれてしまっては断るわけにもいかなくなり。

まぁいいか。

そんな軽いノリでＯＫをしてしまった。
その結果。
遭難する羽目になってしまった。
親友とスキーを楽しんだ。長い時間滑っていた為、日も沈み始めており、折角なら最後に上級者コースに行ってみようと言うことになった。付き合いで一緒に滑ることになり恐る恐る滑り始めた、最初は良かった、しかし流石上級者コースと言うべきかふざけ半分で滑れるようなものではなく。
俺はスキー板の操作を誤りコース外の雑木林に突っ込んでしまい、坂を転げ落ち気絶してしまった。
そして、暫くして目を覚ますと日はすっかり落ちてしまっていて吹雪が吹いていた。
ウェアの中にも雪が入り込んでいた為に濡れて冷えたウェアが体温を急激に奪い取る。
それでも何とか戻ろうとしたのだが、この有り様である。
足掻いた結果、自身が何処にいるかも分からず雪足を取られ転倒、転倒した拍子に更に斜面を転げ落ちて木々に衝突、腕から鈍い骨折音が聞こえた。
「も、もう……だめ……だ」
俺の身体は重力に従い前に倒れ一ミリも動かすことが出来なくなってしまった。
雪がだんだんと身体を覆い尽くして行き次第に視界は雪で遮られた。
あぁ、もう死ぬんだな。
こんなことになるなんて、呪うぜ親友よ。
もっとやりたいことが有ったのに、このままじゃ凍り漬けじゃないか。
寒さをもう、感じたくない指の悴む感じも嫌だ、身体の痛みも死に近づいてるそんな感覚も嫌だ嫌だ嫌だ!!
何でどうして……身体は凍り漬けなのに意識だけは一人で勝手に思考し先走るんだ、いっそのこと一瞬で全てを凍り漬けにして終わら

せてくれれば楽なのに。残っていれば嫌でも考えてしまうじゃないか……こんなに醜い自分を最後に知ることになるなんて、最悪じゃないか。

あぁ……嫌だ……嫌だよ。まだ死にたく無い、死にたく無いよ。何で何でこんな目に遇わなくちゃ行けないんだ。俺が何をしたって言うんだ。

どうして俺がこうなるんだ……何故何故何故何故何故何故!!

はぁ……やってられるかよ……こんな人生。

こうして、俺こと深海（しんかい）　直継（なおつぐ）。２４歳。は死んだ。

《告、呪いで検索。特殊能力（ユニークスキル）獲得、呪怨者（クロキモノ）》

《告、痛覚の遮断。能力（スキル）獲得、痛覚無効》

《告、凍結で検索。能力（スキル）獲得、凍結無効。……スキルの変質を確認……凍結無効が変化》

《告、凍結無効の変質により特殊能力（ユニークスキル）獲得》

《……冷血者（コゴエルモノ）を獲得しました》

《告、凍結、氷結、雪関連で種族を検索。……ヒット。人間の体組織を分解、再構成を経て変容》

《種族名、霜男、又の名をジャックフロスト》

まさか、異世界に転生し新たな身体、生を受けるとは思いもしなかった。

◆◆◆

ザッザザ……。

酷いノイズが脳内を書き乱し気持ち悪くて胃の中身が逆流しそうだ。

「……あら……あなた……よ……耐えて……しろいわ……そうだわ……名を……『ヨクル』……」

暗い砂嵐の中で誰かの声が聞こえてた、けれどノイズが酷くて良く

聞き取れなかったが『ヨクル』という名前がはっきりと聞こえてきていた。

「……ん？んんー？生きてる??」

聞いてくれ。雪山で遭難し凍え死んだ俺だが、目を覚ましたら何故かポカポカとした陽気に包まれた新緑の森の中に居たんだ。

何を言ってるのかわからないだろ？

安心しろ俺も訳がわからないから。

「てか、ここ……何処だ？」

え？待て待て待て……。

俺は確かに雪山に居た……その筈だ。確かに覚えている最後に見た景色、一面の白景色、そして徐々に失って行く体内の温度を俺は覚えている。

そう、俺は死んだ筈なんだ。それはだけは変な話だが確信出来るといっても言い。

だが、しかし、胸に手を当てれば感じる心臓の鼓動とじんわりと温かい命のぬくもり。

……って何でこんな手白いの？えっえ？何でこんな色白何だよ。

何故か姿容姿が変わっている。

俺は森の中を駆け回り小さな湖を見付けると一目散に駆け寄り、そーっと、恐る恐る水面に写る自分の顔を覗き見るように確認すると絶句した。

本来の黒髪から白髪へ、しかも根元から毛先に掛けて青いメッシュが入っている。正直言ってチャラい。

それはまだ許せる、ちょっとお洒落しちゃったみたいなノリで行けるかもしれんが。

何で目の色変わってるん？

平々凡々の黒目からなんと外人顔負けのライトブルーの瞳に様変わり。

わぁ綺麗……じゃねぇから!!
「はぁ……一体どうなって」
俺は一体全体何がどうなっているのか理解できずに脳が情報に耐えられずに処理落ちしそうで少し目眩がするよ。
もしかしたら寝ぼけているのか、なんて現実逃避しながら湖の水を掬い顔を洗い目を覚まそう。一縷の望みに掛け、これが夢であって欲しいそう願い。
水を掬おうと俺の指先が湖に触れた瞬間、湖の表面に氷の膜が張ったかと思いきや次の瞬間には凍り付いてしまったではないか。
「……なぁにこれぇ?」
湖を凍りつかせスケートリンクに変えてしまった俺は理解し得ない現象に怖くなりその場から逃げ出した。
誰だって自分の手が触れた途端に湖が凍り付けば恐ろしくもなるだろうが。
実際逃げながら寄りかかったり触れたりした木々は凍り付いてしまうし、動物の身体が少し当たっただけで動物は命を感じさせない氷像に変わってしまうし。
ついでに何か魔物みたいな変な生き物も現れるし、いよいよもって此処がもしや異世界だったりするのかと突拍子もない事を思ったり。
「……はぁ……はぁ……まさか本当に異世界転生なのか……はは
はっまさか本当に……いやいや、マジ……!?」
うっそ異世界転生かよ、そう言えば死ぬ直前になんか変なアナウンスが聞こえてきたような気もしてきた。
もしやあれが俗に言う神の声という奴なのだろうか、やっべ何も覚えてねぇや。
「……あーー、どうすっかなぁ……」
此処が異世界だと言うのなら俺は始めてやったゲームのチュートリアルを全スキップして最初の森に放り出されようなものじゃないか。
俺は途方に暮れたさ。もうどうしようもないくらいにな。
けれども神は俺を見捨てては居なかった。

それは俺が途方に暮れて空を見上げていた時、近くの茂みからゴソゴソと何かが動く気配。
俺は身構えたがこの異世界に来てまともに戦闘などしたことが無いわけで。若干腰が引けてしまっているがいざとなればこの手で触れれば一瞬で凍り付くから大丈夫だ、そう言い聞かせて茂みの中に入っていけば、そこに居たのは鬼だった。
そう鬼。
傷を負っている大きな黒い鬼が居た、黒い角を生やした筋骨隆々とした男の黒鬼が傷付き呻き声を上げているではないか。
深く切りつけられた傷や肉を抉り取られた傷からはドクドクと止めどなく血が流れていて息も弱い。これは素人の俺でも理解できてしまった。
このままでは確実に命を落とすだろうという事が。
……そんなことさせるわけねぇだろうが!!
「折角の情報源を失うわけにはいかん!!それになぁ……死んだばかりの俺の前で簡単に死ねると思うなよ!!」
と言っても俺に何が出来るのかさっぱり分からない、だが指を加えて見てられるか。
とにもかくにも出血を止めなければ、俺は傷口に掌を当てそして傷口を氷で塞ぐイメージを強く意識する。
すると、触れた指先からパキパキと音を立てながら薄氷が傷口を覆って行く。数秒で完全に傷口が氷で塞がる。
「……よし、傷口はこれで一先ず良いだろう……次は……体力の回復か？何か食い物は、てか気失ってるから食えんか……なんか、なんか無いのか!?」
自棄糞気味に転生特典か何かに掛けて叫べば、何か声が聞こえてきた。
《告、ジャックフロスト固有能力、森術士（ドルイド）の脈動回復を使用しますか
ＹＥＳ／ＮＯ》
「何だよ、こいつ直接脳内にって……んな事言ってられるか!?助けられるんだろ、何でも良いからやれよ!!ＹＥＳ！ＹＥＳ!!イエーース

!!!」
そう俺が叫ぶと、俺の周りに純白の花が生えてきて花弁を揺らす。花弁から降る小さな光が黒鬼に降り注ぎ、身体に溶け込むように消えて行く。
暫く花の光を浴びせていると徐々に顔色が良くなってきたようだ、荒かった呼吸も落ち着いてきたようだし。
峠は越えたのだろう。俺はほっと胸を撫で下ろし地面にドサッと座り込んだ。
「はぁぁぁぁ……よかったぁ」
人の命が掛かっていたんだ、そりゃ緊張もするし腰も抜けるだろうが、治療途中はアドレナリンがドバドバでハイになっていたが今になって恐ろしくなる。
もし、助けられなかったらと思うと手指が震えるよ。
「まぁ、無事に助けられたみたいだし。見殺しにしてたら夢見悪いもんな」
しかし、黒鬼が起きるまではまだまだ時間が掛かるだろうな。まぁいいさ時間は沢山あるからな。起きるまで自分の能力の把握に努めよう。
そうして黒鬼が起きるまでの間、俺は自分の能力に四苦八苦しながら格闘するのだった。

◆◆◆

「……っつ……こ、こは……」
と、能力の練習に建てた氷の鎌倉から声が聞こえてきた。きっと黒鬼が起きたんだろう。
さてと、先ずは何よりも先に体調を確認しないとな、治療した身としては気になるところですな！
「あ、起きた？傷は痛みは無いか？血は止まってるか？」

そう声を掛けながら鎌倉に入り込むと目を覚ました黒鬼が治療された傷口を擦りながら此方を見る。
「霜男（ジャックフロスト）……そうかお前が助けてくれたんだな。礼を言う」
ほー、俺って霜男（ジャックフロスト）って言うんだな。
やはりと言うべきか。俺、やっぱ人間じゃなかったわ。
黒鬼は　俺を正面に見据えると傷口も塞ぎきっていないだろうに痛む身体を酷使してまで頭を下げてくれた、あんて男気溢れる鬼だろうか。
や、やだー。マジイケメンー!!
「いやいや、気にすんな。俺も目の前で死なれるのは嫌だったからな、俺の夢見を最高にするためだからさっ！」
「……そうか、それでも我が今も生きているのは貴方のお陰だ」
「やめろよ、むず痒いだろ！」
今絶対紅くなってるよ、色白で赤面してるとか恥ずかしすぎるだろうが、けれど俺の力が役にたったのだと思うと少し誇らしいな。
と、鬼の無事も確認したことだし。此処が何処なのか聞いてみることに。
此処は何処で、何故あんなにも瀕死の怪我を負うことになったのか。
状況把握は必須として、鬼なんて強そうな奴が負けて死にかけるまで追い詰めた魔物なんて俺なんかが鉢合わせに何かなったら死ぬしか無いじゃない！
俺の問い掛けに黒鬼は悔しげに歯を噛み締めながらも話してくれた。
先ず此処はジュラの大森林という場所らしい、話によると長年ヴェルドラとか言う天災レベルの魔物っていうかドラゴンが封印されていたようで不可侵領域となっているのがこの森だ、そうだ。
しかし、ひと月位前に森の奥に封印されていた筈のヴェルドラの反応が突然消えたらしく。その為新たな縄張りを求めて魔物達が押し寄せている、みたいだ。

そして黒鬼が負っていた怪我はその縄張り争いで負傷したのだとか。
だが、鬼の様子からしてそんな簡単な話では無いのだろうな。
ただ互いに縄張りを巡り争い怪我したというなら自業自得感はあるけれど。
語る口調悲痛な面持ちに何かあったんだろうな。と感じた。
だがたまたま居合わせた俺が図々しく踏み込む事でもないだろう、気にはなるが……まぁいいさ。
それに聞きたい事は聞けたしな。
「……所でお前の名前は？鬼とか黒鬼なんて呼びづらくて敵わん」
「俺はネームドでは無い、故に名は無い」
また、知らないワードだぞ。ネームド？
名前があるとネームドって呼ばれるようになるのか？
「ふーん、でも俺が呼びづらいし俺で良ければ渾名つけても良い？」
俺としてはかるーいノリで言ったんだ、呼びづらいから渾名で呼んでもいーい？みたいな。
しかし、俺が思っていたよりも名付けと言うものは特別なものらしく。黒鬼は目を見開き、頭まで深々と下げて寧ろ付けてくれと言わんばかりだ。
あまりの剣幕に少し怖かったぞ!!
そりゃ自分よりもデカくてゴツい鬼に詰め寄られたら怖いに決まってんだろうが!!
「是非我に名を!!」
「わ、わかったから!?ちょ、ちょっと落ち着けよ!!……えーとそれじゃあ黒鬼だから……クロウ。お前の名は『クロウ』だ」
と安直で呼びやすい名前がいいなとつけたクロウ、そう名付けた直後俺は全身の力が吸いとられるような感覚に晒されると貧血を起こしたかのような酷い目眩に襲われその場に倒れる。
「……あ、れ……？」
何が起きたのかサッパリ分からないが、俺は気絶した。
「主!?」

視界が暗転する直前にクロウから主なんて呼ばれたが、何だよ主って。

そして、何れくらい眠っていたのか分からないけれど目を覚ますと目の前には人?が居た。

「むっ目を覚まされたか、我らが主よ」

「主……?」

俺の事を主と呼ぶ浅黒い肌と短く切り揃えられた銀髪が眩しいワイルドイケメン。

俺を抱き起こす腕は太く逞しく同じ男として敗北感、しかも手首から肩に掛けて青い炎の入れ墨が入っているではないか。

ふぇ、筋肉の盛り上がりで本当に炎が揺らめいてるように見えるー……ていうか、俺こんな人知らないんだけどクロウ助けてー。

「……えーと……どなた?」

「何を言っておられますか、我はクロウです」

「えええええーーーー!!!!」

2話《リムル大捜索》

先日のクロウ、ビフォーアフターから数日が経過しており、俺は何故かクロウの主となってしまったようだ。

突然の主呼びに理解が追い付かずクロウに説明を求めるけれどクロウの言い分は「命を救われ名をも戴いたこの身、主の為に」らしい。

全く全然そんなつもりでは無かったんだがな。

本当なら今すぐ辞退してしまいのが正直な本音だが、クロウの熱い視線がそうさせてくれなく。

俺はなし崩し的に主となってしまった。

それと俺は未だにジュラの大森林を抜けることが出来ず、長いこと迷いながら散策していた、ただ散策しているのもつまらないだろうから歩きながら、ネームドの詳しい概要をクロウに説明して貰い、休憩時間を利用して俺の未だ理解できていないスキルの調査も行っている。

クロウの話によるとネームドとは魔物で名前を持っている強力な個体のことを指すらしい、魔物には名前がないのが普通らしい訳だ。

その話を聞いて何故クロウが名付けの時驚いて頼み込む勢いだったのか、納得が行ったな。

それと、俺のスキルの一つ、手で触れた物を一瞬で凍らせてしまう不思議現象、あれは冷血者（コゴエルモノ）と言うスキルらしく。

触れたものを凍らせることは勿論のこと、五感の凍結、記憶等の概念的な物も凍結出来るみたいだが、正直怖くて使った事はないんだが……いつか機会があれば使ってみようかなと考え中だ。

あと、えっ!?こんなに強くて良いのか!?

実はこの冷血者（コゴエルモノ）。凍らせた魔物の熱を、命を、能力を『奪い取る』ことが出来るみたいなのだ。スゴーい!!

「なぁなぁ、クロウ。俺格好いいか!?」

「うむ、勇ましいですぞ」

そして現に今背中に生えている白い翼は空から襲ってきた魔物を

凍らせ翼を『奪い取る』事で生やした物だ。
それに生やした理由もあるんだ、決して格好いいからと言う理由だけではないからなっ!!
俺の手足、肌に触れた場所から温度が急激に下がって行き、霜と氷を撒き散らしてしまうんだよ。
冷血者(コゴエルモノ)には少し慣れて来てはいる筈、なんだが未だにＯＮ・ＯＦＦを切り替えられないんだよね。
「……つかぬことをお聞きしても宜しいか主」
「んー、なんだ？」
「主のお名前をお伺いしたい」
クロウに聞かれてそう言えば名乗ってなかったなぁと思い出した、出会いが劇的過ぎであった事もだしクロウビフォーアフターですっかり忘れていた。
そうだな、俺の名前は……。
「……ヨクル(直継)だよ」
あ、れ？
何で……俺、確かに生前の名前を言ったつもりだったのに、口を付いて出てきた名前は『ヨクル』と言う聞き覚えの無い名前。だけど……何故か心に、魂に刻み込まれた様なピッタリとフィットする感覚。
どうしてだが、これが俺の名前だと確信できてしまう。
「うむ、ヨクル殿だな。改めてヨクル殿、我のこの身、魂を貴方様に捧げよう」
「あ、うん。よろしくなクロウ」
何だかわからないけれど、とりあえず良いかなと思うことにした。だって転生して魔物になったのだし、名前が変わったって全然変じゃないような気がするんだから。
魔物で日本人の名前って言うのも何かチグハグで変な感じがするし『ヨクル』……うん、良い名前じゃないか？
オッス俺直継改め、ヨクルだぜ！
なんてクロウと楽しくお喋りしつつ浮遊しながら森を散策してい

るわけだが、ぶっちゃけ暇。
こう、見渡す限り森、森、森な訳で。
たまに出てくる魔物も大したことなく手で触れて凍らせて吸収して行くだけの今では流れ作業に等しく飽きて来ても仕方がないと思う。
だが、人語を介する魔物の間で面白い噂話を聞いたんだ、その時俺は心が踊ったよ、この退屈な散策に終止符が打てるのだから!!
噂話の内容はこうだ。
《ジュラの大森林でゴブリンの村を統合し統治するスライムがいる》
という話だった。
ん？何処が面白いの？
そう思っただろう、しかし、この森で数日間過ごして俺なりに分かったことがある、基本的に魔物の間で遵守されるルールはただ一つ。それは弱肉強食と言うことだ。
強者が弱者を虐げ喰らおうとも、喰らわれた弱者が、虐げられた弱者が悪い。
こんな単純で野蛮で自然の摂理に乗っ取り行動するのが魔物だ。しかし、弱肉強食の世界でスライムが複数のゴブリンの村を統合し統治していると言うのだからこの噂話は凄いのだ。
スライムと言えば最弱で名高いだろう、それは俺の前世でも今世でも変わらない事実。だが、そんなスライムがゴブリンを従えている。
その特異性にあるスライムに対して俺の中にある憶測、可能性が生まれる。
《もしや、そのスライム俺と同じ……？》
村を纏めて町を造り森を開拓し領地を広げて行くスライム、まるで人間のようではないか。
「……会ってみたいな……そのスライムに……」
「御意に」
「えっ……ちょ!?まっ!?!?」
つい願望が漏れでた。

それだけだったのにクロウの忠実で正確な耳はその呟きをガッチリキャッチしてしまった。
クロウは短く了承の意を示すと俺の身体を抱き上げ物凄いスピードで駆け出したのだから俺、超ビックリ。
大森林を全速力で駆け抜けるクロウ、道すがらすれ違う魔物に道を尋ねながら一切速度を落とすこと失く走り続ける。
そして、数十分後俺はあの噂の町らしき所にたどり着いていた。
クロウは逞しい腕でガッチリとホールド俺をゆっくりと地面に下ろすと同時に俺は膝から崩れ落ち両手を付いた。
はっきり言おう気持ち悪い。
「……おぇ、気持ち……うぷっ」
そう、両手をついてしまったのだ。
俺が触れた箇所から瞬く間に霜と氷が放射状に走り出す、俺はしまったと顔を青くしながら手を離すがもう遅かった。
冷血者（コゴエルモノ）が生み出した氷結によって、おそらく噂の町の出入り口が凍り付いてしまったのだから。
「やっぱぁ……」
俺は不慮の事故ではあるが端から見れば町に先制攻撃をしているような物ではないか。
第一印象最悪過ぎだろがっ!!
そして案の定、町から続々とゴブリン？
いや、何かでっかい緑の巨人？
と、クロウと同じ様な鬼が二人現れ。その内の一人が大事そうにクリアブルーのスライムを抱えていた。
……俺が悪いのだが、やはり出てきた住人は皆武装をし敵意全開で俺を睨む。
「……えっと……初めましてヨルクです」
と、とりあえず先ずは自己紹介だよな。うん、魔物と言えど礼節に乗っ取り行動しないとな。
しかし、住人達の反応は芳しく無かったよ。
寧ろネームドだと分かると更に警戒心ＭＡＸになっちまったぜ。

「貴様……この町に何のようだ、これ以上攻撃を加えるというのなら容赦せんぞ」
　赤髪の鬼がスライムを抱える紫髪の鬼の前に歩み出ると腰の刀に手を添える。
「お主こそ我の主に牙を剥けるとは、余程命が惜しくないと見えるな。少々灸を据えてやらねばな」
　すると俺の傍らに控えていたクロウも我慢ならないと言わんばかりに俺を庇うように前に出ると足を前後に引き腰を落として拳を固く握りしめた。
　だが、クロウの登場に向こうの鬼達が驚き戦く。
「……生きていたのか……!?」
「あぁヨクル殿のお陰でな、若旦那」
　え、知り合いなの？
　え、え？
　話しぶりからして既知の間柄なのだろう、これはもしや丸く収まるのでは!?
　と、淡い期待を抱く俺であったが、事はそううまく運ばないもので。
「だが、主が違えば既知の間柄であろうと」
「うむ、忠誠を捧げる主に勝利を捧げて見せよう」
　え、えええ……。
　正しく一触即発の雰囲気だよ、何かこれが異世界クオリティーなのか？
　なんか二人からオーラみたいな気が見えるんだけど、どうなってんのよこれ。
《告、エクストラスキル、魔力感知を獲得しました》
　あ、そうですか。
　みんな、安心してくれ俺の目が悪くなった訳ではないようだぜ……。
　てか魔素？
　魔力的なものかな？因みに俺はどうなんだろうな。
　そう思って自らの手を見てみれば。

おぉ！確かに何か出てる出てる、なんか、こう、あれだよ。凄い感じだよ!!
って、今はこんな。いや確かに興奮するけど、それどころじゃなかったよ。
「ストーーーップ」
俺とスライムさんの制止がハモるとスライムさんはなんか凄い糸を出して赤鬼を雁字搦めに俺はクロウの身体を氷で拘束した。
「クロウ、今回は俺が悪かったしさ謝ろう、なっ」
「ベニマルも落ち着けよ。あっちも悪気が有ったわけでも無いようだし」
俺がそう声をかければクロウも納得してくれたようだった。結局俺が気にしてないと先に言っていればこんなことにはならなったんだろうな。
「それにお前怪我してんだろうが、自分の身体を大切にしないのは嫌だな。俺が治療したのを無駄にするつもりなのか？」
俺がそう言って目元を伏せれば、クロウは目に見えて狼狽え。
「いえ!!そんな……申し訳ありませんでした」
「俺のために怒ってくれるのは嬉しいけどさ……クロウが怪我するのは俺、嫌だからな」
「……我はヨクル殿の望むままに」
「あぁ、ありがとうなクロウ」
俺の前で跪くクロウの肩に手を置くと俺の脳内に再び不思議な声が響く。
《告、スキル、氷結操作獲得。冷血者（コゴエルモノ）の能力でスキルが変質しました。エクストラスキル、氷細工（アイスワーク）獲得しました》
おっ？またスキル？
氷細工（アイスワーク）かぁ、名前からすると……。
おっと、スキルの確認は後に回すとして、今は……。
「さっきは俺の不注意で騒がしくして、すみませんでした」
「まぁ確かに驚いたが、謝ってくれるならいいさ。えっと俺の名はスライムのリムル・テンペストだ。プルプル、ボク、ワルいスライムじゃ

ないよ？」
「……スライムが仲間になりたそうにこちらを見ている。ですか？」
「おお！俺の鉄板ネタが分かるとはお主もしや？」
「やっぱりそうなんすね!!俺は霜（ジャックフロスト）男のヨクルです。よろしく頼みますリムルさん！」
やっぱりリムルさんは俺と同じ転生者だった。本当にもう驚きだよ。
他に転生者が居れば良いなと思っていたが、こんなに早く出会えるとは。
でも、何て心強いんだろう。
クロウも確かに俺の味方であるのは間違いないが、やっぱり同じ境遇の人が居るってだけで心の持ちようが段違いだ。
その後リムルさんに連れられ町を案内して貰うことに、町はまだ発展途上らしいが俺からしたらこれを０から造り上げたリムルさんマジ半端ない。
だって、ゴブリンの村を前に見掛けたことがあったが、ゴブリンが住んでいたのはボロボロのテントみたいな作りだったのに対してこの町の住居はちゃんと家として機能しているのだから。
それに加えてこの町では鬼、ゴブリン、牙狼、ドワーフが共存生活をしている、これがあり得ない。
魔物の根本は弱肉強食。これは本能に近いと言うのにここでは互いに協力し生活を豊かにしているのは信じられなかった。
「……リムルさんの超絶カリスマ術のなせる技なのか」
「何言ってんだよ、俺は何もしてないさ。この町はこいつらが悩み考え造り上げた努力の結晶さ」
とリムルさん謙虚だわ聖人なの？
けれど、それは違うと思うな。だってそう言うリムルさんの後ろではそんなことありませんと異議を唱えたいのを耐えている仲間がいるし、そもそもがリムルさんが居なければ成立してないような。
そのまま町を案内されリムルさんの家に招かれた俺、クロウは鬼達と積もる話しもあるだろうと外で待機して貰った。

「さて……」
互いに向かい合う形で座るとリムルさんの眼光が鋭くなる、俺はその目にゾクリと身体を震わせた。
「ヨクル、お前は豚頭族(オーク)について何か知っているか？」
その豚頭族(オーク)とやら。そいつ絡みで何か起きているのだろうか。
「……悪いけど、俺は知らない。力に成れなくてすんません、その……豚頭族(オーク)を探してるのか？」
「あぁ、俺が探している訳ではないんだが……仲間の敵なんだよ」
その言葉で何故かピンと来た。
「……それなら俺も無関係じゃ無いかもな」
クロウが負っていた傷、ジュラの大森林で起きている縄張り争い、リムルの元に居る鬼。
そしてクロウの悔しそうな顔……。
「……もう、俺の家族だもんな。クロウの問題は俺の問題だ」
「……お前良い奴だなっ！」
「やだなぁ。照れるじゃないっすか!?」

3話《泣いた赤鬼と俺》

俺事、霜（ジャックフロスト）男のヨクルと鬼というか正式には大鬼族（オーガ）から名付けで鬼人へと進化したクロウはリムルの町で厄介になることとなった。

俺には元々目的が無かったし訳で、そんな根なし草の俺を案じてくれた同じ転生者であるリムルさんが、この町に居ても良いと言ってくれて。

危うくリムルさんの優しさに涙ぐむ所だぜ。

と言うことでお言葉に甘えることにした。

この町は本当に良いところだった。

住んでみればわかる、ここは心地好すぎる。危うく万年床に付き添うになってしまう位には心地好い。

それに加えて住人も本当に気の良い奴ばかりで余所者の俺を歓迎してくれるし、なんて懐の広い方々だろうか。

ホブゴブリンのリグルドさんにリグルさん、ゴブタ達。

ドワーフでつい最近この町に来たと言うカイジン達。

そして……。

「えっと……ベニマルさんで良いんだよな……？」

「……ヨクル殿」

はい、ベニマルさんです。

ベニマルさんは少ーし、本の少ーしだけ苦手だぜ……。何せ初対面が最悪だったからな。

俺ってば不注意故の事故ではあったがこの町に攻撃を仕掛けてしまったのだから。

言わばリムルさんを攻撃してしまったようなものだろう、臣下の魔物達からしたら警戒されて仕方がないよな。

現に今も睨まれてるし。

正直、ちょっと怖いわ。ベニマルさんのしかめっ面に思わず後退る俺、仕方ないだろうがベニマルさんめっちゃ美形だけど美形が眉を潜める姿って超怖いんだぜ!?

と、自分から話し掛けておいてへっぴり腰の俺の何て情けない

わぁ。
よしっ心の中で己を叱咤激励し、いざ意気込み。
出会い頭に町を凍らせてすいませんでした!!
ＯＫＯＫ、よっしゃ、イメージは良いぞ。
俺が謝る筈だった。
「……申し訳無かった!!」
「うぇ?!何故?!何故に?!」
けれど何故か目の前には土下座するベニマルさん。
てっきりリムルさんに対して失礼な挨拶をした俺を毛嫌いしていると思って、だからこそ許して貰おうとしていたのだけれど……。
とにかくベニマルさんを町中でしかも、周りの目が有る中何時までも土下座させられねぇよな。
「ベニマルさん?!顔を上げてくれよ」
「はい……」
俺は何とかベニマルさんを立ち上がらせると木の影に腰を落として、何故土下座なんてしたのか。お互いに腹を割って話をすることに。
ベニマルさんは終始俯いた様子であまりにも暗くて俺、居心地悪いよ、うん。
「そうだ、ベニマルさん。アイス食べるか?」
「アイ……ス?申し訳ありません、知識不足ゆえヨクル殿の仰っているアイスが俺には理解が及びません」
なんと、アイスを知らんとは……かぁー!勿体ない!!
では、存分に食すがよい!!
「ジャーン!!これがアイスだ!!」
俺は懐からジュラの大森林で採取した果汁を俺の冷血者(コゴエルモノ)で急速冷凍したアイスを取り出す。
俺の自信作なんだぜ、食べ過ぎるとクロウに叱られるがな!!しかし、けれども止められんのよ、此れが!!
「ハムッ……んーーー!!旨いっ!!」
俺がアイスを頬張り口内に広がるひんやりとした冷たさ、果汁の甘

味を満喫している様子を見て。ベニマルさんも恐る恐る口に含む。
　初めはアイスの冷たさに肩を跳ねさせていたが、慣れてくると目を丸くしながらアイスを堪能しているようで、良かった良かった。
「旨いか？」
「はいっ！初めて口にしましたが……とても美味しいです。ありがとうございますヨクル殿」
「いんや、気にするな。ただクロウには内緒だぞ俺が叱られちまうからな」
「ハハハ、了解です」
　そして、アイスをじっくり味わい食べ終わるとベニマルさんはポツリ、ポツリと語り始めた。
「俺と妹のシュナは……大鬼族（オーガ）の棟梁、その子供でした。いわば次期棟梁と言う立場です、いつか俺が後を継ぎ里を納めるんだとそう思っていました……あいつらが襲ってくるまでは……」
「……里は豚頭族（オーク）の大群に一瞬で飲み込まれてしまい。俺達五人は里の仲間に庇われながら豚頭族（オーク）から逃走したんだ……もう俺達しか残っていない、そう思っていた」
　だが。
　ベニマルさんが俺の手を掴むとグッと握りしめる、未だ冷血者（コゴエルモノ）の制御が不十分だからベニマルさんの手が霜で覆われてしまい俺は慌てて手を離そうとしたが、真っ直ぐに俺の目を見るベニマルさんに気付くと息をのみ動けなくなってしまった。
「ヨクル殿……仲間を、クロウを救ってくださりありがとうございました。俺は頭に血が上ってしまい録な対話もせず激情のまま刃物をクロウの恩人に向けてしまいました、誠に申し訳なかった！」
「……良いんだよ。辛かったんだな、俺には貴方の辛さを十全にわかってはあげられないけど辛い時は泣いたって良い、叫んだって良いんだ。全部吐き出したら前を見て歩いて行こう……な」
　ベニマルさんの抱える一族の敵打ちや里を失った喪失感が少しでも和らいでくれるならその一心で俺は俺より身体の大きいベニマルさんを抱き締めると背中を擦った。

ベニマルさんの嗚咽が微かに聞こえ、肩が震えて額が押し付けられた肩が熱く濡れる。
……きっと誰にも打ち明けられなかったのだろうな、仲間の鬼には棟梁の息子と言う立場から弱く情けないところを見せるわけにも行かない。
かといって主君であるリムルに頼ってしまっては、臣下として示しがつかない。だから自分でどうにか出来るのだと毅然とした姿を見せつけなければならなかったのだろう。
良い意味でも悪い意味でもベニマルさんは真っ直ぐで辛抱強い方なんだろう。悲しみも辛さもグッと噛み締め、復讐の炎を絶えず燃やす為の燃料としていた。
だが、復讐に燃えていた矢先、命からがら逃げのみ生き残った同族の姿を見て、これまで押さえ付け耐えていた物が堪え切れずに溢れてしまったんだ。
魔物と言えど意志があり、想いがあり、心がある。
仲間を殺されて辛くないわけがない、悲しくないわけがないんだから。
「……くっ……あぁあぁ……！」
「……頑張ったな、此れからは俺も頼ってくれな。俺の命を掛けてお前達の敵打ちに全力を尽くすから」
何れくらいそうしていただろうか、そろそろ俺も自分より体格の良いベニマルさんを支えていられないから、足が痺れてきたよ。
もう、いいかな？
そっと肩口を横目で見れば穏やかな寝息を立ててぐっすり眠るベニマルさん。
そっと身体を離し起こさないようにベニマルさんの身体を横たえる。
「……うっわぁぁぁぁ……足が……ビリビリするぅぅ……!!」
両足を全力で伸ばし全身に走るビリビリと痙攣するような痺れ、ベニマルさんを決して起こすまいと俺は両手で口を塞ぐと静かな悲鳴

を上げる。
「いっつ……それにしても本当に不思議な体験だよな」
異世界転生なんてまるで小説やアニメじゃないか、まさか本当に実在し況してや俺がそれを体験するだなんて想いもよらないじゃないか。
これまで転生してから魔物に襲われれば凍らせて力を奪っていた。まるでＶＲみたいな感覚で生活していたんだ。
だけどクロウとの生活、リムルさんと話をし、ベニマルさんの想いを聞いて、俺の心境は変わりつつある。
俺の認識が二次元から三次元へ。空想、想像から現実に。
「……俺は、この世界で死んだら。今度はどうなるのだろうか……」
「……生きて行くしか無いよな。全力で全速力でな」
ベニマルさんの寝顔を何となく見詰めながら、そう心に決めた俺。
えっ？てかベニマルさん睫毛長過ぎかよ、ヤバくね？
魔物に美容の概念とか無いよな、手を加えてなくてこの肌、この睫毛。こりゃ現実の女子高生。ＯＬ。美容ガチ勢が嫉妬の嵐ですぜ、こりゃあ。
約３０分後。
目を覚ましたベニマルさんとバッチリ目と目が合う―！
「……うあっ!?」
「ちょっ!?と、溶けるからぁーー!!」
ベニマルさんを驚かせてしまった俺。咄嗟に作り出された深紅の炎、その熱気が俺の全身を猛烈に熱して来たから汗が出ているのか俺の身体が溶けているのかよくわからないんだぜ!!
ギャァァァ!!
「……と、溶ける所だったんだぜ？ベニマルさん、いやベニマルくん？」
「まっ事申し訳ございらん……」
と数時間前のデジャブを再び繰り返した俺達、だが数時間前には無かったであろう絆が確かにそこにはあった。

◆◆◆

今日はクロウとベニマルと共にリムルさんの町の開拓を手伝う事となった、と言っても俺が無理に仕事を貰ったわけだが。

だってあのままじゃニートじゃん!?

町でブラブラ、他の皆が汗かき働いてるのに罪悪感を感じるなと言う方が無理だっての。

それと自慢ではないがあの日の一件以来俺とベニマルさん、いやベニマルとはマブになった！

うん、大の仲良しとなったから行動を共にすることが必然的に多くなり、その事にクロウが嫉妬？

しているのだろうか良くベニマルに絡むように。

現に今も移動中にも関わらず俺の背後で何か言い争っているような雰囲気がバンバン伝わってくるわ。

そうしてリムルさんから指定された狩り場に到着。

仕事の内容は食料の調達。

今までは食べる時に食べる分だけの食料しか狩って来なかったらしく。毎日のように狩りに出ていたみたいで、狩りすぎても腐らせるだけだからな。

リムルさんの捕食者で体内保存していてもいいんだが、それだと食料が必要な時にリムルさんが居なければいけなくなる。

リムルさんの行動を制限することになってしまう。

それでは町のトップとして有事の際直ぐには動けなくなるのでは無いか、そう思った俺。

そこで俺の登場。

俺の冷血者（コゴエルモノ）なら冷凍、凍結何でも御座れでございます優れもの。

クロウ、ベニマルの討伐した魔物に触れて凍結するだけの簡単なお

仕事。
「……暇だなぁ」
討伐すれば触れて。討伐すれば触れて。討伐すれば触れて。
この繰り返しで俺の傍らには魔物の肉の山が築かれており、加えてあの二人。
目の前で俺が多く討伐しただの、我の方がとか、なんか言い合いしているし。
ベニマルはまだ若そうだから血気盛んなのもわかるけれど、クロウに至っては我とか古臭い話し方のくせして超武闘派で血の気が多いんだから。
「……おーい、そろそろ良いんじゃないかなぁー！」
声を掛けるが一向に止まらない殺戮解体ショーにやれやれと首を降る。
と、油断していた俺は背後から近付いてくる黒い影に気が付かなかった、俺はその魔物に殴られた瞬間。
ピキィン……！！
魔物が氷像へと変わり果てる。
「お!?おぉビックリしたぁ」
しかし、本当に強いスキルだよな。自画自賛で申し訳ないが、本当に強いと思う、凍らせるし奪い取るしで。
あっ……スキルと言えば氷細工（アイスワーク）、あと呪怨者（クロキモノ）の効果を確認するのをすっかり忘れていた。
丁度今暇だし、俺は静かに目を閉じ己の内を意識すると仄かに感じるスキルの存在。
「氷細工（アイスワーク）」
そう唱えた瞬間、隣で凍らせた獲物の氷が枝分かれし俺の前まで伸びてくるとフワリの氷の花が咲いたではないか。
お、おぉ？
これは……なんて精巧な氷花何だろうか……思わず溜め息が出る程綺麗だ。
氷細工（アイスワーク）は冷血者（コゴエルモノ）で発生させた氷を緻密に操作し細工を施せるスキ

ルみたいだな。
そして驚くことに氷細工(アイスワーク)で造り出した物はオートで動かすことが出来た。
だって、目の前で小さな氷で造られた兎がピョンピョン跳び跳ねているんだもん。
あー、可愛いい。心がピョンピョンするんじゃぁ。
……そして呪怨者(クロキモノ)……。
なんて物騒なスキル。呪怨だぜ？呪いに怨念だぜ？絶対楽しいスキルな訳がないだろうが。
何でこんなものと思うけれど持っていれば気にはなるもので、使わなくても効果は知っておきたいじゃん？
と言うことで。
「呪怨者(クロキモノ)」
と、スキル名を唱えて見たけれど氷細工(アイスワーク)のように目に見えて何か変化が起きた様子が無い。
可笑しいな、首を傾げ再び唱えても変化が無い。
「あれれー？おっかしいなぁ……外れスキルなのか？」
結局その日は呪怨者(クロキモノ)の効果は確認出来なかった。
そして満足したのだろうスッキリと爽やかに汗を拭う鬼共。
やっと終わったかと俺はベニマルから差し出された手を掴んで地面から立ち上がると。
山の様に積み上がった凍結済みの獲物を見上げ。
どうすんのよ、これ。
目測だが、凡そ５ｍくらいの山だ。
持って帰るにしても俺にはリムルさんみたいに吸収の能力が無い為、地道に足で運ぶしか無いと言うのに。
どうすんですか？
俺はそう目で訴えながら両隣の鬼共の顔を見るが、二人して勢いよく顔を反らす。
ふざけんなよ!?
「あぁーもう!!バカクロウ!!」

「何故!?我のみ!?」
だってベニマルに手を上げる訳にはいかないだろ、だが俺の憤りは発散させなければ。つまりクロウが殴られるしか無い、それしかない。
結局俺達では持って帰ることが出来ず。
ベニマルの念話でリムルさんを呼んで貰うことになってしまった。
折角お世話になってる町へリムルさんの役に立てると思ったのに結局頼ってしまっては意味がないではないか……。
すると、空から飛んできてくれた美少年？美少女？
性別リムルの美人さんが現れた。
「たくっ何やってんだか、張り切りすぎだろう。これは」
リムルさんも同様に獲物の山を見上げて苦笑いを浮かべながら捕食者で山を取り込んでくれて。町に戻る道中鬼共はトボトボ落ち込んだ様子だった。
「何か疲れるけど、楽しいですね。これ」
「そうだな……見てて可愛いよな」
俺達の言動で一喜一憂する様子がこう言っては悪いが何とも微笑ましい。
その日の夜は俺が冷凍してきた大量の肉や果物を使用して大宴会となり、皆でどんちゃん騒ぎ。
俺は自信作の果実アイスをリムルさんに披露してみせた。
「じゃーん!!」
懐から取り出したるはアイスキャンディ。
「おおぉ!?こ、これは!?旨い!!ちょーうめぇ!!」
「リムル様、それは何ですか？」
リムルさんの声が人を呼び、次から次へと人が集まり輪になる。
「それは！アイス！ヨクル殿、俺にも!!」
そして、ベニマル。
こいつは前にアイスの旨さを知っている為我先にと俺に飛び付きアイスをねだる始末。
「えぇい!!欲しい奴は並べや!!」

こうして皆でアイスの至高の甘さを堪能し、こうして大宴会は幕を閉じることに。

俺もクロウと共に寝床に戻ったのだが……。

まさか、あんなことになるとは、この時の俺は想像もしていなかった。

「ヨクル!!」

4話《俺のスキル》

怒髪天を着く勢いで部屋に駆け込んでいたリムルさん。
ドスの効いた声の超怖いモーニングコールで飛び起きた俺、何が何やらさっぱりわからないまま。
言われるがまま、と言うか胸倉を掴まれ強制連行状態でリムルさんに連れていかれ、ある寝所に放り込まれた。
尻を強く打ってしまい痛てて、と擦りながら寝所を良く見れば、横たわるベニマルとクロウの姿があった。
え、寝てる？
……ってそんなわけ無いよなぁ。
だってリムルさんが怒り俺を連れてきたと言うことは俺に何かしらの落ち度があり、二人が死んだように寝ているのには理由があって俺が関係しているのだろう。
「……えっと……これは？」
だが、一応聞いておこう。もしや俺は悪く……。
「知らん。大賢者の解析によるとこの症状は呪い……らしいな。ヨクルお前が関係してるんだろ。コイツらに纏わりつく魔素はお前のものだからな」
俺が悪いですぅ!!
えってか魔素に識別とかあったの？
指紋みたいな？声紋みたいな？
いやいや、そんなことより今はこっちだろう。
横たわる二人の口元に手を寄せれば確かに呼吸はしているし、胸の鼓動は正常だ。
しかし、何をしたところで一切起きる気配がない。
それどころかだんだんと呼吸が弱くなって居るような気さえしてくる。
いや待って。このまま死んじゃうなんてことないよね？
何が豚頭族（オーク）を倒して敵打ちだよ、このままじゃ俺が新たな敵じゃないか。冗談じゃねぇよ!?

てか、これはあれだろ。
呪怨者（クロキモノ）の仕業だろ、寧ろそうとしか考えられんわ。でも、昨日唱えた時は何も起きていなかったのにどうして今更？
「おい……このまま死ぬなんて事になったら……許さんからな……」
「……ひぇ……」
うっわ……ちょーこえぇんだけど。
いやいやでも、俺も呪怨者（クロキモノ）の事よく知らないんだよなぁ。
どうしたものか、まさに八方塞がり。
何で俺にもこうなってしまったか原因はわかるけれど。何故かが分からん、効果も知らんしどうしたら解除出来るかも不明だし。
本当に死んでしまうのか。
それすらも俺には何も分からないのだから……だけど。
チラリと後ろを見れば……激おこスライムさんが仁王立ちしているし。
何が出来るか分からないけれど俺が原因なら何とかしなくてはいけない。
よしっ。
いっちょやってみるか！
「……と、とりあえず。失礼しまーす」
これが呪いという症状なら俺の冷血者（コゴエルモノ）で症状を遅延出来るかもしれない。
そっと横たわる二人の身体に触れてみれば、確かに何かが纏わりついている感覚。
俺の冷血者（コゴエルモノ）とは全く別の意味でひんやりとした冷気が肌を撫でて行く。
これは、まるで……まるで……心霊的なあれみたいな感覚に近い。
ゾワッと全身に鳥肌が立つがビビっていられるか。俺の背後には幽霊なんかよりよっぽど怖いスライムさんがいるんだぞ!?
てか、スライムの貫禄じゃねぇわ!!
やるしかねぇよ!!ダメ元だろうがやらないと俺がやられる!!
「凍れぇぇぇぇぇ!!」

俺は腹野底から気合いを入れて凍らせたさ、だが俺の呪いはなかなかに粘り強い。
凍らせた端から氷を突き破って寧ろ俺にまで牙を向いて来た。
黒い禍々しい気配が目に見える程、濃密に集まり可視化した呪いが黒い触手となり襲ってくる。
だが、舐めるなよ。俺が俺のスキルに殺されて堪るか!!
俺の掌から冷気が吹き出し、リムルさんの部屋をも巻き込み凍り付く。
可視化された触手は俺の目と鼻の先で完全に凍り付き動きを止めた。
しかし、俺の冷血者(コゴエルモノ)の能力の本質は停止と停止した命を奪い取る事だ。
この呪いの進行を停止させた所で直せた訳ではない、かといって奪い取るにしても元々の出所が俺なのだから奪い取れる訳もない。
なら、どうすればいいか。
リムルさんに任せればいい。
他力本願だが、実質俺には打開策のだの字も浮かんではいないし。
このまま俺が呪怨者(クロキモノ)を制御するまで凍らせても置けないだろう、あまり時間が経ってしまえば呪いを停止どころか二人の命が停止してしまう。
そうだ、あの人ならもしかしたら……。
そう思った俺はリムルさんの元へ歩み寄ると頭を下げて頼んだ。
「俺を捕食(喰って)くれ」
リムルさんが驚いて俺を見ているよ。
ははは……仕方ないだろ、だって打開策は今のところ此しか無いんだからな……。
俺には解決出来ないなら解決できるに人(大賢者)に任せてしまおう。
これが俺の出した解決案だ。

◆◆◆

突然今朝。
「リムル様!!」
俺の寝所にリグルドが飛び込んできて何事かと飛び起き、案内された場所には横たわるベニマルとクロウの姿。
皆の話によると死んだように眠り続けているそうだ、そんな大袈裟な昨日の宴会ではしゃぎすぎたんだろう、こやつめ！
なんて考えていた俺だったが、実際にみてみれば間違いだった。確かに寝ているクロウとベニマルから妙な気配を感じる。
念のために大賢者さんに解析して貰ったらこれは呪いだって言うし。解除は出来ないそうで。
ただ魔素はヨクルのものだと言うものだから、俺もちょっと冷静ではなかったと思う。
もしかして……そんな最悪の可能性を考えてしまうと一気に血が昇っていたな。
全速力でヨクルの元に走り俺はヨクルの言い分も聞かずに胸倉を掴むと強制連行、二人の前に突き出し問い詰めた。
そして、全てをヨクルに押し付け俺は見ていたんだ。何とかしろよって何様だよって話だよな。
ヨクルなんて、俺よりもこの世界に来るのが遅く。転生して数日だろう、そんな奴に責任を押し付けるなんてな。
現にヨクルは慣れないスキルを駆使して呪いの進行を止めた、呪いという未知の症状へ何とか対抗してくれた。
ヨクルが呪い共々住居を凍り付かせた時に俺も漸く冷静になってきており、ヨクルに全てを押し付けた事を反省したさ。
改めて協力し対抗策を考えようかという時に。
まさかあんなこと言われるとはな。
だって自ら捕食（喰って）くれだなんて言われるのは思わんだろうが。
恐らくヨクルの態度、対応を見る限りヨクルのスキルであるのは間

違いないが。
本人にも解除が出来ないのだろう、もしくは制御が出来ていなくて誤爆、暴発を起こしたのかも知れないな。
……だが、スキルの暴発なんて起こり得ることなのだろうか。俺が覚えている限りでは心当たりはないけれど……？
と思考巡らせるが……。
あっ……そうか。
俺には大賢者さんが居るんだもんな。暴発、誤爆なんて万が一にも起こり得るわけがなかった訳でヨクルのように手探りでスキルを確認していく必要もなかったんだな。
だって大賢者さんがスキルの詳細、発動のタイミングまで教えてくれるんだから。
本当に有能すぎ大賢者さん!!
そう考えると何だが俺がズルをしているみたいで少しヨクルに対する後ろめたさを感じるな……。
だが、原因を詮索している時間は今は無い、そしてヨクルの言う様に手立てがないのも事実だ。
コイツらをこのまま凍り付けにしておくわけにも行かないからな、一刻も早く解放してやらんと。
さて……大賢者！
ヨクルを捕食し呪いのスキルを解析。出来るか？
《可能です。個体名ヨクルを捕食しますか？　ＹＥＳ／ＮＯ》
「んじゃ今から喰うからな」
「……い、痛くしないでね……！」
「頬を赤らめるな!?大賢者、ＹＥＳだ！」
俺の了承の声と共に捕食者が発動、俺のスライムボディがブワッと広がるとヨクルを包み込んだ。
《補食完了。収納し解析を始めますか　ＹＥＳ／ＮＯ》
「ＹＥＳだ、出来るだけ早めに頼むよ」
《了。解析を開始しました。完了まで３７分程かかります》
と、大賢者が解析を始める。

すると、俺の脳内に誰かの記憶が流れ込んできた。
酷いノイズの後、俺にとって見慣れたコンクリートジャングル我が故郷日本の街並み。
歩道を詰まらなそうに据わった目で歩く青年にピントが合う、恐らくあれが転生前のヨクル何だろうな。
これは解析に伴いヨクルの記憶が流れ込んで来ているんだろう、なんか勝手に他人の生活を覗き見て背徳感に罪悪感が半端じゃないぞ。
「おーい、深海！」
「……なんだよ、仕事で疲れてんだよ」
「わかってるって本当に冷めて冷たい奴だな、俺じゃなきゃとっくに友達止めてんぞ？」
「あー、はいはい。止めたければ止めればいいだろ。俺はかまわない……」
ふむ、深海は随分と冷めていたんだな。
今とは大違いじゃないか？
死んで吹っ切れたのか？
すると場面が飛ぶ。
雪山で遭難し、雪に覆われた深海。
転生直後のようだ。
雪山で死んだ深海は俺同様に世界の声を聞いて転生したようだ。恐らく俺と同じようにジュラの大森林に来たんだろうな。この辺りにはまだヴェルドラの魔素が滞留しているんだし。
だが、ヨクルの飛んだ先は一面の雪景色だった。
『何処だ……ここは……？』
まさしく永久凍土の大地という様相。
ヨクルはジュラの大森林に転生した訳じゃなかった。
それじゃあどうやってこの凍土の世界から何故大森林に来れたんだ……？
ヨクルの話では目覚めたら大森林だったって言ってなかったか？
すると猛吹雪の奥から歩んでくる人影。
その人影を見た瞬間、大きく高鳴る鼓動。

『……!?』
それは俺の鼓動では無い。
体内に収納されたヴェルドラが物凄く反応している、と言うか半ば拒絶に近い。
何だ!?何だ!?
人影はヨクルに近づき何かを囁くと空間に穴を開けて存外に放り込んだでは無いか。
そうしてヨクルはジュラの大森林にまで来たようだな。
と、そこまでの記憶を見ると俺の身体は引っ張られ意識が凍り付いた室内に戻ってきた。
「ふぅ、やっと戻ってきたか。と言うか勝手に覗いてしまって申し訳なかったな……」
しかし、不思議な体験だった。
何故あれ程までヴェルドラが動揺、拒絶をしたのか。あの人影は一体何だったのだろうか。
《告。個体名ヨクルの解析が終了しました。呪いのスキル、名称呪怨者(クロキモノ)》
《能力の詳細。己の魔素を媒介とし対象者の体内に呪詛を流し込むスキル。自身の魔素の量に比例して呪いが強くなり対処者の身体を蝕み、死に至らせる。呪いの加減調整は可能。呪いの解除は本人にしか出来ずそれ以外で無理矢理解除した場合は自動反撃行動に移行。解除方法は対象者の身体に浮かび上がる黒い掌の痣へ術者の血印を押すこと》
……こわっ!?
想像してたより何倍も怖いぞ、これ。
まぁいい。知りたかった解除方法はわかったのだし、そろそろ吐き出してやろうかな。
「大賢者、ヨクルを取り出すからな」
《了。個体名ヨクルの体組織の再構築。完了、排出します》
大賢者の声と共に吐き出されたヨクル。
「ほら、早く起きろー」

ぺしぺしっ。
色白なヨクルの頬を軽く叩いてやれば、眉を潜め身を捩るヨクル。
「……んっ……あっあぁ……」
「変な声出すなっ!!」

◆◆◆

「……んっ……あっあぁ……」
目を覚ますと氷の部屋だった。
いや、たしか俺はリムルさんに喰われて……。
「そうだっ解除方法!!」
「ほら、大賢者さんが調べてくれたぞ」
おお！ありがたい!!
え～と、何々……。
読み進めるほどに己のスキルながら陰湿で粘着質で陰険な内容に自分でも頬がひきつっているのが分かるわ。
それより解除方法の面倒さときたら、そもそもが解除する前提では無いのがマル分かりだ。
これは使用した＝相手を殺すに等しいよな。
俺は解除方法に従い二人の身体を隈無く調べるとやはり痣があった。黒く禍々しく浮かび上がる痣。
ベニマルのは掌にクロウのは肩甲骨の右側に、そのどちらもが昨日俺が触れた場所に浮かび上がっていた。
ベニマルには地面から立つ時に手を貸してもらっていたし。
クロウには獲物の事でその辺りを確かに叩いていた。
その時に俺の魔素呪詛が入り込んだんだろうな、すまなかった……。
今助けてやるからな指に犬歯を突き立て皮膚を噛りきる。
てか、これまで歯で指を切るなんて事をしたことがあるわけ無い

俺、当然の如く上手く出来るわけがなく皮膚はボロボロ、若干肉が見えてしまう程に深く噛んでしまった。
やはりアニメのようには上手くいかないものだと普通にナイフで切れば良かった……。
だって超いてぇぇんだもん!!
だが……やってしまったものは仕方ないだろう。我慢、我慢だ俺!!
ズキズキと鈍く断続的な痛みに目尻に涙を堪えながらも黒い痣へ血印を施せば黒い痣はスゥーと溶けるように消えていった。
ベニマルとクロウに纏わりついていた黒靄も消え、無事に解除出来たことにほっと胸を撫で下ろした。
「はぁ……よかった。おっとと氷も溶かさないとな」
床に掌を当てれば氷は魔素に変換され俺の元へ戻り、室内は今朝と全く同じ状態に戻った。
それじゃあ……謝らないとだよな、うん。
「リムルさん、俺……ごめんよ。まだスキルを上手く使えなくて、こんなことになっちまってさ……」
そういって俺が頭を下げればリムルさんは困ったような笑顔を浮かべると俺の頭を撫でてくれた。
「俺の方こそ悪かったよ。ちょっと……いや、かなり頭に血が昇ってしまってな。お前だって転生したばかりだったのにな……すまなかった」
えっ……許して貰えるのか……？
こんな俺を許してくれるって言うのか？
「……いいのか？俺を許してくれるのか？」
「……あぁ。許そう、若輩者を許して支えるのが先輩の勤めだもんな！」
そう言って俺を許してくれたリムルさん。
なんて心の広い人なんだろうか。こんな先輩、生前の俺の回りには一切いなかったんだが？
「……ごめんなさい、ありがとう……！」
俺は涙を溢しながら差し伸べられた手を強く握り締めると謝罪と

感謝を伝えた。
あ、決して指の痛みで泣いているわけでは無いことを伝えておく。
痛いけど痛いんだけど……泣いているのは胸の痛みにだからね!!
こうして俺のスキル、俺の個性豊かで一癖も二癖もあるユニークスキル。
冷血者(コゴエルモノ)、呪怨者(クロキモノ)の能力詳細がわかった、訳なんだが。
なんか、リムルさんに比べると……って感じだよな。
てか、大賢者様。
俺も欲しいわぁーーー!!
結果、大賢者様最強。

5話《特訓、特訓、特訓!!》

「くらぁぁぁあ!!」

俺が放った氷の柱は真っ直ぐにリムルさんに向かって行くが、身体が瞬時に粘液状に変化すると氷を取込み補食、そのまま距離を詰めて来る、不味い不味いー!

近づかれてはなす術がなくなるわ!!

俺は焦って背後に飛び退こうとするが、足が地に張り付いたように動かない。

「いつの間に!?」

俺の足を見てみればいつ使用したのかもわからないが。リムルさんのスキル、粘糸によって足が絡め取られ地面に固定されているではないか。

不味いぞ!!これじゃあ動けない!!

そして、焦っている内に距離を詰めてきたリムルさん。

「いやちょ!?まっ!?!?!!」

「待つ訳無いだろー!!」

華奢な細腕から繰り出されたとは思えないくらいに重い拳が俺の鳩尾にめり込む。

クリーンヒット!!

ミシミシと軋む音を立てながら、えぐり込むように放たれたボディブロー。

しかも、足元が固定されているために威力を分散させること無く威力が一切逃げること無く俺の身体に叩き込まれる。

「ぐほっおぉぉぉお!?」

あまりの威力に胃液が逆流してきて口内が酸っぱくなり目の前がチカチカ発光する。加えて足元の粘糸が威力に耐えきれずブチブチと千切れてしまい。

俺は錐揉み回転しながら背後の木々に背中を強打する羽目に。

「いってえええええ!!ごはっ、ごほっ!!」

俺、霜(ジャックフロスト)男のヨクルは只今、えっ?本当にスライムですか!?

聞きたくなるようないや問い詰めたくなるような強さを存分に見せ付けてくるスライム、リムルさんの鬼畜特訓を受けていた。
ていうのも先日の俺のスキル。
呪怨者（クロキモノ）事件という騒動があったのだが。
その際にリムルさんの大賢者様に改めて俺の事を解析して貰ったのだ、俺の事だが俺が一番良くわからないからな、ここまで良く手探りで来れたものだと感心するわ。
と言うことで解析結果がこちら。

◆◆◆

個体名：ヨクル。
種族：霜男（ジャックフロスト）。
所有スキル。
ユニークスキル
・冷血者（コゴエルモノ）
・呪怨者（クロキモノ）
エクストラスキル
・氷細工（アイスワーク）
・魔力感知
種族固有スキル
・森術士（ドルイド）ー脈動回復、大自然
・雪遊び
・雪隠れ
耐性
・痛覚無効
・凍結無効

◆◆◆

なんか、知らんスキルが沢山出てきたんだが……。

まぁいいか、とりあえず一番使うスキルを知っておかなければまた呪怨(クロキモノ)のの二の舞になってしまう。

さぁこれが俺のメインウェポン、基本攻撃にして最恐の凍結スキル冷血者(コゴエルモノ)の詳しい詳細がこれだ。

・冷血者(コゴエルモノ)

凍結：接触状態にある対象に自身の魔素を流し込み、対象の魔素の動きを阻害、停止させ凍らせる。効果範囲は物質体、精神体、スキル、魔法、身体機能、五感等。

強奪：凍結した対象からスキル、魔素を奪い取る。

なんか、単純に凍らせてるのかと思っていたのにこれも魔素を流し込む系だったみたいだな。

冷血者(コゴエルモノ)も呪怨者(クロキモノ)と同じように本人の技量に左右されるようで俺に依存するようだ……あぁ……辛い。

そして。

メインウェポンの補助スキルで応用。

エクストラスキルの氷細工(アイスワーク)。

・氷細工(アイスワーク)

造形操作：魔素を流した氷を操作し氷像を造る。

生命付与：込めた魔素に応じて氷像が意思を持ち行動する。

そして、冷血者(コゴエルモノ)の氷を使って氷細工(アイスワーク)で氷像を作った場合。

氷像は冷血者(コゴエルモノ)の特性を引き継ぐ……らしい。

この引き継ぐの意味が今一ピンと来ないが……その内試してみよう。

あとは……。

謎スキルの雪遊びと雪隠れ、大自然だが、これはまた今度にしよう。

と、とりあえず大賢者様に解析して貰った訳だが。どうやら俺のスキル殆どが魔素コントロールに依存する物が多いようで。

リムルさんみたいに大賢者様のバックアップが無い俺は必死こいて魔素コントロールを身体に叩き込むしか無いんだろうな。
なんて意気込みリムルさんに特訓をつけて貰おうとした俺だが。
「お前……もう超精密に魔素をコントロール出来てるじゃないか」
リムルさんと大賢者様に手解きして貰って１０分後にはリムルさんを越える程の超精密コントロールが出来てしまっていたのだから超ビックリ。
自身の腕を凝視すれば辛うじてうっすらと見える超極薄の魔素の膜。
「魔素コントロールはもう出来てんだろ？なら実戦で身体を慣らさないとな！」
「……え……？」
こうして俺は地獄に片足を突っ込んだのだった。
そして話は冒頭に続くんだよ……。
「いってぇぇぇぇ!!ごはっ、ごほっ!!」
「スキル込みの実戦はこんなもんでいいだろ、次は……ハクロウ！」
「……はっ！お任せを……さぁヨクル殿刀を取りなされ」
リムルが声を掛けると瞬時に姿を現したハクロウ、刀を鋭くヨクルに突き付けるとニタリと笑った。
「ぜぇはぁぜぇはぁ……俺に休みは無いのかぁぁぁあ!?」
怖ぇ……。
だが、逃げ出せる訳にもいかない、てか逃げられん。だって前方の龍（リムル）、後方の虎（ハクロウ）。
ここからどうやって逃げろって言うんですか、ちょっとやりすぎじゃない？
だけどそんなこと言える雰囲気ではないんだよ。
ならやるしかないじゃない!?
俺は渋渋と刀を掴んださ、仕方無いからな、仕方無いからな!!
……だが、嘗めるなよ？
俺相手に気持ち良く勝てると思うなよ？
俺が構えると同時にほぼ残像のハクロウが斬りかかって来たが、俺

は紙一重で避ける。
「……むっ……ほほぉこれは中々……楽しめそうですな」
「はっは！嘗めんなよ白爺！」
そのつぎも、そのつぎも、そのつぎも。
俺はハクロウの剣戟、その全てを紙一重で避け続ける。
次第にハクロウは緩急、フェイントを織り交ぜ攻撃を仕掛けてくるが。
残念ながら俺には分かるんだよな。
「ヨクル殿。お主刀を噛っておるな……」
「ご名答だ、俺は昔剣道をやってたからな。その頃から俺には相手の攻撃の道筋がわかるようになった。呼吸、リズム、気配、視線、その全てが伝えてくるんだよ、ここに打ち込むってな！」
ガッキィィイン!!!
鍔迫り合い、両者の刀がギチギチと競り負けまいと火花を散らす。
「話してる途中で攻撃するのはっ、どうなんだよ！」
「ほっほっほ、いやはや当たらないとはムカムカするものですな。少々ズルかったですかな？」
「分かるから良いけどさ？」
「面白いではないか、では先読みしてみよ」
「上等！俺に剣道で気持ち良く勝てると思うなよ!!」
「勝気は無いのかよっ!?」
鍔でハクロウの身体を押し退けると距離を取り、再び遠間から攻め始める。
ジリジリと摺り足で距離を詰めて行く、けっして焦らずゆっくりと相手の動きを誘うように足を運んで行く。
しかし、流石剣鬼（けんき）と名高いハクロウ。俺の誘いには中々乗ってこない。それ所か寧ろ俺が誘い出されている気さえしてくる、その間も終始ハクロウは余裕の笑みを浮かべ。俺は表情の詠みづらいハクロウにギリッと奥歯を噛む。
じっくり、じっくり。
次第に交わり出す両者の切先。

カチン、カチン。
刀が鳴り響き、周囲に木霊する
ハクロウが上段に刀を構え勢い良く振り下ろす！
「ハッ!!」
俺は下段から振り下ろされた刀を擦り上げるように刀を振り上げる。
ガキンッ……!!
「見事……!!」
「へへっ……中々やるもんだろ？」
「だが……まだまだ青いですな。油断大敵ですぞ？」
一瞬ハクロウの言っている意味がわからなかった俺だったが、直ぐにその言葉に意味を理解する。
ハラリ。
確かにハクロウの刀は受け止めた筈だった、しかしハクロウの台詞と共に俺の来ていた服の片袖が切れて落ちた。
「いつの間に……!?」
「ほっほっほっ……面白い勝負であったが儂の勝ちですのぅ」
「そうかよ、それは良かったな。次は負けねぇし気持ち良く勝てると思うなよ！」
「楽しみにしてますぞ、ヨクル殿」
悔し紛れに叫んだ事にハクロウは穏やかだが闘争心にギラギラ輝かせる目に俺は叫んだ事を後悔した。
売り言葉に買い言葉。
俺の言った事でいずれリベンジする事が確約されてしまったのだから。
そして魔素コントロールを完璧にするだけに始めた特訓は趣旨がガラリと変わり。
リムルさんによるスキル指南、ハクロウによる剣術指南そして何故かクロウによる本格体術教室。
そうリムルさんから告げられた俺は頬が引き取り苦笑いするしか無いだろうが、だって再びあの地獄のような特訓をしなければならな

いんだから。そりゃ断りたいのは山々なんだよ？
だけどこの世界で生きていくにはこうする他ないんだよな。
てか何故クロウも混ざってんの？
俺に剣術の他に体術も修めろって言うのかこの従者は、それよりもお前（クロウ）がいるなら俺が無理に体術覚える必要なくね？
そうだよ、クロウが守ってくれればいいじゃん！
そうすれば体術の特訓は削れる筈だ。
俺はクロウに話の趣旨を説明するとクロウなら守ってくれるフレーズがグッと来たのか満更でも無さそうな顔を浮かべるクロウ。
イエス、後もう一声。
「……しかし、主殿。主殿の攻撃方法は遠距離に片寄っております。勿論我が主殿を何時なんどきでも御守りいたします……ですが、もしも、万が一を考えますと……」
……わかったよ!!
だから、そんな筋骨隆々の癖に子犬のような目をするな!?

こうしてリムルさんによる。スキル連、剣術、体術のトリプル特訓。俺、ヨクルの超強化特訓が開始された訳で……。
そんな特訓の日々にも心の休まる一時があった。
「はぁーうまっ……さいっこう」
口の中に広がる優しい甘味、ミルクの香りが頬を緩ませる。
そう、ソフトクリーム!!
これまでは果実のアイスキャンディしかバリエーションが無かったが先日ミルクが手に入ったと聞いた俺。
その日の特訓を秒で終わらせミルクに飛び付き、ソフトクリームの開発に取り掛かった。
と言っても本格的なソフトクリームを作れるわけもなく。
なんちゃってソフトにはなってしまうけど食べたい欲求は凄まじい物で……。
砂糖の変わりに果汁を何度もろ過して濃縮させた果汁を煮詰めて何とか砂糖擬きを造り出し。

ミルクに砂糖擬きを加え冷血者（コゴエルモノ）、氷細工（アイスワーク）を駆使し。
ボウルと泡立て器を作成し超泡立てた、それはもう超頑張った。
その結果。
ジャーン!!
なんちゃってソフトクリームゥ！
果汁から砂糖を作っているからか仄かに香る柑橘系の香りがサッパリ感を醸し出して、これはこれで上手いんじゃないかという仕上がりになったソフトクリーム。
ペロペロッ。
はぁ、至高の旨さだわ。
これは止まらんね、うん。
それにジャックフロストになったお陰かかき氷やアイス。
氷菓子を食した際に起こる頭キーッン現象が起こらなくなったのだ。
そのお陰で何個でも食べれちゃう。まぁ頭キーッンも癖になるんだけどさ。
「それにしても……結構特訓の成果って実感できるものだなぁ」
前よりも精密に繊細に氷細工（アイスワーク）で造形を出来るようにもなったお陰で泡立て器のような細かな造形を出来るようになったし、それに触れただけで凍り付くような事も無くなったもんな。
あとは未だ試せていないスキルの詳細が気になるよなぁ。
「……雪遊びと雪隠れ……あとは大自然だっけか」
試しに大賢者様に解析をして貰ったんだよ、この間。
そしたらさ何て言われたと思う？
雪遊び：楽しくなる。
雪隠れ：雪に消える。
大自然：育つ。
……何だこれ。
って感じだよな!?
楽しくなる。雪に消える。育つ。
おちょくってんのか!?ってなるよねっ!?

そん時のリムルさんの顔よ。
うっわぁドンマイッ！
って顔よ!?
でも確かに使ってみないことにはどうなるかわからないし？
楽しくなるなら楽しくしてほしいよね！（ヤケクソ
何か思い出してたらムカムカしてきたぞ……。
「あぁいいさ!!試してみようじゃないか!!」
正に今スキルを試そうとした瞬間。
「主殿!!急ぎお伝えしたいことが!!」
「うひゃ!?ク、クロウ!?」
飛び出してきたクロウに邪魔される形で俺のスキルは不発で終わり。
この盛り上がった気持ちはどうすれば良いのかと自問自答しながら先ずはクロウの用件を聞こうか。
俺は自らの気持ちを飲み下しクロウの伝言を聞くことに。
「リムル殿からの言伝で御座います。町の入り口に奇っ怪な集団あり急ぎ対処せよとの事」
「……遂に俺は雑用処理まで押し付けられるようになってしまったのか……」
恨むぜリムルさんよ……。
文句を言いながらもトボトボ重い足取りで町の入り口まで向かったヨクル。
すると確かに町の入り口に屯している輩がいるな。
だが人じゃないな、まぁジュラの大森林で人間がいる方が珍しいのだがな。
屯している集団は長い口と全身を艶やかな鱗で覆われており、長い尻尾が揺れる。
そう、蜥蜴にそっくり、てか人間サイズの蜥蜴だな。
集団で来ている割には攻めてくる様子もないし、先頭で何やら音頭を取っている蜥蜴人が町の責任者と話がしたいと訴えているみたいだ。

「我が名はガビル、この町の責任者と話がしたい!!」
え、何々？リムルさんに後用事？
仕方無いなぁ、話し合いを求めているなら俺がでしゃばる訳にはいかないよなぁ？
「おーい、リムルさぁん！話し合いがしたいんだってさあ!!」
そりゃ呼びに行ったさ。
町の事を俺が決めるわけにはいかないからさ。
呼びに行けばリムルさんは俺というかガビルと名乗る蜥蜴人をめんどくさそうに見るが、呼ばれてしまっては仕方がないと話し合いに応じることに。
内容は豚頭族（オーク）の討伐協力依頼だった。
何でも急激に力をつけジュラの大森林を荒らし回っている豚頭族（オーク）に対抗するために蜥蜴人族（リザードマン）が中心となり人員を集めているらしくここがゴブリンの村と聞いて来たようだった。
だが、ここはもうゴブリンの村と言うよりリムルさんの町だし。
リムルさんからしたら徒党を組むメリットがあまり無いように思える。この町には転生者のリムルさん、そして同じく転生者である俺、鬼人のクロウ達と嵐牙達とホブゴブリンのリグルド達が居るわけで。
そんじょそこらの魔物に負けるとは思えない程の戦力が集結しているのだから。
それに加えてあろうことかガビルは傲慢にもリムルさんに対しスライムがリーダー、責任者の訳がない何ぞとほざき、我輩の配下になれば守ってやるなんて言ったものだから。
リムル守り隊の鬼人達がヤバイくらい殺気立つ。
リムルさんを抱えるシオンなんてリムルさんを絞め殺す勢いで腕と暴力的な胸で圧迫して行くし。
ベニマルは超良い笑顔で殴っても良いですか？なんて聞き始める始末。
あーあ、あいつ死んだわと輪の外でボーッとしてながら様子を眺めていた俺。

ヘラヘラヘラ。
俺は関係ないよね、我関せずで笑っていた俺にまさかのキラーパスが放たれる。
「わかったわかった。ガビルって言ったか？このヨクルに勝てたら子分にでも配下にでも何でもなってやるよ」
「うえええええ!!!???」

6話《ガビルVS俺!?討伐依頼、豚頭帝》

「ガッビル!あっそれ、ガッビル!」
呆然と目の前で音頭を取るガビルを見る俺。
周りにはリムルの町の住人達。
「なんでこんなことに……」
数十分前。
リムルさんから放たれた予期せぬ発言で蚊帳の外にいた筈の俺はリムルさんとガビルの話し合いに引きずり込まれることになってしまった。
これも我関せずで笑っていた報いなのだろうか。トホホ……。
リムルさんは良い機会だから特訓の成果を見せてみろ。
なんか取って付けた用な理由だが。
特訓の成果何て言われてしまっては頑張るしか無いだろうが、もし万が一ガビルに負けるような事があれば。
特訓の激化、リムル守り隊からの非難の目が凄そうだ。
それに。
「お前なら安心して任せられる」ニカッ!
なんて言われたらやるしかないじゃない!?
信頼されてるのか、体の良い面倒処理にされているのかわからないがな。
「……しょうがないか……リムルさんにはお世話になってるもんなぁ」
「ガンバ〜」
ガックシ。
なんて気の抜ける応援だよ、たくっ。
「そろそろ始めようではないか。だが我輩は優しいからな忠告しておくぞ我輩は次期頭領なのですからなっ!!降参するのが身のためですぞっ!!」
「それはお気遣い……「よっ!ガビル様カッコいい〜!!」……うるせぇからな!?被ってんだよ!?」

ベニマルが審判の元。決戦の火蓋が今切られた!!
ガビル、ベニマルの手が下ろされたと同時に全力ダッシュ。その勢いのまま手に持った槍で俺を串刺しにするつもりなのだろう。
「冷血者(コゴエルモノ)」
俺がスキル名を唱えると同時に霜が地面を覆って行く。
一方ガビルは余程俺の事を侮っているのか、それとも槍で突くことに集中しているのか、足元ががら空きだぞ。
案の定俺の霜に気付くこと無く突っ込んできた。
するとガビルの足が霜に触れた瞬間、ガビルは足に力が入らなくなったようでガクンと膝を折り地面に倒れ込む。
「ッ!?グガガガッ!!」
物凄い勢いで顔面から転倒、そのまま顔面スライディングで俺の横を滑り抜けて行った!!
「我が、我輩の足……足の感覚が……無い……無いんだけど!!!どゆことだ!?これどゆことなのだ!?!?」
「うっわぁぁぁ……!!予想以上に派手に転けた……痛ったそうぅ……超痛そうぅ……大丈夫か?」
一体全体何が起きたのか理解することも出来ないガビルはただただ呆然と自身の感覚の消えた足を見ることしか出来ないようで。
さっき迄自身の思うように動いていた筈の足を目を見開き信じられないといった表情で凄い見てるガビルに俺は……あれだよ。
なんか……。
ちょー罪悪感!!
自分でやっておきながら、言うのもなんだけど物凄く胸がいたい、ズキズキして苦しくなってくる。
目の前で実際に足の機能を停止したせいでもがき苦んでいるのを見るのは思いの外堪えるものがあるなぁ。
「ごめんな、ちょっとやり過ぎたかも知れん。手を貸すよ」
「あ、これはすまない!」
ガビルの身体を起こすのに手を貸した俺。
単純に手を貸すつもりだったのだが……。

俺は失念していたんだよ、てへっぺろ。
そう、あるスキルが発動していたままだったことに。
そしてガビルの手を掴んだ瞬間。
俺の脳内に世界の声が聞こえてきた。
『告。冷血者（コゴエルモノ）が発動されました。対象ガビルの腕の機能を凍結、停止します』
ん？発動されました？
え、何？どゆこと!?
ん……んん……!?
そして気付いてしまった。
冷血者（コゴエルモノ）発動したままだったわ。
「あ……やべっ……!!」
「我、我輩の腕が……腕がぁぁあ……!!!」
だが、時既に遅し。
ガビルの腕の機能は停止し力も筋肉も動かすこと叶わず、ダランと脱力し地面に落ちる。
ゾクリ……。ん？
「ごめん！わざとじゃないんだ!!ごめんな!!」
予想外の展開に俺もパニックになってしまって。
単純に冷血者（コゴエルモノ）を解除すればそれでいいと言うのに、その考えに至ることなく。
咄嗟に俺は地面に倒れそうになっているガビルのもう一方の腕も掴んでしまい。
『告。冷血者（コゴエルモノ）が発動されました。対象ガビルの腕の機能を凍結、停止します』
「うわっちゃーー!!ごめーーん!!なんか反射的に!!」
「うぎゃぁぁぁあ!!??!もう両手両足の感覚が無いんですぞーーー!?!?」
「安心しろ!!大丈夫!!次はちゃんとやるから!!ちゃんとやるからさ!!」
「いや、いや!?お前もう我輩に触るでないわ!!近くに来るな!?来るなよ!?く、来んなぁぁぁあ!!??」

ゾクゾク……。んん？なんだ……？
先程から感じる不思議な感覚。
いや、今はそれよりもこの状況を何とかしないと！
てかもう遅いよ。しっちゃか、めっちゃかだよ。
これは既に決闘等ではなくただの茶番に成り果てていた。
観戦しているリムルさん達もなんか遠い目してるしさ!?
ガビルの取り巻き達なんて目も当てられないって目を隠してるし!?
応援してくれてるのはベニマルだけだよ!?
（頑張って下さい！ヨクル殿!!）
ごめんね!!そんなキラキラして応援してくれるのにこんな決闘で本当にごめんね!!!
そして案の定。
痺れを切らしたリムルさんから一言。
「おーい、ベニマル。そろそろ止めてやれ。ヨクルの勝ちには違いないだろ」
「は、そこまで。勝者ヨクル殿！」
ですよね!?
流石に終わりですよね!!
しかし、その判決に否を唱えたガビル。
だけど地面に寝っ転がって否を唱える姿は玩具を買って貰えず駄々をこねる子供のようだ。
「我輩の負け!?納得がいかんぞ!?」
「いやいや、お前その状態でどうやって戦うんだよ……」
リムルさんにまだ戦えると証明しようと何とか四肢を動かそうと呻くけれど俺のスキルで停止した機能は戻らず。
次第に踏ん張りも効かなくなりクターッと脱力するのだった。
まぁあれだ。
グダグダではあったけれど俺の勝ちでこの騒動は終止符が打たれて無事に終わったが。
冷血者（コゴエルモノ）を解除されたガビルは情けなく敵に腹を見せ敗北したこと

が余程ショックだったのか。
我輩、次期頭領なのに……。
なんて肩を落とし取り巻き達に励まされながらリムルさんの町を後に。
その後ろ姿を見送りながら。
俺は自身の掌を眺め、戦闘の最中感じた不思議な感覚を思い返す。
どうしてか……何故かわからないが。
冷血者(コゴエルモノ)で手足の感覚が無くなり、それでも足掻き、身悶えし、苦しむガビルに対して面白い、楽しいと感じてしまっている自分がいることに自分で驚いていた。
こんな風に他人を虐げる趣味があったとは……思いもよらなかったな。
あれか？転生して知らなかった自分に出会えたのだろうか？
まぁいいか。
多分、初戦闘で気分が高揚していただけだろ。
「おーいヨクル。豚頭族(オーク)の件で話し合いするぞー」
「あ、はーい。いま行きま～す!!」
と、俺はこの時の感覚を気のせいと流してしまった俺。
『告。ーーーーーー、ーーーーーーーーを獲得しました』
謎の声にも気付かなかった。

◆◆◆

「ーーーーー報告は以上です」
ソウエイの分身体が偵察を終えて会議室に戻ってきた。
蜥蜴人(リザードマン)の持ってきた情報を元に豚頭族(オーク)の話が事実なのかを確認することになった。
そして結果ーーー。
「おそよ二十万を越える豚頭族(オーク)の軍勢を確認しました」

そして豚頭族（オーク）の軍勢は大河に沿って北上し、俺が凍結した湖の近く、東の湿地帯。
つまりガビル達、リザードマンの支配領域を目指しているようだな。
「てか、オークの目的って何なんだろうな。湿地帯を目指すだけならオーガの里は遠回りだろ？わざわざ戦力を裂いてまで襲う必要あったのかな？」
「……確かになぁ。オークの目的ねぇ……」
するとカイジンが可能性の話をし出した。
「ふむ、オークはそもそも知能が高くない。この侵攻には本能以外の何かがあるんだろう、例えばバックで操っている存在とかな」
黒幕……。
「例えば……魔王とかか？」
魔王ね……魔王!?!?!?
魔王なんかいるのか!?!?!?
いやー流石異世界だなぁ!!!
なんて一人興奮していると。
「ーーーー初めまして、魔物を統べる者。それと白氷の子。及び従者の皆様。突然の訪問、相すみません。わたくしは樹妖精（ドライアド）のトレイニーと申します。どうぞお見知りおき下さい」
つむじ風と共に現れた綺麗なお姉さん、トレイニーさん。
話によるとこのトレイニーさん、なんとジュラの大森林の管理者らしく。
とても偉い人なのだそうだ。
へぇー管理者。
あ……俺、湖凍らせちゃった……怒られるのか？怒られるのか!?
しかし、トレイニーさんの用は俺にではなくリムルさんにだった。
「本日はお願いがあって罷り越しました」
「リムル＝テンペスト……魔物を統べる者よ」

「貴方に豚頭帝（オークロード）の討伐を依頼したいのです」

へっ？依頼討伐？

豚頭帝（オークロード）って何？

「あ、それと白氷の子。ヨクル。湖を無闇に凍らせてはいけませんからね」

ひぇ……ごめんなさい……!!

その後はトレイニーさんを加えて再び会議が開始。

トレイニーさんによってもたらされたオークの上位種族、豚頭帝（オークロード）の存在。

リムルさん的には討伐依頼は保留に、あくまで鬼人たちの援護はするけど率先して藪をつつくようなことはしたくないと。

そして、会議が進むにつれてオークロードの脅威が徐々に露になってきた。

オークが豚頭帝（オークロード）に進化すると自動的に得られるスキルがあるらしく。

その名はユニークスキル『飢餓者（ウエルモノ）』

酷い飢餓感が消えなくなる変わりに食べた魔物の性質を自分のものとする、正しく食べたものが身に付くと言うことだ。

それは俺の『冷血者（コゴエルモノ）』やリムルさんの『捕食者（ほしょくしゃ）』と似ている。

だが、一撃必殺技で奪取するわけではなく飢餓感に任せて食らう程奪取の確率が上がる。

この事からオークの侵攻の目的は……。

「オーガやリザードマン、上位種の力を奪いたかった訳か」

「うーん……てかそれならリムルさんの町に来るのも時間の問題……？」

だってこの町にはオーガから進化した鬼人のベニマル達、嵐狼牙（テンペストウルフ）、ホブゴブリン等々。

上位種てんこ盛りな訳ですし。

「オマケに俺やリムルさんも居ますしね。最強のスライムなんて放っておくわけ無いでしょ」

「それを言うならお前もだろ。なんでもかんでも凍らせる天才何だからさ……はぁ仕方ないか」
「トレイニーさん。貴方からの討伐依頼正式に受けよう、豚頭帝（オークロード）は俺たちが倒す」
「ありがとうございます。暴風竜の加護を受け牙狼族を下し、鬼人を庇護する貴方様なら豚頭帝（オークロード）に遅れを取ることは無いでしょう」
「それと……白氷の加護をその身に受け、同じく鬼人を庇護し凍結を司る霜男（ジャックフロスト）のヨクル様、貴方様にも期待しております」
「……俺も……？」
「……えぇ期待してますよ」
うッわぁにっこりした笑顔がこわぁい。
てか寧ろ湖凍らせておいてこの森の危機から逃げられると思ってるのですか？
ってトレイニーさんの心の声が超聞こえてくる。
効果音的にはゴゴゴゴゴォ……!!みたいな感じだよ!!
「わかった！わかりましたから!!俺超頑張る！戦闘？回復？なんでもござれってな感じですよ!!」
「おいおーい、あんまり張り切り過ぎるなよー？ヨクルくん？」
こうして俺やリムルさん、町の皆で豚頭帝（オークロード）を倒すことに。
「次こそは遅れは取らんぞ……覚悟しておけ、豚頭帝（オークロード）……!!!」
ギュッ……！
隣で血が滲むほど拳を握りしめるクロウの姿に俺も覚悟を決めたさ。
従者に情けない姿は見せられないもんな。
「やるしか無いんだよな平穏な生活とクロウの敵打ち……なんだからな……！」
俺の闘志に触発されてか、魔素が漏れだしてしまい冷血者（コゴエルモノ）で足元がパキパキと音を立て凍り出す。
すると再びガビルの時に感じた不思議な感覚が背筋を走り抜けた……。
ゾクリ……ゾクゾク……!!

《ギハッ……！良いねぇ……良いねぇ!!殺るならトコトン楽しまなきゃ損だもんなぁ……！楽しんで行こうぜ、宿主様よぉギハッハハッ》

そして俺の脳内に声が響いた。
粗暴で口が悪く戦闘を心底楽しむような男の声。
だけど、その声は……。
俺の声と同じ声だった……。

7話《豚頭帝》

さて先日、樹妖精（ドルイド）でジュラの大森林管理者であるトレイニーさんからリムルさんへ豚頭帝（オークロード）の討伐依頼があった、勿論リムルさんは俺に任せとけみたいな男気たっぷりにＯＫと返事をしたのだが。

ここで問題がある。

幾ら俺たちが強かろうとやはり質より量。単純に物量で二十万の軍勢に押し切られては戦いを挑んだ所でみたいな感じになるのではないか。

此方も無限に戦える訳ではないのだから、何れ魔素切れを起こし倒れたものから飢餓者（ウエルモノ）の餌食だ。

ならば蜥蜴人（リザードマン）との連合軍。その提案を此方から再びしてしまおうという事となった。

戦いになれば力の他に物資、連絡、拠点等々色々な要素が絡んでくるからだ、況してや戦場となるのは蜥蜴人（リザードマン）が支配領域としている湿地帯ならばその地に精通している者が居るのと居ないのとでは情報戦では天と地ほどの差があるといっても過言ではないだろう。

と言うことで。

蜥蜴人（リザードマン）との交渉にはソウエイが向かう事となり、決戦の日まで俺達は準備となったが。

如何せん俺が出来ることが殆ど無いんだよなぁ。

だって皆行動が早すぎる、そりゃ俺は平和な日本でぬくぬく育った温室育ちかも知れんけど。

それにしても皆行動が脱兎の如くなんだもん。

「……あー、暇だなぁ……」

俺はと言うと木陰で体育座りしていた。

ポカポカの日差しに心地好いそよ風が草原の若草の匂いを運ぶ。

「……のどかだねぇ……」

「のどかだねぇ……じゃないわ！」

ポコンッ。

軽い音と共に頭に微かな衝撃が走る。

「あ、リムルさん？……なんで女装してんの？趣味？」
「違うわい!!」
全力で否定しなくても、冗談なのに……。
なんでも女性陣によって着せ替え人形化していたらしい、まぁリムルさん、見た目いいからな。
顔が良い、細く色白のスタイル、まるでお人形さんだもん。
それにしても何処に行っても女性が強いもんだ。
きっと、リムルさんが着せ替え人形になっている時、男性陣。特にベニマルなんかは目を逸らして知らん顔していたに違いないな。
そんな不憫なリムルさんに、そっと秘蔵のソフトクリームを差し出す俺。
これでも食って元気出しなよ。
リムルさんはまさか異世界でソフトクリームを拝めるとは思わなかったのだろう、目を丸くして驚いていたのが優越感。
フフンッて感じだなっ！
「ありがとな、まさか此処(異世界)で味わえるとはな」
「俺の自信作ッスからね！御上がりよ！」
「そんじゃ、いただきまーす」
ペロリッ……ッ!!??
おーおー、あまりの美味しさに驚いておるわ！
ハッハッハッそうだろう、そうだろう！
ガシリッ……!!
えっ!?
美味しいのはわかったから、何故にそんな怖い顔して見るの？
ぱぁーどぅん？
何故に逃がすまいみたいな感じで肩を掴むの？
「ヨクル……お前これ量産出来るか？」
「えっ……まぁ具材さえあれば……」
俺がそう言うと。
リムルさんは人形からスライム形態に変化し身体が一回り大きくなると具材を吐き出した。

たっぷりミルクが入った入れ物。
山のように積まれた砂糖。
どれも俺がソフトクリームを作った時に使った具材、多分大賢者さんに解析して貰っても複製したんだろうけど。
なんでまた？
旨すぎたから？
旨すぎたなんて、罪な奴！
なんて、ふざけていたらリムルさんが説明をしてくれた。
何でも俺のソフトクリームは冷血者（コゴエルモノ）で冷やし、氷細工（アイスワーク）で形作っているのだけれど。
その際ソフトクリームには魔素が多大に含まれ、そのままでは勝手に霧散しきれるのだが成型に氷細工（アイスワーク）を使っていた為、
氷細工（アイスワーク）の付与効果により魔素が付与され、食した物に魔素を与える事が可能になっているらしい。
つまり魔素切れの仲間に食わせれば魔素を回復出来ると言うことだ。
ポーション大量生産工場のリムルさん。
マジックポイント回復、ソフトクリーム屋さんの俺と言うわけだ。
ヤバい……。
「お前、暇だよな……？」
「……いそがｓ」
「おーし、暇だな。ソフトクリームを量産して貰おうか？」
「い、いや！そ、そうだ!!大賢者さんに複製して貰えばいいんじゃ!?」
俺がそう提案すればリムルさんもそれもそうか、盲点だったな。
なんて笑いながら大賢者さんに複製を頼むことに。
ふぅ……なんとか過労死を回避した。
と思ったのも束の間、まさかの大賢者さんからの回答がこちら。
《告。味、造形迄の複製は可能ですが、魔素を与える効果の再現に失敗しました》
「……何ですと……？」
《告。魔素を与える効果の再現には冷血者（コゴエルモノ）、氷細工（アイスワーク）が必須と思われ、個

体名リムルはスキルを保有していない為、再現に失敗》
「……だ、そうだ」
「そ、そんなぁーー!!!」
そのあと殆ど無限に吐き出された具材をひたすら混ぜ合わせ冷血者（コゴエルモノ）で冷やし、氷細工（アイスワーク）で造形を繰り返した俺。
「……うぅ、つらたん。魔素が消えてく感覚、やばたん」
「おい、なんか口調が可笑しくなって来てんぞ」
そして辛さの山を越えた俺は最早機械と化した。
自分で魔素切れそうになったらソフトクリームを食べて自己回復しながらも手を一切止めないのだから、自分で言うのも何だが、もうプロよ。
そして言う迄もなくソウエイが蜥蜴人（リザードマン）の頭領と交渉し湿地帯へと出発する頃には、ソフトクリームの山でぐったりとした俺が完成していた訳だ。
「……つか、れ、た……」
「ほらヨクル。出発だぞー」
「…少しは休ませろ……鬼……スライム、大賢者がいるあんたとは違うんだぜ……？」
なんてぼやくように言ってみるが、モタモタしてたら置いていかれそうだ。
やるしかない。
行くしかないな。
俺は未だ魔素の消費、回復の連続で筋トレしすぎた2日目みたいな脱力感がある身体に鞭打ってリムルさんから預けられた嵐牙狼（テンペストウルフ）に股がる。
「……出来るだけ安全運転で頼むよ？」
そう言って首もとを撫でれば。
「ワフン!!」
あ、可愛い……!!
ヤバいわ。
なんか尻尾超振ってるし、舌出して甘えてくるんですが。

可愛い、生前犬とか猫とか飼っていなかった俺には其処んとこの耐性が全くない訳でして。
「よーし！よしよし！可愛いなぁ!!」
「ワフ！ワフン!!」
「いつまでやってんだ……!!」
とウルフくんと戯れていたら、リムルさんからお叱りを受けてしまったよ。
「あい、すんませんした……」
「……クゥーン……」
あ、可愛い……！

◆◆◆

「よーし、此処で休憩するぞー」
嵐牙狼（テンペストウルフ）の驚異的なスピードにより、予定よりも早く移動していた俺達。
てか早すぎだろ。
軽くジェットコースターを凌駕していたぞ、そんなの、そんなの……楽しすぎるよね!!
俺は生前二十歳を越えているにも関わらず興奮してしまう。
何だが不謹慎だとは思う、だってこれから豚頭帝（オークロード）という敵と戦いどちらかが滅びるのだから。けれどこのワクワクは止められんだろ。
「おーしおーし、頑張ったなぁ」
此処まで乗せてくれた嵐牙狼（テンペストウルフ）をもう思いっきりワシャワシャしてやって。
これからの行動をリムルさんに確認をしに向かった俺。
その後ろでは。
「ワフン！ワフン！」

「クソッ……我の主殿だぞ……!!」
勝ち誇ったように喉を鳴らす嵐牙狼（テンペストウルフ）と拳を震わせるクロウがいたとか。
「おーい、リムルさん。これから俺はどう行動すればいい？別行動して遊撃隊になった方がいいのか？」
正直俺は集団戦に向いてない。
何でも凍らせ停止させる冷血者（コゴエルモノ）。
触れた対象に呪いを振り撒く呪怨者（クロキモノ）。
どちらも味方に誤爆する可能性ありありなスキルなんだからさ。
と思って俺から遊撃隊の提案をしたんだけれど、リムルさんは少し考えた後。
「それなんだが、ヨクルお前に頼みたいことがあるんだ」
「……え、なんか嫌な予感……」
またまた、貧乏くじ？

◆◆◆

「はぁ何でこうなんのさ……」
俺は遊撃隊がいいって言ったのに……。
何でよりにもよって本隊に突撃なんだ……。
現在俺はとクロウは冷血者（コゴエルモノ）と氷細工（アイスワーク）を使い造り上げた爆速ソリに乗って移動中である。
何故俺達だけ早く本隊に向かうことになったかと言うと……全てあのガビル（カ）が悪い。
何を血迷ったかガビルは頭領に謀反を起こし、俺達の到着を待たずして無謀にも部下を引き連れ豚頭帝（オークロード）に挑んでいるらしい。
急ぎ湿地帯に移動したいところだが大人数での移動では時間が足りず、無理して移動すれば仲間の疲弊は避けられない。
だから俺達な訳だ。

まぁ、確かに湿地帯と俺の相性は抜群だろう。
水場なら俺の冷血者（コゴエルモノ）が猛威を振るうんだろうけどさ……。
ガビルのバカ！
名持ち（ネームド）である驕りか、豚頭帝（オークロード）の恐ろしさを知らない無知なのか知らないけれど。
お前のせいで正面からやりあわなきゃならなくなっただろうが！
あー、俺不安になってきたぞぉ……死になくないなぁ。
「……なぁクロウ……俺出来るかな……」
「何を仰いますか、主殿。我が傍に居ります故、我にお任せを」
やだ、超イケメン……。
強面の笑顔って凶器だわ……。
そして俺達が湿地帯にたどり着いた時。
戦況はガビル率いる蜥蜴人（リザードマン）が水辺という特性を利用し泥と水で足を取られる豚頭族（オーク）を多人数で仕留めていく戦法で若干優勢に見えた。
だがそれも一時。
倒された豚頭族（オーク）の死体に群がり共食いする同族達の姿、その異様さに気圧された蜥蜴人（リザードマン）。
後退りした足を掴まれ引き摺られ生きたまま喰われると豚頭族（オーク）の動きが明らかに変わった。
「……あれが喰ったものの特性と力を奪うって意味か……！」
クロウと共にガビルの元に急ぐ。
徐々に圧倒的な物量に押されて行くガビル達。
そしてガビルの首が跳ねられる直前。
もう駄目かと死を覚悟するガビルだったが……。
「冷血者（コゴエルモノ）」
「なっ……!?」
地を這うような声と共に湿地帯を駆け巡る冷気の波、パキパキと音を立てながら水面が凍り付いて行き。豚頭族（オーク）達の足をも巻き込んで凍りる。
凍り付いた中には氷から脱け出そうと無理矢理脱け出そうとした者がいたが漏れ無く皮膚が剥がれ、肉が剥き出しになり悶える羽目

に。
そして、ガビルの首を跳ねるはずだった凶器も豚頭族（オーク）の腕さえも凍り付き寸前で停止していた。
「これは……あの者の」
ガビルにはその光景に見覚えがあった。
それはあのスライムの村で出会った霜男（ジャックフロスト）のスキルだったのだから。
すると豚頭族（オーク）の軍隊を切り裂くようにガビルの元へ向かってくる騒ぎ。
凍り付き砕け、打撃を受け体内から爆発四散し飛び散る肉片。
感覚が無い、目が見えないと飢餓をも凌駕する恐怖に悶える者。
「お、いたいた。良かった無事だったようだな」
「主殿、返り血が……失礼」
「う、うん。ありがとう……でもクロウの方が凄いぞ……？」
冷気を周囲に纏い苦笑いを浮かべるヨクル。
全身に返り血を浴びながらも主第一とごしごし返り血を拭き取るクロウの姿だった。
「貴方はっ!!真の主殿!!??」
「はっ!?何を!?」
このガビル何か勘違いしてるぞ!?
なんだ真の主って！
やめろよ!!
「貴様、主殿の偉大さに気付くとは……良い目をしている」
「うむ！頭領であるからなっ!!」
もしもーし、盛り上がるなよー。
まぁ、とにかく無事にガビル達を保護できたのはいいが。
とは言えだ。
俺の冷血者（ココエルモノ）から逃れられた豚頭族（オーク）が動けない同族を足場にして此方に向かってきている。
「うん、確かに飢餓感で恐れなんか感じなくなってるんだな。さてとリムルさんが来るまで時間を稼ごうかな、クロウ行けるだろ？」

「はっ無論で御座います。我が拳で悉くを蹂躙して見せましょう」
「よし、それじゃあやるか。とっその前に……」
水面から氷の壁を造りだしガビル達を守るように隔離し、氷細工(アイスワーク)で氷から造形を行う。
鹿、猫、犬、蝶々、鷹等々。
「おし、これでいいだろ、待たせたな。気を付けろよ?こいつらに触れたら死ぬぜ……?」
俺の声と共に一斉に動き出した氷像達。
触れた端から凍り付かせ、魔素を奪い、身体機能を低下、停止させる美しくも恐ろしい氷像。
その光景に誰もが目を奪われることだろう。
氷像達の命を感じさせない氷でありながら生きていると感じさせる動きに。
冷気と氷の粒が光輝く光景に。
幻想的で恐ろしい光景に。
そして、面白可笑しく狂ったように笑う霜男(ジャックフロスト)の姿に。

「クハハッ……!!」
《告。――――――を獲得しました》

8話《豚頭帝　ぱーとつー》

何だか……楽しくて堪らないな。

眼前で俺が造り上げた氷像が猛威を振る度に心臓が高鳴り全身の血液が沸騰しているかのように熱く滾り興奮する。

蝶々が触れた箇所から凍てつき凍傷を引き起こし。

猫と犬が噛んだ肉が凍り凍てつき体温を、感覚を奪って行く。

鹿が踏み鳴らした大地に冷気が波紋のように広がって行き豚頭族（オーク）を一瞬にして氷像に変えてしまい。

鷹が羽ばたき飛散した翼が触れた途端に凍り肉と共に弾け飛ぶ。

なんて、綺麗なんだろうか……。

恍惚し目が奪われ思わず勝手にため息が溢れ出てしまう。

豚頭族（オーク）達の悲鳴が嗚咽がとても耳に心地好い、まるでオーケストラでも聞いているかのような高揚感が全身に駆け巡り身体が震える。

こんな加虐体質だっただろうか。

他人が蹂躙されている姿に興奮するような人間だった……いや今は違うけれど。

嘗ての自分を構成していた全てがガラガラと音を立てて崩れ去る、自分が自分で無くなってしまう、そんな宙ぶらりんでいるかのような浮遊感に陥りながら俺は……。

――――――壊れた。

ガチャリと何かが切り替わる――――――。

あぁ……あぁ……！

何が戦いたくないだよ……これほど迄に生を実感できる物があるのか？

否……否だ!!

あるわけねぇ!!

「クハハッ死ね、死ね!!俺の氷がお前らの全てを奪うぜ!!」

俺が操作した訳でもないのに黒く禍々しい呪いが止めどなく足元から吹き出す。

呪怨者（クロキモノ）が溢れる。

溢れた呪いが氷（クロキモノ コゴエルモノ）と結び付き。氷結した大地に闇より黒く深淵の漆黒を体現する呪いが広がる、雪に氷に呪いが混じり触れたものを絶命させる。

――俺の筈なのに……俺じゃない何かがいる――

腹の中をぐちゃぐちゃとかき混ぜられている用な不快感、だが脳の方は今この瞬間に強烈な生を享受し続ける。

スイッチが繰り返しオンオフしているような感覚、俺と俺じゃない俺が終始入れ替わっているような気持ち悪さ。

――あ……もう駄目かも……しれん。

俺は不快感に呑まれた、ぐらんぐらんと振れる視界に目を回し倒れた。

ガシリッ……！

倒れた……筈だった。

「……主殿、ご無事ですか……」

「……ごめんな、クロウ。ありがとう……」

「いえ、主殿。ご無事で何よりで御座います」

グラグラと振れる視界が捉えたのは俺のスキルでボロボロになってしまったクロウの姿だった。

肌に霜が張り付き体温を奪われ、呪いが身体を蝕み苦しいだろうに。

申し訳がない、まさかこんなことになるとは思わなかった。

ガンガンと激痛の走る頭を押さえながらクロウの肩を借りて何とか立ち上がるとそっとクロウの頬に手を宛がう。

すると黒く身体を這っていた呪いが霧散し体温を奪っていた霜は溶けて行く。

「感謝します我が主」

「いやいや、元はと言えば俺のせいだからさ」

さてと。

まだ気持ち悪いし今すぐ布団に潜り込んで寝ていたい気分だけど……いやマジで本当に寝ていたいけど。

「クロウ、まだ行けるか？」

「無論、何処までもお供します」
「よし、グダグダだが任された以上は最後までやり遂げないと……なっ!?」
と息巻いて一歩を踏み出して見たものの踏み出した足には全く力が入らずガクンと膝から崩れ落ちる。
クロウが慌てて支えてくれなければ情けなく地面に倒れ伏していたことだろうな。
どうやら俺が想像していたよりも先程の暴走は俺の身体、魔素を酷く酷使したようで今更になって指先から震えだし始めた。
全くという程身体が言うことを聞いてくれない、脳から信号が送られようと動かす筋肉、動力の魔素が圧倒的に足りていない。
俺は焦る。
ここは戦場だ、今も戦闘は激化して行く。俺の冷血者(コゴエルモノ)も永遠ではない、魔素が無くなれば溶けて消えてしまうのだから。
そんなもの焦らずにいられるかって訳で。
俺は全く言うことを聞かずまるで自分のものではなくなった様な手足を動かそうと脂汗を滲ませ渾身の力を込めるが努力虚しく手足は痙攣を続けるだけ。
俺の痛々しい姿は見てられないと言わんばかりに顔を歪ませ目を伏せたクロウ。
俺を地面に座らせるように降ろすと正面に周り跪いた。
「我が主、この場は我に任されよ。必ずや期待に応えよう」
いやっ!まだ俺は戦える!!
リムルさんから任されたのだから途中で投げ出すわけにはいかない!
そう言おうと思っていたし実際その言葉は喉まで出かかっていた。
……でも言えなかった。
クロウがあまりにも辛そうな表情を浮かべているものだから……。
「っ…わかった。お前に任せる、豚共を蹴散らして仲間の手向けにしてやれ!」

「御意……!!」
力強い返答、立ち上がり一礼したクロウは拳を鳴らすと吠えた。
ビリビリと空気を空間を震わす咆哮に豚頭族（オーク）が二の足を踏む。
クロウから立ち上る闘気、魔素にビビったのだ。
「我が同胞の手向けとなれ」
《豪雷鬼神（ごうらいきじん）》
豪ッ!!!
突如クロウの鍛え上げられた肉体に落雷が降り注ぐ。
皆一様に目を剥いた事だろう、あれだけの宣誓をしておいて落雷で死ぬとは。
笑う、笑う。指を指し蔑む。
お笑い草だなと隣に居た仲間（オーク）に話し掛けるが、さっき迄指を指して笑っていた筈だった、だが今はもう首から上が無くなっていた。
「は……？あぇ……!?」
その豚頭族（オーク）も次の瞬間には頭を捕まれたような感覚を最後に絶命した。
「おー……すっげぇ早っ」
今現状何が起こっているかを的確に理解できていたのは俺だけだろうな。
視線の先にはバチバチと雷を纏う雷光と化したクロウの姿。
豚頭族（オーク）に接敵し一撃で首をねじ切ると視認されるよりも早く次の敵へ。
スキル名の名の通り豪雷だな。
なんて、戦闘にも参加できない俺はただただクロウの戦いを眺めていることしか出来ないのだった。
ソフトクリームを舐めながら。
え？何か？文句でも？
え、さっきまでのシリアスはどこ行った？
嫌々あれはシリアルだからサクサクお菓子だから。それに、そう、これは違うから。
ただアイスが食べたかった訳では無いんだ。そうあれだ、これは魔

素を回復するために食べてるだけだから。
途中敗退はカッコ悪いだろ？少しでも早く戦線復帰するために食べてるだけなんだから。
あ、うま。
「……ちょっとチミチミ、ソフトクリームは美味しいかな？」
「うん、旨いぞ……あれれー…おっかしーぞー？何やら聞き覚えのある鬼スライムの声」
あれれー？
可愛い顔して鬼畜鬼スライムのこえがするね？
なんか来るの早くない？
いやいや、まさか。
聞き間違いだろ、うん。
まっさかー……おう。
「ハローリムルさん。お早い到着で」
背後にはやはりというか、仁王立ちで腕を組むリムルさんが立ってたよ。
気のせいでも何でもなかったね。
いや、でも責められること無くない？
ちゃんとガビルは保護して氷の檻に隔離してるわけだから安全だし。
豚頭族（オーク）軍団の統率や連携を乱してやった訳だから。
と、そこまで考えてふと気づく。
リムルさんがこっちを見ている？
いや正確には俺の手元、ソフトクリームへと注がれていた事に。
「……食べます？」
「おう」
ほんのり頬を染め伏し目がちにソフトクリームを受けとるリムルさん。
……可愛い……って男だぞ!?しっかりしろ俺!!
チビチビとソフトクリームを舐めながら俺が到着してからの事を一応リムルさんに説明することに。

ガビルの一騎討ちから横槍を入れる形で参戦したことを。
冷血者（コゴエルモノ）と呪怨者（クロキモノ）と氷細工（アイスワーク）を使い豚頭族（オーク）を葬ったことを。
そして魔素を使いすぎてダウンしクロウとバトンタッチして今に至る所まで。
あの出来事（暴走状態）は一応伏せる事にした、俺でさえ良くわからない事に巻き込みたく無かったし、只でさえ村の長として多忙のリムルさんに余計な心配は掛けられないからな。
「まぁ、言ってしまえばこれはあいつら（鬼人）の戦な訳だからこれ以上やりすぎてもなって感じだしな。よしっ報告ご苦労、お前は此処で魔素の回復に努めてろ」
そう言ってソフトクリームの最後の一口をパクリと頬張ったリムルさんは背から蝙蝠のような羽を生やすと颯爽と飛び去っていった。
ええー、飛べんのかいっ!?

◆◆◆

リムルさん達の参戦で戦いは一方的な物に変わりつつあった。
群として喰らったスキルを共有する豚頭族（オーク）だがそもそも喰らえなければ意味がないわけで。
リムルさんから名を授けられ進化した鬼人達が負けるわけもなく。
黒炎で焼かれ、肌を肉を骨までも焼却され焦げあとのみが残ってたり。
大刀の一振込が大地を割り辺りに肉片を撒き散らし。
豚頭族（オーク）の群れに突っ込んだかと思えば、通りすぎた後には剣戟で細切れとなった肉片のみが残り。
雷鳴が轟き豚頭族（オーク）がミンチとなる。
え？これ、俺いるの？
的な状況な訳だが俺特別製魔素回復ソフトクリームのお陰で辛うじて身体機能及び魔素を回復したので。

俺は……。
ソフトクリームを配って配って配りまくろうと思う。
え？戦わないのかって？
ノンノン、周りを良く見たまえ。
わかったかな？魔素切れで息も絶え絶えみたいな子達も居るわけですよ、皆が皆リムルさん達の様な強靭無敵な性能をしてる訳じゃないんですよ。
てなわけで。
「おひとついかがっすか～!!」
俺はソフト片手に戦場を駆け回る。
いつの間に進化していたのか黒嵐星狼（テンペストスターウルフ）になっていたランガ君。
進化ではしゃいでいたのか獲得した黒稲妻なんて凶悪なスキルをバンバン使って魔素が切れていたランガに近付きソフトクリームを差し出す。
「ヨクル殿！かたじけない！」
ランガは差し出されたソフトクリームにがっつく。
みるみるランガの枯渇した魔素が回復して行き毛並みが艶々し始める。
うんうん、この旨さの前には誰も敵うまい、そうだろう旨いだろう!!めっちゃ尻尾振っておるわ。
ブンブンブンブン!!!
てか、振りすぎじゃね？
「お、おい!?ランガ!?ランガさん!?風がっ……風がぁぁあ！」
ブンブンからゴォンゴォンと暴風を巻き起こす風に俺の身体は吹き飛ぶ。
「ヨ、ヨクル殿ォォォォォ!!??」
「なんでさぁぁぁあ!?」
暴風に吹き飛ばされた俺、宙をくるくると何回転してるかわからない程ぐるんぐるん振り回される。
遠心力で手足は外に引っ張られるし痛いし。
「ぐぉぉお!?手足……千切れるぅぅ!!??」

「ヨクル殿ぉぉお!!お気を確かにぃぃ!!」
何処までも回転しながら飛んで行く俺、地上で俺の名を叫び駆けてくるランガ。
あれだ傍から見たらフリスビーで遊ぶワンコに違いないな。
「……何やってんのあいつら……？」
そして、その姿をバッチリリムルに目撃されからかわれる羽目になるとはこのときの俺は思いもよらなかったとさ。
「いてぇぇぇ!!ランガァァア!!ヘルプ!!はよ助けて!!」

9話《豚とスライムと時々霜男》

錐揉み大回転から生還した俺はランガに肩を借りながら？何とかリムルさんのもとへ。

大回転のせいで脳が三半規管が激しく揺さぶられ酷い車酔い状態のデバフに掛かってしまい。

時折来る酷い吐き気を催すが無理矢理飲み下す始末。

大丈夫かって？大丈夫だ不安しかない。

「うぶっ……それで、あれが……豚頭族（オーク）の親玉？」

口元を手で押さえながら恐らく親玉であろうデッカイ豚を見やる。

俺やリムルさんを簡単に握り潰せるであろう巨体、体内から溢れる魔素量。口内から大量の涎を垂れ流しながら飢餓に襲われた虚ろな白眼で俺達を見ている……のだろうか。

それとも食材にしかみえていないのか。

「どうやらそのようだな……てか大丈夫か？酷い顔だぞ」

「ははっ……うっぷ。だ、だいじょぶだ……酔っててもこれ（コゴエルモノ）はちゃんと機能してるから」

掌から冷気を出すとちゃんと戦えますよアピールをしながら自身の額に当て冷気で冷やし酔いを紛らわす。

本当に大丈夫か？

そんな視線をリムルさんから向けられるがここで退くわけには行かんでしょ。

流石にあの魔素量を相手取るには皆前哨戦で魔素を消費している訳で俺のソフトクリームでの回復も全快とまでは行かないしな。

「リムルさんを一人にはしないからさ」

「ふっ、生意気だぞっ！でもサンキュな」

「さーて行きますか」

と意気込んで戦場に向かった訳なのだが……。

「ゲルドよ！何をモタモタしているんだ!!」

その前に何か空から飛んできた。

ペストマスクを着けた古臭い貴族風の変な男。

そう言えばベニマルから聞いたな。仮面を着けた魔人と豚頭族（オーク）が攻めて来たと。
「あれが黒幕？それにしては小物感が半端無いけど」
魔力感知で見るが大した魔素量も無いようだし。
「お、おお！ゲルミュット様！我を助けに来てくれたのですね!!」
ガビルがペストマスクの男へ感激の声をあげる。
ゲルミュット様と心酔した表情を浮かべ崇める。その様子にガビルの名を付けたのもゲルミュットだったのだろうと用意に想像が出来た。
急に現れた横槍を指差し。
「なぁなぁリムルさん、あれどうする？」
「あー、どうするかな」
と思案している間に。
「ゲルミュット様ぁぁあ!!」
ゲルミュットの名を叫びながら俺が作った氷の砦から飛び出してしまったガビルとその一味。
よっぽど名付け親に会えたことが嬉しかったのだろうなもう一目散にって感じで。
「あれは……どうする？」
「……はぁ……助けるしかないだろ？」
ですよねぇ。
あれは殺されるよね。
「冷血者（コゴエルモノ）」
足元を凍結させ地面を滑りガビルを追い掛け、追い付くとガビルはゲルミュットにすがり付いていた。助けてくれと。
しかしガビルの懇願は無視され、ましてや鬱陶しいと足蹴に、手を離したガビルへ追い討ちをかけるようにステッキで殴る。
ガビルを失敗作だと口汚く罵り、魔弾を撃ち込むが間一髪でガビル一味がガビルの盾となる姿。
「冷血者（コゴエルモノ）……プラス脈動回復……プラス大自然（だいしぜん）」
撃ち込まれた魔弾は俺の魔素に触れると凍り付き地に落ちると同

時に地面から脈動回復の鈴蘭が咲き誇る。
そして、御披露目スキル《大自然》
◆◆◆
《大自然》
成長：魔素を流した対象を成長させる。
植物を限界を超えて育てる。
スキルの熟練度を一定時間、限界値まで成長させる。
◆◆◆
脈動回復で生み出した純白の鈴蘭が大自然の効果で大きく成長する、降り注ぐ光はガビル一味を包み込み瀕死の状態から全快まで回復させる。
「……ヨクル殿、我輩の子分達を……」
「あぁ、問題ない子分は無事だ。後は任せて後ろに下がれ、良い仲間を持ったな」
「う、うむ！」
自分を慕って着いてきてくれた子分達、自ら盾になり自分を守ってくれた子分達。
ガビルは込み上げる涙をグッと唇を噛み締め耐えると子分達を背負い下がって行く。
「さてと……えっと、ゲル……なんとかさん。あんたが今回の黒幕でいいんだよな？」
「な、なんなのだ貴様は!?ゲルド！助けろ！俺を！行き倒れのお前に飯を名を授けたのは俺だ！恩を返せ!!」
豚頭帝（オークロード）、ゲルド。
ゲルミュットの叫びに動き出し手に持った鉈を振りかぶる。
巨体から繰り出される一撃に一歩下がり身構えたが、鉈の矛先は俺に向けられてはいなかった。
「ははは っ殺せ！皆ごろしに…ぐひゃ!?」
振り下ろされた鉈は名付け親のゲルミュットの頭と胴体を両断し、ゲルミュットは何が起こったか理解できずに絶命。
「ゲルミュットさマの……ノゾみをカナエル」

ゲルミュットの死体にかぶり付くゲルド。
肉を喰らい、骨を砕き、血を啜る。
《確認しました。個体名ゲルドが魔王種への進化を開始します。》
何だこの声、前にも聞いたような。
それよりも魔王種？魔王になんのか？
ゲルドの身体から魔素が滲み出し身体を包み込んで行き、妖気が溢れだす。
「ヨクル！妖気に触れるな!!」
リムルさんの警告に脱兎のごとく離れた、背後を確認すると妖気に触れた死体がグズグズに溶けて行くではないか。
「……腐食……してる？おぇ……きもい」
ドクンッ……！
ドクンッ……!!
ゲルドを包む魔素の繭から鼓動が響く。
そして繭が割れ禍々しい妖気が吹き出す。
《個体名ゲルド。豚頭魔王（オーク・デイザスター）へ進化成功》
「オレの名はゲルド。豚頭魔王（オーク・デイザスター）ゲルドと呼ぶがいい!!」
魔王ゲルドと崇める豚頭族（オーク）達。
やはり伊達に魔王を名乗っていないな、魔素量が段違いだ、それはリムルさんもクロウやベニマル達も感じているようだ。
「シオン!!」
ベニマルの声と共に駆け出し斬りかかるシオン、だがシオンの膂力を受け止め更に押し返して見せたゲルドの腕力。
しかし、押し返し腕が伸びきった瞬間にハクロウが首を跳ねた。
だが、首を跳ねられてもゲルドは止まらないハクロウに鉈を振り下ろし自身の頭を掴むと胴体とくっつけた。
その後、続けざまにベニマルの黒炎獄（ヘルフレア）。ソウエイの操糸。ランガの黒稲妻を受けたゲルド。
流石にもろに喰らって無傷では居られないだろうと思われた連続攻撃をもゲルドは耐えきった。
飢餓者（ウエルモノ）と自己回復で傷ついた体を即座に回復し生き延びていた。

大きな傷には味方を喰らい飢餓者(ウエルモノ)で全回復してしまうし。
「流石魔王って感じじゃないっすか、これ」
少しでも体力が残っていれば回復する、ならば即死させるしかない。たが今の攻撃でランガは魔素切れとなり戦力が大幅に減り、決定打に欠けてしまった。
ならば……行くしかないだろう。
「リムルさん……行きますか？」
「あぁ、そうだな」（聞こえるかベニマル、後は俺達に任せろ）
俺達はゲルドの前に立ちはだかった。
近くに寄ると一層感じる腐食属性を孕んだねっとりとした魔素。
「鬼人5匹と狼はどうした、我の獲物を何処にやった」
「ランガの事か？ランガなら俺の影の中だ」
「喰ったのか……？」
「まさかお前じゃあるまいし」
しーーーん
「えっ……めっちゃ煽るじゃん……」
ブォォォン!!
「あっぶね!?何で俺!?煽ったのリムルさんですけど!?」
鼻先を掠める鉈に俺は仰け反り回避。
そして苦情を申す!!
「混沌喰(カオスイーター)!!」
しかしゲルドは聞き耳を持つ処か更に俺に向かい腐食の蛇を飛ばしてくる。
そして自身はリムルさんと一騎討ち。
「冷血者(コゴエルモノ)、残念だけど俺に魔素を使用した攻撃は効かないよ」
腐食の蛇は俺に触れる寸前に凍り付き砕ける散る。
これにはゲルドも多少驚いたらしく攻撃が一瞬止まる、そして隙を見逃さず攻撃を加えるリムルさん。
刀でゲルドの腕を斬り飛ばすと傷口に黒炎を燻らせ再生を阻害すると言う技術を使う。
リムルさんは続け様に攻撃を加えて行く、俺のすることと言えば腐

食の蛇を凍らせ防ぎ。ゲルミュットが使ってた魔弾を凍らせ落とす。
サポートするくらいしかなく、しかも、俺がわざわざサポートしなくてもリムルさんなら問題無いまである。
あれ？またしても俺いらなくね案件発生中。
しかし、リムルさんの猛攻を耐えたゲルドはリムルさんを鷲掴み腐食で取り込もうとしてるではないか。
「リムルさん!!手を離せ!!」
冷血者（コゴエルモノ）で
俺はゲルドの身体を一気に凍結させ、自己回復、飢餓者（ウエルモノ）の効果を一時停止させる。
あわよくば心臓も脳も停止させてやろうとしたが、ゲルドから常時漏れ出る腐食でそこまで俺の魔素を流し込めなかった。
だが、流石に此処までやればと思ってしまった。
「やべっフラグだわ……！」
《個体名ゲルドが凍結耐性を獲得しました》
「うわっやったなこれ」
耐性の効果で魔素が更に入りづらく、冷血者（コゴエルモノ）の効力が弱まる。
飢餓者（ウエルモノ）の停止が緩み始め俺の氷を取り込み始めたゲルド。
「ハッハ！オレに氷は効かないようだぞ？」
「うっわ煽り返されたんだけど……」
「落ち着けヨクル。俺に良い考えがあるお前も手伝え」
リムルさんから流れてきた念話。
「なるほど了解！」
俺はリムルさんの指示通りゲルドの全身を凍らせるのではなく氷で拘束した。
氷細工（アイスワーク）で氷を荊に造形しゲルドの肉に棘を突き立て身動きを封じる。
その隙にスライムとなったリムルさんがゲルドを補食する。
「お前が飢餓者（ウエルモノ）なら俺は捕食者（クラウモノ）だ」
「捕食者（ほしょくしゃ）じゃなかったんですか？ルビ振りかっこ良くなってるんですけど」

「うるさい!!」
ただゲルドも黙って喰われて堪るかと飢餓者(ウエルモノ)で対抗する。
リムルさんが喰えればゲルドも喰らう。
ゲルドが喰らおうとすれば俺が荊で邪魔をする。
俺に邪魔をされ腐食で攻撃すれば魔素を伝い逆流した俺の魔素がゲルドを体内から凍らせる。
勝負は目に見えて明らかだった。
喰らうというフィールドでリムルさんにゲルドが勝てる筈もなく、ましてや俺の凍結(邪魔)もあったんだ。
魔素の流れが停滞し、スキルの効果も一部停止、荊による身体拘束。
ゲルドの全身はスライムの粘体に包まれ泡となってリムルさんに取り込まれた。
ゲルドの肉も骨も意思も罪も全てリムルさんに喰われ。
スライムから人形に変化したリムルさんに俺は尋ねた。
「終わったんですか」
「あぁ、終わった。ゲルドは俺が喰らった」
こうして豚頭帝(オークロード)改め豚頭魔王(オーク・デイザスター)の討伐は終わりを告げた。
余談として討伐の後処理とゲルド率いる約15万の豚頭族(オーク)達の処遇についてジュラの森に住まう種族で会議を行った。
勿論議長は今回の立役者、リムル=テンペスト。
会議は激化するかと思われた。
同胞を虐殺された鬼人達、領土を踏み荒らされた蜥蜴族(リザードマン)。
きっと豚頭族(オーク)達を皆殺しにしろ!
位になるんじゃないかと思っていた。
が、実際はそうはならなかった。
リムルさんがゲルドの罪を喰らった。
即ち豚頭族(オーク)達をリムルさんの名の元に許せとそう言った。
当然只では押し通る物ではない。
許す代わりに豚頭族(オーク)には労働で罪の清算をして貰おうと言うことに。
リムルさんの意見に鬼人達も蜥蜴族(リザードマン)達も了承。

今回リムルさんが居なければ全滅も可笑しく無かったわけでリムルさんの意見を尊重するのはそうなんだが、まさか二つ返事で返されるとはリムルさんも想像して無かったみたいで目を丸くしてたよ。
「というわけで此れからバリバリ働いて貰うから覚悟しておけよ」
「ハッ!!命に変えてもその任全うさせて頂く所存!!」
会議の末、めでたく豚頭族(オーク)達はリムル村の住人となった。
そして勘当され湿地帯を追われたガビルと賑やかなガビル隊。
そのお目付け役として妹のソーカ達が仲間入りして、リムルさんの町は一層賑やかになっていった。
豚頭族(オーク)達は身を粉にして労働に勤しみ、ソーカ達はソウエイと共に町の警護、ガビル達は……何してんだろうね。
よく分からんな、この間なんてリムルさんを讃える踊りとか何とかの練習してたな。
あっそうそう、俺はと言うとゲルドと仲良くなったんだよ。
あぁゲルドってあれね。
豚頭族(オーク)達の副首領的な立ち位置だった彼ね。
豚頭族(オーク)達が労働している傍らで俺はソフトクリームや冷たい飲み物を配っていたから。
自然と距離が縮まっていったね、うん。
「ほいっゲルド。頑張ってるね、休憩もしないと駄目だぞー」
「これはヨクル殿。忝(かたじけ)ない……んぐんぐっ……ぷはっ」
飢餓者(ウエルモノ)の飢餓感さえ無ければゲルド達は何とも気の良い奴らだった。
俺のアイスは旨そうに食ってくれるし、飲み物だって冷たい旨いと飲んでくれる。
本当は誰も殺しなどしたくは無いのだろう、だが種族が環境が身分がそれを許しはしないのだろう。
同族を好き好んで喰らう者が何処に居ると言うのか。
「んじゃ無理せず頑張れよー!」
俺はゲルド達に手を振り別れると木陰に腰を下ろし思った。
魔物として生きるって俺が考えていたよりもずっとずっと大変

だったと。
何処の世界でも爪弾き者は辛い思いを抱えて生きているのだと。
俺も強くならないとクロウやリムルさん達を守れるように。
そして、俺はいつの間にか寝入ってしまってた。
まさか俺の知らない所で俺の中で急速に変化しているなど思いもせず。
『……主さんよぉ。逆境をぶっ壊すには力が必要なんだぜ？わかるだろ？』
《個体名ヨクルがスキルを習得しました。飢餓者（ウエルモノ）を生け贄に。呪怨者（クロキモノ）が変質、再構築完了》
《ユニークスキル解離者（カワリモノ）を獲得》
《解離者（カワリモノ）の申請を受理。冷血者（コゴエルモノ）と氷細工（アイスワーク）を統合。冷血者（コゴエルモノ）の進化を開始します》
《成功。冷血者（コゴエルモノ）は絶氷者（ヴィネア）へと進化しました》
『主さん、これから頼むぜ？ギハッ……！』

１０話《新たなスキルと胃袋小話》

オークディザスター、ゲルド討伐から数日後。
二代目ゲルドと沢山のハイオーク達。街の開拓も益々盛んになり俺は氷菓子を配給しながら街の住人達と仲を深め。
リムルさんと共に街の開拓に右往左往する日々。
そんなある日。
「嘘だと言ってよ……」
『ギヒッ誰に言ってんだ？主さん』
頭から俺の声だけど俺じゃない奴の声が聞こえてきた。
何言ってるかわからないだろ？俺も分からないし混乱は人一倍だ。
よく漫画やアニメで、こいつ直接脳内にっ!?的な状況があったがまさか自分に起こり得るとは考えもしないだろう、普通は。
暫く俺の身に起きた現象に対して処理が追い付かず呆然としていたがおもむろに立ち上がりリムルさんから貸して貰ってる自室から飛び出した。
『お？どこ行くんだ主さん。俺様、魔物の串焼き食ってみてぇぞ！』
お前の食いたいもん何か知るかぁ！
脳内でギャンギャン騒ぐ誰かさんの発言に反発し声を荒げる俺。だがこの声は俺にしか聞こえていないのだろう。
そうすると、どうなる？
端から見れば俺は大通りで突然大声を上げる変人だ。
子供ゴブリン達から指を指されたこと俺は絶対に忘れないからな!!
俺は心で号泣しながらリムルさんの元に駆け込んだ。
「リムルさん!!俺の頭で声がする!!」
転げ込みながらリムルさんに泣き付いた俺。
仕事中のリムルさん、秘書のシオン、半ばタックルするように飛び付いてきた俺に二人は驚き目を見開いていた。
が、俺にはそんなことを気にしている余裕は全くない。
だって今も絶えず脳内には愉快と笑い転げる何かが居るんだから

!!
「うわーー!!気持ち悪い!!」
『気持ち悪りぃだぁ!?』

◆◆◆

「で、何があったんだよ……」
ズズズッ……ゴクッ。
お茶を啜り、舌を火傷してヒリヒリする俺は今朝の事を話し始めた。
「実は……俺の頭に変なのがいるんだ」
……。
「変なのはお前だろ。みたいな目で見るのは止めてくれ！本当に本当なんだってば！」
違和感を感じたのは正しくゲルド討伐の時からだった。
戦闘に対する高揚感に血液や悲鳴を感じる度に走る快感。それこそ転生前だって俺はそんなサディストでは無かった筈だし、転生後だってサディスティックにはなっていなかったと思う。
それなのに……あんな感じになっていて。
ゲルド討伐後もちょくちょく耳鳴りみたいに聞こえていた雑音。今になって思えばあの雑音がこの声だったのだろう。
そして今朝だ。
ハッキリと聞こえてきた単語、耳鳴りのような雑音では無くて言葉。
『これからよろしくなぁ主さんよぉ』
俺の声で俺じゃない言葉遣い、粗暴で乱暴な印象を与える何か。
俺の中に何か居るだけでも恐ろしく気味悪いと言うのにまさか自身の声と同じなのだから、身を襲う恐怖はより一層だ。
「リムルさん！大賢者先生で俺を解析してくれ！お願いします！」
俺は懇願した。どうか、解析をしてくれと。
リムルさんも渋々了承してくれた。

それもそうだろうな、俺を補食するのはこれで二回目なのだから。仲間を補食するのは気分の良いものでは無いだろうし。
寧ろ嬉々として補食するような人なら、おやスライムなら凍り付けにしてかき氷に変えてやるわ。
「リムル様、執務の方は問題ありませんのでヨクルさんの要望を叶えてあげましょう！」
おお！シオン！なんて良い奴なんだ!!
「シオン！ありがとう！料理が出来ない、不器用、触るものを粉砕するデストロイヤーだとか噂で聞いたがそんなことないじゃないか！聖女か！お前は女神だ!!」
「……いえ！お気になさらず！さ、さ、善は急げですよ！」
シオンに背を押されリムルさんに押し付けられる俺。
「お、おいシオン？どうかしたのか？」
「いえいえ、不安な事は早く解消した方がよろしいかと思いまして！」
「そ、そうか？ありがとうな、シオン！」
「……因みにヨクルさん、先程の噂は誰からお聞きに……？」
「え？あれは……確かベニマルだったかな……何でそんなこと聞くんだって……あれ？シオンは？さっきまでそこに居たのに」
何故と問い掛け振り替えればそこにはシオンは居らず、開け放たれた扉があるだけで。
どこ行ったの？と首を傾げリムルさんの方を見れば額に手を宛天を仰いでいた。
「……俺、不味いこと話しました？」
「あぁかなりな。ベニマルよ安らかに眠れ」
そのすぐ後リムルの街に絶叫が鳴り響いたとか。

◆◆◆

その後俺はリムルさんの捕食者で喰われた。

ヒヤリとしたスライムボディが俺の全身を包み吸い込まれる感覚、暗転する意識と全身を探られるようなむず痒い感覚。
そして、目を覚ますと俺は真っ黒な空間に寝ていた。
「……ん？リムルさんの部屋じゃないよな……何処だここ」
何処までも何処までも広い空間。
恐らくは前にリムルさんに聞いていた胃袋という異次元空間だと思うのだが、多分で何となくだ。
「おーい！リムルさーん!!」
どうすればいいか。
なにすればいいのか。
わからないのでとりあえずリムルさんを呼んでみる、リムルさんが反応すればそれでいいし、リムルさん出なくても大賢者先生が反応してくれればと思ったんだが、俺の声は届かさず声が反響し消えていく。
暫く助けを呼んでみたもののリムルさん達からの返答が無く。
どうしたものかと頭を悩ませていた俺。
返答も無かったからてっきりこの空間には俺しか居ないんだろうなと勝手に思い込んでいた俺。
「貴様、我が姉と面識があるのか……？」
「うへぇあぁあ!?」
背後から突如掛けられた声に驚き跳ねたのは当然だろう、だって一人だと思っていたんだから。
しかし、驚いたことは別として誰かが居た事を確認できたのだから良しとしよう早速意気揚々と振り返った俺はまたしても驚く事となる。
何かでっかい竜がいた。
黒く分厚い鱗。口から覗く鋭い牙。黄色く光る眼光。
そして、酔ってくる程に濃すぎる魔素。
「我の問いに答えろ、お前は我が姉と面識はあるのか！」
俺の事などお構い無しに凄んで詰め寄ってくる竜、ずりずりと後退し近付いてくる顔を押し返すが竜はそれでも諦めない。

目の前の自分勝手な振る舞いに俺はだんだんと腹が立ってきた。
なんだなんだ。人をいや、善良な霜男を捕まえて突然詰め寄り意味のわからんことばかりいいよって!!
「はぁ!?あんたの姉なんか知らんわ!!そもそも名乗らず赤の他人を捕まえて質問責めですか!?自分勝手が過ぎるんじゃないか?そのでかい図体と膨大な魔素をちらつかせれば言うことを聞くとでも!?ふざけんなよ!?こちとら朝から変なのが頭にいるわで苛立ってんだ!!少しは他人の事も考えて欲しいね!!」
「……」
はぁはぁ……言ってやったぜ。
竜はポカーンと呆然と口を開けていたが、次の瞬間。
「フハッフハハハハ!!面白い!!お前面白い奴だな!!」
大口で笑い始めた。
「……面白いの意味がわからんのですが……」
「いや何、我を前に啖呵を切るような輩は久々でな。そうか、そだな。名乗りは大事であろう失念していた我の落ち度だ」
そして、竜が名乗ったのはまさかまさかのお名前だった。
「我はヴェルドラ=テンペスト。ジュラの大森林の守護竜でありリムル=テンペストの盟友だ！」
「……あー、ヨクルですぅ。よろしくお願いしまーす……」
まさか消えた暴風竜に会うとは思わんだろ、普通。
その後ここはリムルの胃袋であるとヴェルドラが説明してくれた、ここで無限牢獄に囚われたヴェルドラを解析し解除している最中だと言う事も。
リムルさんとの馴れ初めも……聞いてないんだが。
後何故俺を呼んだのかも説明された。
何でも俺の魔素と雰囲気、出で立ちがヴェルドラの姉に似ているのだとか。
昔姉にこっぴどい躾とは名ばかりな拷問を受けていたヴェルドラはめっぽう姉が怖いみたいだ。
まぁ確かに躾の方法を聞く限りかなりクレイジー。

爪を噛む癖を矯正するために爪を全部剥ぐなんて思わんだろ普通。
その話をしているヴェルドラの怯えようはかなりのものだった。
「……わ、我怖く無いからな……我が領地に……来ている……なら！我が相手をせ、せねば……うん」
それと怖すぎる姉も氷を扱うのだとか、だから余計に俺と被って見えたんだろう。
だが、俺にはその姉との面識は無いし。
「気のせいじゃないのか？俺は姉とやらに会ったことは無いと思うぞ？」
「そ、そうか。我の……考えすぎやも知れん……な」
白氷竜、ヴェルザード。
それがヴェルドラの姉の名前らしく会ったことは無いのに何故か気にかかるそんな不思議な感覚を胸に俺はヴェルドラとの初対面を果たした訳だが。
「で、どうやって戻るの……」
「……その内戻れる筈だ」
「なんでそこら辺あやふやなの、呼んだのあんたでしょ」
「だ、だって呼んだ事はあるけど、戻した事は無いんだもん!!」
不貞腐れそっぽを向くヴェルドラ。
デカイ図体でもんって……。
「まぁいいか、リムルさんが何とかしてくれるでしょ」
「うむ！流石は我が盟友と言う所だの！」
ヴェルドラはまるで自分の事の様に誇らしげに胸を張る。
よっぽどリムルさんのことを気に入っているだろう、そりゃ何百年も一人で過ごし、近寄ってきた魔物もヴェルドラを視認すれば蜘蛛の子を散らすように逃げていってだろうから。
たった一人の友人、盟友か。
かつて現実に飽き、一人で居たいとひねくれてた俺と友達になりたいと言った親友の姿が脳裏に浮かぶ。
まぁ、こいつが原因で死んだんだが……それでも俺のたった一人の親友だった。

あれ、何か悲しみが溢れてきたぞ。
やはりなんだかんだっていてもアイツの事が大切だったんだな俺、死んでから気付くなんてな。
最後に呪詛的な事を言ってしまったのが申し訳無いな。
もう会えないアイツを思うとヴェルドラとリムルさんの関係が眩しくて尊くて、少し羨ましいなと思ってしまう。
「盟友か……仲良くて羨ましいよ」
「ん？何だ突然」
「いや、昔を友達を思い出してさ、もう会えないんだなって実感して。少しセンチメンタルな気分に……な……」
「……うむぅ……そうなのか。……ならば新たな友を作れば良かろう。名案があるぞ!!今日から我らは友だ！盟友はリムルが居るからな、お主は我の親友だ！」
まさか、まさかの急転直下の展開。
暴風竜と友達になろうのフラグが立っていた。
「えっ？いや、俺が暴風竜の親友!?俺にそこまでの価値は無いだろう!?」
ヴェルドラの友達宣言は嬉しいが、かの暴風竜の親友なんて。
と、否定するけれど。
「ならば貴様にも名を授けなければな!!」
親友に相応しい名を!!
そんな感じで盛り上がっているヴェルドラを止められるわけもなく。
「名前ならもうあるんだからな!!」
「雪、氷……うーむ……ヨクル、ヨクル……」
「駄目だこりゃ……」
ヨクルに続く名を思考すること凡そ３０分。
胃袋内の時間の流れが外と同じかは知らないが、それくらいだ。
俺は自身のスキルで作った雪で雪だるまを作っていると。
「決まったぞ!!!!お主の名はヨクル＝ライフだ!!」
ヴェルドラが俺の名を宣言すると共に俺の身体の内から力が沸き

上がる、それは全身にまで行き渡る。
「……なんか超疲れんだけど……」
「うむ!!中々に良き名を授けられたのではないか!?流石我だ!!」
「……ありがとうな、ヴェルドラ。親友からの贈り物大事にするよ」
ヨクル＝ライフ。
霜男にしてヴェルドラの親友となる。
胸の内から溢れる力と刻まれた名を染々と感じながら胸に手を当てていると。
突然身体が引っ張られ徐々に浮かび出す俺の身体。
「リムルからの呼び出しだな、それではな。何れ会おうぞ親友、ヨクル＝ライフ」
「あぁそうだな。待ってるぞヴェルドラ！」

眩い光に包まれ、目を覚ますとそこはリムルさんの執務室だった。
リムルさんから水が入った木工カップが手渡され、受け取り口に含む。
「解析終ったぞ……ん？お前なんか変じゃないか？」
と、怪訝そうな顔で見られる。
でしょうね。
何たってヴェルドラから名を授けられるとは思わんだろうからな。
「……何か胃袋でヴェルドラに会って、名をつけられた」
「へぇー、ヴェルドラに会ったのか。そんで名付けまで……ん？名付け??」
「はーい、ヨクル改め。ヨクル＝ライフになった霜男でーす」
顔の横でピースなんかをして決めて見るが、そんな茶々で空気が変わるわけが無くて。
「えぇぇぇぇぇ!?!?!?」
この日リムルの街に2回目の絶叫が鳴り響いたとさ。
「フハハハハ!!聞いて驚けイフリート!!我に新たな友が親友が出来たぞ!!」
その頃胃袋のヴェルドラはイフリートの将棋をしながら俺の事を

話していた。
鼻唄を歌いながら上機嫌だった。
だから……ヴェルドラは気付かない。
次のイフリートの一手、それは自身の敗北の一手だということに。
「王手です」
「……」

11話《解離者と絶氷者》

「で、どうでしたか？」
「いやいや。普通に話し進めようとするんか貴様は」
ゴツンッ。
呆れた様子で俺の頭をチョップしソファへと腰を落としたリムルさんは、やれやれといった顔で頭を振る。
解析をしてくれと押し掛け。ヴェルドラと友達に。
日頃村の開拓や実務で忙しいリムルさんの手を煩わせて本当に申し訳無いと思っている。
しかし俺は悪くないと言い張る。
だって頭の変なのは勝手に出てきた訳で。ヴェルドラと友達になったのだってヴェルドラからのお誘いな訳だ。
即ち俺は自発的に行動し結果を出した訳ではないからして。
「そんなこと言われましても俺、悪くないもん……俺、何もしてないし……」
膝を抱え、いじいじと床を撫でる俺。
「つたく……ヴェルドラの性格はわかってるからな。恐らく半ば強制だったんだろ？」
「良くご存じでエスパーまで獲得したんですか？」
「そんなんじゃねぇよ。ただ友達付き合いが長いだけさ」
そう言いながら外を眺めるリムルさんの横顔は、リムルさんを誇らしく話すヴェルドラの表情と瓜二つだった。
「ほーう。てかそんなことより俺の解析は!?」

◆◆◆

『解離者（カワリモノ）』
解離／結合：あらゆる物を解き離し、あらゆる物を結び合わせる。
森羅万象：この世のあらゆる事象を知ることが出来る。
理想の君：自身の精神を解き離し、理想の自分を形成し使役する。

並列高速演算：多数の思考、演算を同時に行える。
呪詛：言葉で対象者を呪い殺す。
解析：あらゆる事象を解析し理解する。
『絶氷者（ヴィネア）』
氷結：自身の魔素に触れた対象の一切を凍結する。
凍結：対象の五感、記憶等の概念を凍結する。
氷魔召喚：眷属を召喚する。
奪取：氷で死した亡骸から力を奪う。
停止：事象を一定時間停止し、固定する。
氷技工：氷をあらゆる形に整形し、氷に命を、能力を与える。

◆◆◆

「解離者（カワリモノ）に絶氷者（ヴィネア）!?」
俺の頭の変なのを調べて貰ったら。
まさかの新スキルが二つも出てきたんだけども。
『俺が解離者（カワリモノ）だ。キシシ……理想の自分とは嬉しいねぇ』
「まさか、こいつ（解離者）が俺の大賢者様なのか……?。なんかめっちゃ口悪いんだけど」
自身の頭を指差し、苦笑い。
解離者（カワリモノ）。
確かに欲しかったスキルであった、これまで手探りで確かめていた未知のスキルに対して解析で内容を理解できるようになるのだから。
これまでの苦労が無くなると思えば……。
『そうさ、俺様こそ主さんの望んでたスキルなんだぜぇ?嬉しいだろぉ?』
声だけだと言うのにニタニタしてるのが目に浮かぶような声色。
苦労が無くなる……と……思えるか!!
「まさかこいつが俺の理想像だと!?粗暴で人の事をバカにしたような

言い草のこいつが……!?」
「……俺にはその声とやらが何を言ってるかわからんが、ドンマイ」
何か悟った様なリムルさんに肩を優しく叩かれ励まされてしまった俺は頭の声、基新たなスキル解離者(カワリモノ)に悩まされながら執務室を後にした。
自室に戻る道中にも解離者(カワリモノ)は終始頭の中でギャンギャン騒ぐ。
やれ、こっちに行こうぜとか。
あっちが面白そうだとか。
果実が食いてえだの、アイスが食いてえだと。
正直解離者(カワリモノ)の利便性を犠牲にしてでもこいつを抹消したい。
いっそのこと絶氷者(ヴィネア)で頭ん中のこいつを氷漬けにして殺してやろうかと本気で考える程にはうんざりしている。
「お前さ、もう少し大人しくしといてくれないか？頭が痛くて敵わんからさ!?」
『おいおい、邪険にすんなよ。俺は役に立つぜ……？』
いら。
「そーすか。なら俺のスキルと耐性の整理でもしててくれよ……少しは静かになんだろ」
『おぉ、初仕事って奴だなっ!!任せろ!!』
キーーーーンッ……。
脳内の声で耳鳴りになるとは、これどういう……？
なんて事を考えている内に解離者(カワリモノ)は俺のスキルを解析して行く。
『痛覚無効。凍結無効。耐性はこれだけか、紙耐性か？』
「う、うるせぇ!!」
『ったくよぉ……ベニマルから炙って貰えよ。火炎耐性獲得したら結合して熱変動無効にしてやっからよ……』
ぐぬぬ……。
こやつマジムカつく。
こうなったらやってやるよ!!
「ベニマルーーー!!俺を炙れ!!」
「……はい……？」

いきなりの来訪者に自身を炙れ何て言われれば、目を丸くするのは当然だろう。
現に居間で刀の手入れをしていたベニマルは手を止め目を丸くしている。
こいつ何言ってんだ？
そう思っているに違いない。
だが、あの解離者（クソ野郎）に煽られたままではいられん。腹の虫が収まらんわ!!
「ベニマル！俺を炙ってくれーーー!!」
「何言ってんだ、お前は?!?!」
結果、耐性獲得の強行手段に出た俺はベニマルが手にしていた刀で脳天を殴られ。
「……きゅ……う」
気絶する事となった。
『お、物理攻撃耐性を獲得したじゃねぇか。結果オーライだな』
あー、マジこいつムカつくわぁ!!

数時間後。

「いっつ……」
痛む頭に自身の冷えた手を当て冷やしていた。
目の前には深々と頭を下げるベニマルと何があったのと頭上に疑問符を浮かべるシュナちゃん。
そして、ゲラゲラと下品に笑う俺の解離者（理想像）。
本当にこれが俺の理想像とか死にたくなる。
「あのぉ……これは一体何が……？」
うん、わかるよ。
意味わからんよね。
「あはは……ちょっとね。俺の暴走みたいな？」
「は、はぁ……。お兄様は如何したのですか？」
「それも……俺のせい……かな？」

俺の発言に勢いよく顔を上げ弁解しようとするベニマルだが、俺は手で制す。
だってお前は本当に何の落ち度も無いんだから。
恐らくリムル様の御友人に手を上げたとか何とか高い忠誠心で己を責めてたりするんだろうが。
マジで止めて欲しい、本当に止めて。
俺が辛いから……。
「……良くわかりませんが……ヨクル様も昼食御一緒致しませんか？直ぐに御用意致しますので」
シュナちゃんに昼食に誘われ、そう言えば朝から何も食ってないことを思い出した俺。
すると身体が思い出したかのように空腹を訴えてきた。
「いいのか？なら食べようかな」
「是非！お兄様、お手伝いお願いしてもよろしいですか？」
「あ、あぁ……任せろ」
シュナに連れられ奥へ消えていったベニマル。
「……俺、何馬鹿な事したんだろうか……」
俺はというと自己嫌悪に陥っていた。
イライラ、ムカムカしてたからってあんな、あんな……
「（うわぁぁぁぁぁぁぁ!!!）……殺して……」
『いやいや、なかなかの胆力だったぜ？俺を炙れ!!なんて中々面と向かって言えやしないぜ？』
「おまっ……!?お前のせいだろが!?」
『おいおい、俺は提案しただけだぜ？やれなんて言ってねぇだろ？』
あっけらかんと開き直り腐りやがる解離者に再び沸沸と沸き上がる怒り。
『まぁ良いじゃねぇかよ。耐性はゲットしたんだからよ』
「お前が言うんじゃねぇ！」
マジで凍らせてやる。
頭に乗せていた冷やすための手に魔素を集め、脳内のごみ野郎を完全に機能停止にしてやろう。

冷気が空気を冷やしパキパキと空気中の水分が氷へ形状を変えて行く。
あ、こいつマジだ。
解離者も理解したんだろう。急に慌てたように止めろだの、冗談だろとか、悪かったとか言い出したが。
もう遅い……！
「凍っ……」
「お待たせしました。リムル様からお聞きしたトンジルなるものを御作りしましたよ」
すると奥から鍋を持ったシュナちゃんが登場。
『た、助かった……！』
ちっ、命拾いしたな。
「……？……どうかいたしましたか？」
「いや、何でもないよ。おぉ美味しそうだ、シュナちゃんは料理が上手いんだな」
そう言うと。
「そんなこと無いですよ」
なんて謙遜していたがほんのりと赤く色づく頬に俺はにっこりと笑った。
可愛い。
俺の荒んだ心に潤いが染み渡る。
『何だよ主さん、そんなに疲れてんのか？』
だからお前が言うな!!お前が!!
俺はドワーフ三兄弟が作ったであろう、精巧な木のお椀に豚汁を掬って貰い実食。
フー……フー……ズルズル。
「おぉ旨いな、良く出来てるよ」
この世界に味噌なんて無いだろうに上手く出来てる、優しい味だ。
野菜は自家栽培の野菜たち、旨味が汁に溶け込んでるな。
シュナちゃんの豚汁に舌鼓を打っていると何やらベニマルの様子が可笑しい。

仕切りにシュナちゃんを見ては何度もお椀の中身と行ったり来たり。
シュナちゃんはと言うとベニマルの視線に気付いているが敢えて無視しているようで瞼を閉じ食事を続ける。
「ベニマル？どうかしたのか、落ち着き無いぞ？」
俺が尋ねるとベニマルはあからさまに身体を魚籠つかせ目を剃らす。
「……ん？」
「……いえ……何でも……」
何とも苦い表情を浮かべるベニマルにシュナは溜め息混じりにポツリと呟いた。
「お兄様はニンジンがお嫌いなのです……」
ブハッ……!!
「シュ……シュナ!?」
「お前ニンジン嫌いなのか？……クククッ……！」
「わ、笑うな!!」
ボオッ……!!
顔を真っ赤にして怒鳴るベニマル。
余程恥ずかしいのだろう、羞恥を隠すためか感情の起伏でなのかベニマルから炎が吹き出し。
「あっち!?止めろ！悪かったよ！からかってごめんって!!溶けッから俺溶けるからぁ!!」
まさか、まさかの炎は俺のみを炙ってきた。
《おっ主さん喜べ。予定通り炎熱耐性を手に入れたぜ！》
うっせぇわ!!

◆◆◆

プスプス。
俺、ヨクルは現在ベニマルから炙られ黒煙を上げながら帰宅中。
まさか、ニンジンであんなにキレるとは思わず、手痛いしっぺ返し

を食らったものだ。
《キシシ……でもお陰で熱変動耐性を獲得、物理攻撃耐性もオマケで獲得も出来ただろ？》
脳内のこいつは結果オーライと笑う始末。
「……はぁ……何か疲れたな……」
今日、まだ半日しか経っていないが物凄い疲労感だ。
早く自室で寝てしまいたい。
この耳障りな脳内の声をシャットアウトしたい、最早歩くことも億劫だ。誰か俺を担いで家まで帰ってくれないだろうか。
と怠惰でどうしようもないことを一人でごねても誰か来てくれるわけも無し。
はぁ……。
《呼んでやろうか？》
「……は？」
《絶氷者（ヴィネア）。氷魔召喚を行使。》
解離者（カワリモノ）の声と共に、俺を中心として青白い線が地面に魔法陣のような物を刻み付けて行く。
俺はというと何が起こっているのやら、魔素は無くなって行くし。魔法陣は更に光輝いて行くし。周囲の草木には霜が張り付き、冷たい風が吹き荒れる。
《氷魔召喚》
魔法陣から目を開けていられない程の閃光が溢れ、目を腕で覆う。
《おーい主さん。目を開けてみろや》
「……えーっと、どちら様ですか？」
言われるがままに目を開けてみれば。
目の前には青い糸で刺繍が施された腰巻きと角を付けた木の兜を被り
白い体毛と褐色の肌、腕や足は丸太のように太く筋骨隆々とした身体。
口から覗く鋭い犬歯、そして無言で此方をじっと見つめる深い青い丸い瞳。

《薄氷(ウェンディゴ)の子君だぜ！》
「……よ……ろし……く」
たどたどしく言葉を発した彼は不器用に笑って俺の手を取る。
あ、可愛い。
何の反応もない俺におろおろと慌てる姿や俺と目線を合わせようとしてしゃがみ此方を覗き込む姿。
可愛いすぎだろ。
薄氷(ウェンディゴ)の子が仲間になった。

12話《薄氷の子》

「あるじ……おー……おはよっ……！」

視界を埋め付く程の至近距離、満面の笑みでのモーニングコールで目を覚ました俺、ヨクル。

もぞもぞと布団から這い出て寝ぼけ眼を擦る。

ゴシゴシ……。

寝起きでボーッとしてた俺の後にピッタリと着いてくる大男。

俺が目を擦れば真似して力一杯擦って目を真っ赤にし、睡眠で凝り固まった筋肉を伸ばせば真似にして腕を力一杯引き延ばし肩を脱臼させる。

「……い、たい……グスッ……」

ダランと垂れた腕を押さえながら目に大粒の涙。

「あー、ほらほら無理に動かさないの……《脈動回復》」

脱臼した肩に脈動回復を掛けながら痛くないようそっと肩を押し入れてやれば。

カコンッと嵌まった。

肩を入れ直すなんて事経験したこと等無かったがやれば出来るものだな。

「なおった……エへへ……あり…がと……！」

彼は治して貰った肩、腕をグリン、グリンと大車輪の如く回し尊敬の眼差しとでも言うのだろうか。

めちゃくちゃキラッキラッした瞳で見詰めている。

そこまで大したことしてないだけに少々むず痒くなってきて、頭を掻き。

「いーんだよ、気にすんな」

俺は俺よりも高い位置にある頭を撫でてやる。

するとキョトンと目を丸くしたと思えば、破顔し寧ろ俺の手にもっと撫でてと言わんばかりに頭を擦り寄せて来る。

「……エへへ……」

この馬鹿可愛い大型犬系男子は薄氷（ウェンディゴ）の子。

先日新たに進化したユニークスキル絶氷者（ヴィネア）の氷魔召喚によって呼ばれた俺の眷属……らしい。
『くわぁあ……あーぁ……はよ』
「お前も寝るのか……？」
解離者（カワリモノ）も寝るんだな。
多重人格者は人格が交代で出るとか、主人格が起きてるときは他の人格は寝てるとかテレビで見たことあったが。
まさか己がそうなるとは……もしかして今は乱暴で粗暴なこいつだけだけど他にも人格出来たりするんだろうか……？
『おっし！主さん！今日は何すんだ？』
……もしそうなれば頭痛は絶えないな……てかもう痛いわ。
先の事を想像して頭痛を起こすとは。
前途多難とはこの事。少しでも頭痛を紛らわそうと眉間の皺を指で伸ばすとウェンディゴ君も指で眉間を揉み揉み。
「ハハッ真似するのが好きなのか？」
そう聞けばニカッと笑うウェンディゴ君。
「そっかそっか。それじゃあ出掛けるか」
トコトコと俺の後を着いてくるウェンディゴ君。
先ずはリムルさんに紹介してくるか。
あ、そう言えば……。
「なぁウェンディゴ君。お前名前いるか？」
いつまでも種族名で呼ぶのも面倒だし、距離を感じる。
別に気にしなければそれなんだろうが俺が嫌だ。
「!?……い、いの？」
「あぁ君が良ければ俺が付けてもいいか？」
「うん！」
「おうよ！それじゃあ……《シュニィ》ってどうだ？雪って意味なんだ気に入ったか？」
名付けを行った瞬間。
ガクッと俺の中から魔素が消え。酷い脱力感が全身を襲うが俺は膝に手を付き何とか身体を支えると目の前の光景に釘付けになる。

名付けはクロウの時に経験しているが、進化の様子を直で見たことなど無かったから。
ウェンディゴ君改めシュニィの身体が光輝き徐々に変化して行く。
巨大でゴツゴツしていた身体は小さく縮み、全身を覆っていた白い体毛は消えフワフワの白髪に。
褐色の肌はそのままに筋肉で引き締まった身体と真ん丸とした青い瞳、犬種は少し小さくなり笑うとチラリと見え隠れ。
次第に光が収まると……。
そこには少年が居た。
ウェンディゴ君の面影を残した少年シュニィ、元の筋肉があまり変わらなかったから童顔で筋肉質というアンバランスさ。
これがガッチビというやつなのだろか。
等と場違いなことを考えている内に進化が終わり、目覚めた直後のように目をぱちくり、ゴシゴシと擦り目を開け俺を視認すると。
「あるじ、ぼくシュニィ。なまえきにった！」
満面の笑みで喜ぶシュニィ。
あまりに純粋で無垢な笑顔にこっちまでつられて笑顔になってしまう。
「気に入って貰えて嬉しいよシュニィ。改めて俺はヨクル、ヨクル☒ライフだ。よろしくな」
「よろしく！ヨクルさま！」
俺の腰元に抱き付き、グリグリと頭を擦り付けるシュニィ。俺もシュニィを抱き止め、よろしくなと言いながら頭を撫でれば、嬉しそうにはにかみもっともっとと頭を押し付ける。
『薄氷の子（ウェンディゴ）が進化したか。え～何々こいつは進化して……マジか冷たい顕現（イタカ）になったぞっ!?……』
うん？
俺は抱き付き離れないシュニィを抱き頭を撫でながら、解離者（カワリモノ）の解析結果にビシッと硬直してしまった。
血の気がサーッと引いて行き身震いが止まらない。
まさか嘘だろ……イタカだと……？

だってイタカってあれだろ……クトゥルーだったよな……？
『こりゃ大物だぜ？そもそもウェンディゴって奴はイタカのモデルだからな、こうなる可能性は有ったわけだな。主さんの魔素あってこその進化だったのかもな』
本来ならどうなるはずだったんだ？
『あー、知らねぇ。何かハイ・ウェンディゴとかじゃねぇか？まぁいいじゃねえか、主さんに懐いてるし種族がどうであれシュニィに変わりねぇだろ？』
うぐっ……！
それはそうだが……。
……。
それもそうだな。難しく考える必要なんて無かったな。
まさか、お前に気付かされるとは。
それに呼び出しておいて放置するなんて無責任な事、出来るわけ無い。
加えてシュニィの信頼を裏切る程非道な精神を俺は持ち合わせてない。
要するに俺はお人好しってことだな。
「さ、シュニィ。これからリムルさんってスライムに会いに行くから行儀良くね」
「ぎょうぎ……うん、わかった！シュニィがんばる！」
シュニィと手を繋ぎ歩を進める。
リムルさんの家まで歩く道中に色んな話をした、シュニィは何を聞いてもあまりわからないようで家族や自身の事も説明は出来ていなかった。
だけど……一つだけはっきりと答えた質問があった。
「シュニィは何処から来たんだ？」
「さむくてなにもないしろいところからきた」
「……そうか。寒くて白くて何もない所、か」
家族も知らない、自分と言う物もわからない。
寒く白い恐らくは氷の世界にずっと一人でいたのだと思うと胸が

痛くなる。
だって俺も理解できるから……。
死ぬ瞬間誰に看取られるわけでもなく、一人寒く全身が冷たくなって行くのを感じながら命の炎がフッと消える。
それは辛く耐え難く、激情に駆られながらも酷く寂しいものだったから。
「寂しかったよな……」
「？……ぼく、さみしくないよ。ヨクルさまがいるもん」
「……そうだな！シュニィには俺がいるからな。それにリムルさんもきっと友達になってくれるぞ、とても優しいスライムだからな」
「うん！」

◆◆◆

「冷たい顕現（イタカ）のシュニィ君です！」
シュニィは行儀良くの約束を守り、ペコリとリムルさんにお辞儀し愛想良く笑った。
対してリムルさんはと言えばやはりと言うべきか硬直していた。
「おいおい、イタカってあの？」
「あのイタカですね」
まさか信じられないと言った様子に俺は苦笑い。
「クトゥルフだったよな？確か邪神の……」
「ＹＥＳ、それです。そのイタカです」
リムルさんの質問を肯定すれば案の定頭を抱え始めた、恐らくこれからの事を危惧しているのだろうな。
先日行われた豚頭族（オーク）の討伐。魔王へと進化したゲルドの対処。
裏で糸を引いていた魔神ゲルミュットと名乗った魔神の存在。
この件は必ずジュラの森から各地へ秘匿していていようと噂話は広がることだろう。
今までのようにひっそりと暮らしていけるのも時間の問題というものだ、魔王を殺し、魔物を統治して町を作るリムルさん引いては俺

を各地の力ある存在は良しと放置するはずが無いからな。
その対処に頭を悩ませていたのにも関わらず……。
まさかの邪神イタカの登場。
シュニィの種族が問題なのは若干あるが、本当に問題なのはもし冷たい顕現という不確定要素の現れ。
さっきも話したようにこの町は今とても難しい状況にある。
力を持っているとバレた以上、注目されるのは必然であり。魔物であることで討伐対象となる危険性も出てくる。
そんな中で何が起こるか想像できない邪神の存在。
なにもなければそれで良し。
だが、もし何か起きれば……。
それは事態を好転させるものなのか、悪化させるものなのか。
「心配しないでリムルさん。この子は俺が責任を持って面倒みますからリムルさんに負担は掛けません」
リムルさんには世話になってばかりだ。
面倒事はこれ以上掛けられない、だからこの子は俺が面倒をみる。
もしリムルさんに負担が掛かるようなら、この町から出る可能性もあるかもな。
でも、それでも俺にはこの子を放っては置けない。
孤独な思いはもうさせたくないから。
一方渦中の人物であるシュニィは話が分からなかったからかキョトンとしていた。
こんな無垢で可愛い邪神がいるのだろうかと思わせる素振りが可笑しく微笑み頭を撫でれば嬉しそうに笑った。
「……おいおい、何を勝手に話を進めているだねチミ達は俺がそんなに懐の狭いスライムに見えているとしたら俺は大変ショックだよ」
「え……でも……」
「いやいや、野暮な事は止めたまえ。この町の主は恥ずかしながら俺、ならこの町で起きたことは俺にも関係ある。知らぬ存ぜぬで無視なんか俺はしないよ」

人形からスライムにクルリと周り変化したリムルさんはシュニィの腕の中へ飛び乗る。
「改めて俺はリムル＝テンペスト。よろしくなシュニィ」
「うん！すらいむさん、ふにふに！」
初めて触れたスライムのひんやりプルプルの感触に目を輝かせたシュニィ。
ギューと抱き締める、それはもう見るからに全力って感じで。
「ちょっ!?ちょちょちょ!?!?シュニィくん!?千切れる！千切れるからぁぁぁぁ!!!」
シュニィの腕を境にまるで砂時計のガラスのようになってしまったリムルさんに俺は思わず笑ってしまった。
目の前で楽しそうに戯れるリムルさんとシュニィの姿、その光景に俺は微笑む。
そして実感した本当にリムルさんは凄い人だ、改めてリムルさんの懐の大きさに感服せずにはいられない。
本来なら人と言うものは自分とは違う存在を否定し拒絶する生き物だ。
よく知りもしない人や物を嫌悪し遠ざけ理解する事すらしない。
だがリムルさんは見ず知らずの俺を信用してくれている。
加えて初めて村に来た俺やクロウを受け入れてくれた事。
冷たい顕現（イタカ）という宇宙的な恐怖を体現する種族になってしまったシュニィ。
それを受け入れ、理解しようとしてくれた。
「……ありがとう、リムルさん」
「シュニィくん!!腕を緩めてッ!?緩めてくれぇ!!」
「あははっ！ぷるぷるきもちーね！」
と、感傷に浸っていた俺だったが、知らぬ間にリムルの身体が真っ二つになるのでないかという程に絞られていた。
てか、そろそろ助けないと不味いかな……。
しかしシュニィの顔とは不釣り合いな程に鍛えられバキバキボディの肉体に非力な俺が敵うわけもなく。

静かに合唱をリムルさんに贈ろう。
「いやいや！諦めんなって!?もっと頑張ろ!?ヨクル!!おいヨクル!!」
数十分後。
「ぜぇ……はぁ……し、死ぬ……！」
「？しぬ、や！だめ！」
スライムボディをここぞとばかりに堪能し尽くしたシュニィ、やっとの思いで解放されたリムルさんの真ん丸ボディはあろうことか瓢箪に。
「ぶはっ……くくくっ……」
「おい、ヨクル。今笑ったな！お前笑ったな!!」
「いや、すみ、くくっ、すみま……あはははっ!!」
いやいや、笑うなと言う方が無理だろう、瓢箪スライムに誰が笑わずにいられると!?
「すらいむさん、ごめんね。シュニィやりすぎた……はんせい」
「グハッ……何だこの可愛すぎる生き物……!?」
リムルさんに目線を合わせるようにしゃがみこみ、ごめんなさいとペコリと頭を下げたシュニィ。
その際首をコテンと傾げるのを忘れていない。
シュニィの可愛さＭＡＸごめんなさい攻撃に流石のリムルさんも効果抜群は免れず。
急所攻撃（クリティカルアタック）を受け、ノックバックで身体をいや、スライムボディを大きく仰け反らせ呻き声を上げると静かに床へと沈み込んだ。
パタリ……。
一発ＫＯ!!
勝者シュニィ、Ｗｉｎ!!
「すらいむさん！しっかりして！すらいむさーん！」
「……シュニィ、そろそろ本当に逝ってしまうから止めようか」
あぁ燃え尽きてるよ。
真っ白に、ホワイトスライムに。
「……ヨクル、シュニィの強さを確認しとけよ……ガクッ」
「……あ、ハイ」

こうして可愛すぎるショタ。
クトゥルフ神話の邪神にして冷たい顕現（イタカ）の名を関する魔物。
シュニィ君が新たな仲間となったわけだ。

13話《真剣勝負》

えー、今俺はハクロウに誘拐され町から少し離れた森林にいたのだが。

拓けた場所に連れてこられたわけだけど、何故か目の前には無数に転がる死屍累々。

誰も彼も、木刀を片手に力無く倒れ伏している。

なぁにこれ？

ピクピクと気絶しながらも筋肉疲労で痙攣している様は正に地獄絵図。

気絶しながらも倒れ伏したホブゴブリン、ゴブタも例に漏れず血管が浮き出るほど木刀をガッシリと握り込んでいた。

試しに取ってみたけれど、木刀は全く、全然動かない。

「ほっほっほっ……戦場で武器を手放す愚か者が居りましょうか？居ませんよな？」

あ、はい。

元凶は後ろに居たんですね、知ってましたけどね。

何がほっほっほっだよ。

確かに戦場で武器を手放すのは愚か者と漫画本で言ってた気がする、敵に武器を渡す行為でもあり、仲間を危険に晒すとも。

だが、それを目の当たりにする日が来るとは思いもしなかった俺からすれば驚愕の光景な訳で、ハクロウの特訓で此処までなる程のスパルタだとは思わなんだ。

俺はこれから起こるであろう出来事を想像して乾いた笑いと共に頬をひきつらせた。

だってこれはつまりそういうことなのだろう、嫌でも理解できてしまう。気絶したホブゴブリン達、まだまだ元気一杯ハクロウ。

……これから稽古をすると言うことだ、嫌だ。

「豚頭族（オーク）の一件以来、事後処理等々あり一時修行を休んでおりましたが。そろそろ良いのではないかと思いましてな、肩慣らしにゴブタ達を鍛えていたのですが、この有り様でして。ならヨクル様を、そう言

うわけで御座います」
「……え、嫌なんですけど」
「まぁまぁそう言わずに、爺の我が儘に付き合って貰えませぬか？それともワシの相手をする自信が無いと……？」
ニヤリと嫌な笑みを浮かべ、あからさまな挑発をしてくるハクロウ。いやいや、そんな挑発に俺がのって来ると思ってるんですかね？
俺も舐められたものだな。
そこまで餓鬼じゃないんですがね、こんな少年のような見た目だけど生前は社会人だったわけで……。
「上等だ！前の俺と思うなよ！」
「ほっほっほ、そう来なくてはな」
まるで俺がこう言うとわかっていたと言わんばかりに我先にと勝負の準備を始めたハクロウ。
微笑みながら二振りの木刀を手に取ると一方を俺に投げ渡し自身は距離を取り静かに構えた。
投げられた木刀を受け取りハクロウと対峙する。
すると解離者（カワリモノ）が話し掛けてきた。
『てかさ、今日はシュニィの強さを確認するんじゃ無かったのかよ』
……いや、あそこまで言われて引き下がるのはクロウやシュニィの主として示しがつかないかと思ってでしてね。
これは仕方のない事なんですね。はい。
『へいへい、そうかよ。まぁ……やるなら勝利以外ねぇからな！』
「……おう！」
対峙するハクロウの眼光。
飄々とした振舞いとは裏腹にその眼光は未だに衰えなど微塵も感じない。
ジリジリと徐々に距離を積めて行く。
ハクロウはその場から動かない、ただ其処に居るだけ……だが。
「……怖っ……」
ある一定の距離。
ハクロウの間合いに踏み込めば確実に切られるであろう、そう確信

させるハクロウの剣気。
はっきり言って怖い。
木刀で対峙しているはずなのに、踏み込めば腕が落ちるイメージが脳内に走る。
汗が額に滲み、膝が震える。
「……如何なされた？」
「問題ない、やれるさ」
深く息を吐き、覚悟を決める。
一歩大きく踏み込む、同時に音速で真横に切り放たれた木刀。胴体を真っ二つにせんと迫る木刀を受け止め。
「おらぁ!!」
ズシンと重い一撃、バキバキと木刀が折れそうだ。このまま受け止めていてはやられる。
そう考え勢いを殺さず木刀を滑らせることで威力を反らし避ける。続け様に切り返された刃は摺り足で後ろに下がり空振りさせた。
「ふー……」
「やりますな、一段階ギアを上げるとしましょうか」
そう言ったハクロウは深く呼吸を繰り返す。
一体何が来るのか俺は周囲を確認しながら、最大限の警戒で迎え撃つ、ハクロウから決して目を話さずどんな機微にも反応できるよう構えていた。
「……な、に……!?」
しかし、忽然とハクロウは眼前から消え失せた。
一体何が起きたのだろうか。認識、無意識の隙間を縫って動いたとしても可笑しい。
だって瞬きの間に移動したとかそう言うレベルじゃない。
言葉通り消えたのだから。
辺りに視線を向けてもハクロウの気配は掴めない。
何処だ、何処に……。
『後ろだ!!』
「ッ!!」

ドガッ!!
反射的に背後に構え防ぐ。
其処には俺の脳天を狙ってきた木刀と僅かに目を見開き驚いた様子のハクロウの姿。
「……なんと、我が隠形法を見破るとは……少々驚きましたぞ」
「は、はは……どんなもんだい」
あっぶねぇーーー!!!
口ではどんなに強がって見せたって内心心臓バックバク。
何だよあれ!
呼吸も存在感もあれ程ビシビシ感じていた気迫、気配すら感じなかったぞ!!
『魔力感知にも引っかからないな。あれはスキルじゃねえな、ハクロウの超絶技巧ってとこか』
お前何でわかったんだよ。
そうだ、解離者(オマエ)は何で後ろから来るってわかったんだ?
『単純に見てたけだが……』
さいですか。
それにしても隠形法、まさか此処まで自身に関わる要素を希釈してしまえるとは。
どうしたものだろうか……。
『バカだなお前。消えたと思わせる技術であって消えた訳じゃない、ならやりようは幾らでもあるだろ』
「……なるほどなぁ……!」
解離者(カワリモノ)の助言にヨクルは閃いたとばかりに嫌な笑みを浮かべた。
ガン!ガン!ガン!ガン!ガン!
そのあとも俺は何度も何度も消えたハクロウの怒涛の攻めを紙一重で防ぎきっていた。
「ほっほっほっやりますなヨクル様。ワシの隠形法を破るとは、年は取りたくないものですな思った通りに身体が動かないですからのぉ」
ハクロウは年には勝てんわ。
なんて言いながら俺の足元に視線を向けると笑っていた。

やべ、バレたかも。
実は最初の一撃以降、俺は常時絶氷者（ヴィネア）を発動していたのだった。
ハクロウの魔力感知に掛からないように注意深く、薄く、弱く、広く地面や木刀に魔素を流し込み。
触れた対象の身体能力を低下させると共に低下させた身体能力を徐々に奪い自身の強化を行っていた訳だ。
ハクロウの能力を下げ脳内の動きと実際の動きをズラし、身体能力を向上させることでハクロウの音速にまで達する剣戟に対処していた。
だが、こんなに早くバレるとは思わなかった。たった5回切りあっただけで見破るか普通、めちゃくちゃ気を張って誤魔化していたと言うのに。
流石はハクロウと言うべきか、俺が未熟と言うべきか。
そしてバレたと言うことはもうこの手は通用しないと言う事、同じ手を食うような相手ならここまで苦労していないからな。
『クハハッバレて～ら。どうするよ、こうなりゃ正面切って切り合うか？』
「《並列高速演算》」
俺はハクロウに食らい付く為にスキルを発動させ静かに構えた。
「楽しくなって来ましたな」
両者飛び出す。
右、左、斜め右、上段からの切り下ろし、上、切り上げ、鍔競り合い、突き、下段からの切り上げ……。
ガンガン!!ガガガッ!!
数百回の攻防の末。
「……がはっ……!?」
横薙ぎを受けようと構え……。
……られなかった。
俺が手に持っていた木刀はポロリと地に落ち、防ぐ筈であった木刀が腹にめり込む。メキメキと軋むような音が体内に響き腹部から走る激痛に額からは脂汗が吹き。胃液が喉を逆流し吐きそうになる。

俺は堪らず膝を突くと口元を押さえ咳き込む。
「ヨクル様！申し訳御座らんつい熱が入ってしもうた……」
「いや、いいんだ……真剣勝負なんだから……ただ悪いけど肩を借りてもいいかな……？」
ハクロウに心配かけないよう無理に笑って見せたが、逆効果だったみたい。
ヘラッと情けなく笑う俺にハクロウは目を伏せると肩を貸してくれてゆっくりと身体を起こしてくれると近くの木陰にそっと座らせてくれた。
「なはは、やっぱり爺さんは強いな。勝てるイメージが全然湧かないよ」
《脈動回復》を発動させながら俺は笑った。
「ヨクル様も流石の腕前で御座いますな。ワシが本気で打ち込んでしまう程」
「……いやー、俺はちょっとズルしてるようなもんだったし。まだまだだな」
そう言って笑って見せれば。
ハクロウ爺さんも釣られて笑った。
「はぁ……まだまだ弱いな……」
俺は弱い。
どんなにスキルが強くたって、俺が弱ければスキルの能力に振り回される。そんなの宝の持ち腐れだろう。
例えば最強の武器と最硬の盾を持っていたとしても使用者が技術もなく十全に使いこなし戦うことが出来るのか？
そんな訳無い。
スキルも武器も使いこなせれば持っている意味がない。実際俺は《理想の君》《並列高速演算》《絶氷者》多数のスキルを使用し戦っていたがそのどれもが十全に能力を発揮できたとは言えなかった代物だった。
《解離者》のアドバイスは最大限生かせず。
《並列高速演算》は脳内の情報に身体が着いていけずボロボロ。

《絶氷者》は簡単に見破られ、歯が立たず。
最初にハクロウに対してでかい口を叩いた俺自身が恥ずかしい体たらく。
まだまだ若輩者だと痛感した。どんなに強力なスキルがあっても、達人の前での俺は無理して身の丈に合わない武器をただ振り回しているだけに見えているに違いない。
今後の課題が見える稽古だった。先ずはスキルに振り回されない身体作り、スキルを自在に操れるようになる熟練度の向上。
そして前世にやっていた剣道を生かして、独自のスタイルを確立する事。
やることは沢山あるな。
自身の弱さを目の当たりにし、課題も沢山出来た。
反省点ばかりが目立つが、終えてみれば充足感満足感が身体を満たす。
やっぱり、全力で打ち込むのは気持ちのいい物だな。
「ハクロウ爺さん、次はいつやる？」
俺自身の課題を解消するため、俺はハクロウに稽古の予定を聞いた。
だけなのだが、そう聞いた俺を目を見開き驚いた様子で見るハクロウ。え、俺何か変なことを言ったか？
『……ドMと思われてんじゃねぇか？キシシッ！』
んな馬鹿な。
「爺さん？どうかしたか？」
「……いえ、喜んでお相手致しましょう」
「よろしくなっ！それじゃあ俺は帰るな、そろそろ痛みも引いてきたし。爺さんはゴブタ達の相手もするんだろ？」
「それでは後日」
俺はハクロウに手を振り帰ることにした。
歩く衝撃で度々腹部から走る痛みに呻きながら俺は森を後にした。
そして翌日、《並列高速演算》を使用し酷使した脳と全身の筋肉が悲鳴を上げ動けなくなるとはこの時の俺は予想もしていなかった。

◆◆◆

ヨクル様が稽古場を後にしたのを見届けると、不意にワシの手から木刀が溢れ落ちた。
コトンと落ちた木刀を見詰め、目を細める。
「……ほっほっ……何とも末恐ろしい方だ」
リムル様のような王道の強さとは違う。
全く別の強さ、地を這い絡めとり締め殺すような強さを感じさせるお方。
静かに虎視眈々と此方を狙う恐ろしさ。
自身の掌を確認し静かに笑う。
「……もしヨクル様の身体が出来ていたとしたら……勝負は分かりませんでしたな……」
ヨクル様の剣戟を何度と無く受け止めた掌はビリビリと痺れ、痙攣し力の入らなくなった右手を袖口に隠し身を翻す。
「まったく……年甲斐もなく血が沸き立ちますのぉ。ほっほっほっ」

１４話《シュニィの実力》

「本日はここに来ました！」

そんな掛け声と共にやってきたのはジュラの大森林奥地、人も魔物も滅多に寄り付かない洞窟。

ここはかつて暴風竜ヴェルドラが封印されて居た地であり、今も尚高濃度の魔素が滞留する危険区域。

加えて高濃度魔素を乗り込もうと魔物が跋扈する魔窟となってしまったらしく。

不幸なことにこの魔窟には資源がわんさかあるみたいで、始めリムルさんが召喚されたのも魔窟だったらしい、その後ヴェルドラの魔素で育っていたヒポクテ草、高純度の魔鉱石がたんまりあったと言う。

ヒポクテ草はフルポーションの原料として重宝され、リムルさんが解析、複製出来るとはいえ手放すには惜しい。

魔鉱石は武具の作成等で使用し高純度であるほど使用者の魔素に良く馴染むとか何とか、こちらも手放すには惜しい。

どちらも後々リムルさんの町の開発に役立つ筈。

ならば魔窟の中を掃除し無ければな、となったわけで。

そこで俺とシュニィに白羽の矢がたった。

俺の絶氷者（ヴィーネア）は広域殲滅に適しているからな。

魔素を流して凍らせてしまえばそれで終わりだ。

後このお掃除にはシュニィの実力を測るという意味も含まれている。

俺の前でキャキャと楽しそうにはしゃぐシュニィ。

先日仲間として迎えられたのだが、実は冷たい顕現（イータカ）と言う宇宙的恐怖的な種族である。

何が出来て何が出来ないのか理解しなくては主として制御出来ないからさ、まぁリムルさんにも言われていたし。

「シュニィ君。これから洞窟探検だ！」

「おぉーー!!たんけん!!」

シュニィの手を引きながら俺達は魔窟の中へ。

暫く魔窟の中を歩いて行く、魔窟内は薄暗く光藻の様なものがボンヤリと照らす。
ひんやりとした空気と奥から漂う魔素と魔物の血の匂い。
「ヨクルさま！ぼくからはなれたらダメだからねっ！」
「ははっありがとう。頼りにしてるよ」
ふんすっ。
気合い十分と言った様子で俺の手を引いて先導するシュニィ。可愛い。
そうして暫く歩いた頃奥から呻き声の様な物が響いてくる。
その声にシュニィの足がピタリと止まった。
ん？もしや怖いのだろうか？
なんて親心的なムーブで手を優しく握り直す。
「シュニィ大丈夫か？怖いなら俺が前を歩こうか？」
そう問い掛ければシュニィは勢い良く顔を上げ俺を見詰めると。
首を横に振った。
「だいじょうぶ。ヨクルさまはぼくがまもるよ！」
「……そっか、なら任せようかな。でも無理しないでくれよ」
「うん！」
そして再び魔窟の奥へと歩き出す。
また暫く道なりに歩いて行く、魔窟は奥に行くに連れてどんどんと複雑になって行き。視線を感じるようになってきた。
じろじろと値踏みするかのような粘着質でねっとりとした視線に背筋に走る不快感と嫌悪感。
ましてやその視線が我が子同然のシュニィにまで注がれているかと思うと怒りが沸き起こる。
「……絶氷者（ヴィネア）……」
「ん？ヨクルさまなにかいった？」
「いいや、何でもないよ。さぁ先を急ごうか、モタモタしてたらリムルさんに叱れちゃうからね」
「わわっそれはたいへんだ！いそがないと！」
俺達は小走りで道を進んで行く。

『キシシッ……とんだ親バカだな……！』
俺達が去った後には生命は存在しなくなっていた、何故なら俺が片っ端から凍らせていたからな。
シュニィをゲスな目で見る方が悪いと言っておこう。だから俺は悪くない、それに元々処理する筈だったんだから問題ないだろ。
解離者（カワリモノ）から呆れたような反応をされるが、知らん顔でシュニィとの探検を続ける。
結構な距離を歩いただろうか。
ちょうど大きな地底湖にたどり着いた辺りで何かが地底湖から飛び出し水飛沫を上げ俺達の前に降ってきた。
巨大な甲羅には何個もの魔鉱石を癒着させ、甲羅から伸びる手足はずっしりと重量を感じさせる程太い。
それは俺達を視認すると目を細め、次の瞬間手足を閉まったかと思えば高速回転。
俺達に突っ込んで来た!?
「うおっ!?」
俺は咄嗟にシュニィを抱き上げると全力回避、横に思いっきり飛ぶ。
ずさっ!!
先程まで俺達が居た場所は甲羅の回転で地面が抉れ、土埃が立っていた。
そう、それは亀。
全長６ｍはあろうかというほど巨大な亀、絶対に硬ったいなと感じさせる重厚で年期の入った甲羅。
のっそりと遅い動きとは反対にあり得ないほど高速の回転を実現させる筋力。
実際、あの魔鉱石が張り付いた甲羅の回転は掘削機とほぼ変わらない。
つまり、当たったらミンチ確定な訳で……。
しかもあの掘削機、俺の氷も粉々にしてしまいそうで……どうしましょうかね。

「ヨクルさま！ぼくにまかせてやっけるよ!!」
抱き抱えていた筈のシュニィがモソモソと俺の腕から這い出るとビック亀の前に立ちはだかる。
「シュニィ!?無理しなくていいんだぞ!!」
「だいじょうぶ！まかせて!!」
ニカッと力瘤を見せながら笑うシュニィ。
いや確かにムキムキで凄いですけど、あの甲羅スピンアタックにシュニィが耐えられると思えないぞ！
しかもビック亀は既に回転を始めているではないか。
ギャリリリリ!!!!
地面を削りながら尚も回転数、速度を上げて行き。
シュニィ目掛けて突撃してきた！
両手を広げ受け止める気満々のシュニィに俺は思わず目を塞いだ。

しかし、何時まで立っても衝撃が来ない。
俺は恐る恐る目を開けると、そこには思いがけない光景が広がっていた。
ガガガガガガガッ……！
なんと自身の身長その何倍もある亀をシュニィは真っ正面から受け止め、甲羅を鷲掴みにしているではないか。
信じられない光景に俺は呆気に取られた。だってそうだろう、まさか掘削機を受け止められるとは思わんだろ。普通に。
『あれは《豪腕》と《屈強》のスキルだな』
続けて解離者（カワリモノ）が《豪腕》《屈強》の解析を行ってくれていたらしく情報が脳内に流れてくる。

《豪腕》
強化：自身の筋力、握力、腕力を１０００倍に高める。

《屈強》
硬化：身体強度を高める。

自傷回復：攻撃を受けている間、持続回復が発動する。
内容はシンプルイズベスト。殴って耐えて勝つという気概を感じますね。
正しく脳筋。ＴＨＥ脳筋だった。
しかし、それでも亀は止まらなかった。
シュニィの受け止めた腕からは耐えず血が吹き出し。
傷口が回復して塞がっては再び血が吹き出し。
傷付き回復して傷付き回復しての繰り返し。
このままではジリ貧になってしまう、幾ら回復があるからといっても痛みを感じない訳じゃない。
「シュニィ!!」
俺は加勢しようと掌を地面に当て、魔素を流し込み亀を氷付けにしてやる。
そう思っていたのだが。
シュニィから思いもよらない台詞が飛び出した。
「ぼくがたおすよ」
傷付き血塗れになりながらもシュニィは俺に対して笑い、そう言い放った。
俺は微かに目を見開き。
無理するな！
そう伝え、後は任せろと肩を引いて助けに入りたかった。
助けに入ることはとても簡単だ。俺のスキル《絶氷者（ヴィネア）》を使い、亀の身体能力、生命活動を凍結してしまえばそれで終わる。勿論生命活動の凍結なんて事触れなければ出来ないが触れるだけなら怪我を覚悟し触れば良いのだからすぐにでも出来る。
肉を切らせて骨を断つという奴だな。
だが……ただ真っ直ぐに俺の方を見るシュニィに対して俺は助けに入る事が出来なかった。制止の声すらグッと飲み込まざる終えなかった。
信じて任せて欲しい。俺と同じ蒼い瞳がそう強く訴えかけていた

からだ。
目の前でシュニィが血塗れになっている様子を黙って見ているのは辛いが。今頑張っているシュニィが信じて欲しいと願うのならば、俺は信じようじゃないか。
シュニィの主として!!
「おう!やっちゃえ、シュニィ!!」
「うん!!」
返事をした瞬間、シュニィの魔素が爆発的に膨れ上がった。
ボウッ!!!!
「《冷たい顕(イタカ)!!!!現》」
シュニィがそう告げると突如魔窟内の雰囲気が一変する。先程まで洞窟特有のヒヤリとした空気が漂っていたと言うのに今は重く全身に酷い倦怠感が襲う。
それは収まること無く、寧ろ徐々に強くなり。シュニィを中心に円のように渦巻く冷気。
冷気は次第に空気中の水分を凍り付かせ、シュニィの身体に氷が纏わり付くと武装して行く。
触れた者を凍てつかせ打ち砕く、手甲。
踏み締めた大地を凍らせる、足鎧。
鋭い冷気を放ち相手を震え上がらせる、額当て。
氷の獣のような姿となったシュニィ。
四つん這いになり飛び出した!!
シュニィは音を置き去りに加速し、目にも止まらぬ速さで亀に接敵すると全力で殴る!!
『グゲェェ……!?』
呻き声と共に後退した亀。
頭を振り再びスピンアタックを見舞おうとした亀だったが。
『……グ……ゲ……!?!?!?』
なんとシュニィに殴られた箇所から氷柱が貫通する。
時間差で身体から生えた氷柱に亀は困惑する。
しかし亀に理解する時間など与える筈もなく、シュニィはタックル

を頭に当て。
仰け反る亀の口を鷲掴み、ぶん投げる。
仰向けになり無防備な亀の腹を殴る、殴る殴る殴る!!
何本もの氷柱が亀を貫き、血が氷柱を流れ落ちて行く。そしてシュニィが何十回と殴り続けると。
『……グェ……』
亀の命が尽きた。
何十本もの氷柱に貫かれた亀の姿は最早亀としての原型を留めておらず、氷の針山となった。
「ヨクルさま!おわったよ!!」
「お、おお。良くやったなシュニィ、偉いぞ!!」
血塗れのまま満面の笑みを浮かべ駆け寄ってくるシュニィの姿。
ひぇ……亀を惨殺した後無邪気に笑うシュニィは何か狂気的なものを感じさせる。
『冷たい顕現(イタカ)……か。やべぇな……!』
解離者(カワリモノ)の呟き。

《冷たい顕現(イタカ)》
顕現：イタカを身に宿す。一定時間、身体能力大幅向上。
狂氷武装装着：全身に氷の武装を施す。触れた対象へ氷柱を撃ち込み、対象の魔素を喰らい氷柱が大きくなり貫く。
狂気：自身の周囲にいる生物へ狂気を振り撒く、一定時間狂気を取り込むと☒・・★◆☒∞◆・☒×◆★。

ひぇ……。
何で文字化けしてんのさ!!
どうなるの!?一体どうなるのー!?!?
まぁそれは置いといて。
えっ？軽くないかって？
だって狂気に振りきれたらどうなるか……。
クトゥルフ神話を少し齧っていたら大体想像出来るだろう。そう、

そう言うことだ。
そんなことよりも今はシュニィの手当てが先だ。
自傷回復は攻撃を受けている間の回復だからな、敵の居ない今回復することが出来るのは俺だけだからさ。
「《脈動回復》」
シュニィの身体を包むように白い花が咲き誇り、花弁の触れた箇所から徐々に回復して行く。
しかし、傷は直せても失った血液は復元出来る訳じゃないので立てるようになったら帰ろうか。
「ねぇヨクルさま！ぼくがんばった！」
「おう、偉いぞ。格好良かったな！」
「えへへ、それでね。これひろった！」
と言いシュニィが懐から取り出したのは白い石。
微かに発光する不思議な石を受けると解離者（カワリモノ）に解析を頼む。
「どうだ？」
『おう、魔鉱石だな』
「へぇー白い魔鉱石なんてあるんだな……」
リムルさんから見せてもらったのは七色に輝く鉱石だった筈。
キラキラと輝く白い魔鉱石を掲げ、眺める。
「ヨクルさまにあげる！」
「え、いいのか？シュニィが見つけたんだろ？」
「ううん、いいの！ヨクルさまのためにひろったんだから、うけとって！」
「そっか……なら有り難く貰おうかな。ありがとなシュニィ」
「うん!!」
暫く脈動回復を掛けていたシュニィ。
見た目よりも心身にダメージを受けていた為回復に時間が掛かってしまったが漸く歩ける迄回復したので今日は帰ることにした。
リムルさんには魔窟の奥にデカイ亀が居た事と大抵の魔物は凍らせて処理した事。
そして、シュニィの実力を報告した。

肉弾戦特化型で神風特攻隊戦法で戦い。奥の手《冷たい顕現(イタカ)》。
超絶強化、拳と追撃の氷柱。
そして文字化けスキル。
狂気を報告した際のリムルさんの何とも言えない表情、俺も釣られて二人して不思議な顔を浮かべた。

◆◆◆

「こんちは！クロベエ居る？」
「おん？なんだベヨクル様、おらに用か？」
俺が訪ねたのは町から少し離れた場所にある、クロベエの工房。
奥から布で額の汗を拭いながら現れたクロベエに俺はあるものを手渡した。
「……魔鉱石だべか？不思議な色さしてんなぁ」
「そうなんだよ。でさ相談なんだが……」
俺はクロベエにある物の作成を頼んだ。
クロベエは俺の依頼内容に不思議そうに眉を潜める。そりゃそうか、わざわざ潰す意味が無いもんな。
だが、俺の手にはその方が馴染むんだよ。
「刃の潰れた刀を造ってくれ」
白い魔鉱石がキラリと輝いた。

15話《白刀・凍雪》

「ふぅ……。うしっ完成だべ」
鍛造、鋳造、刀の製作で高熱高温の地獄と化した室内でクロベエはやりきったと達成感に満ちた表情で笑った。
額から流れる汗をタオルで拭い去り、そっと刀身を撫でる。
「うん、言い出来だな。自慢の逸品だべ」
ふんすっ。
完成したばかりの刀を持ち外へ、手にした刀を空に掲げ見上げる。
太陽の光を受けキラキラと反射し透き通る美しい刃。
鍔には依頼人をイメージし氷の結晶をモチーフに作成し、柄には純白の装飾を行った。
「それにしても……不思議な刀だべ。刃の潰れた刀、透き通り透明な刀身……まぁあの方にはピッタリだべか」
冷徹で氷を体現している様、触れた物を概念さえも凍えさせる彼。だけども内に秘めるは純白で博愛な彼に。
二面性のある彼に命は奪わないが目を奪う刀。
「早速届けに行ってやるべか、喜んでくれるといんだがな」
クロベエはいそいそと刀をこれまた白い鞘に納め、布に包むと工房を後にした。

◆◆◆

「くぁー!!今日も負けた……!!」
俺は大地に寝っ転がると天に向かって叫んだ。
ここはお馴染みハクロウの稽古場。
本日もヨクル始め、ゴブリンライダーのゴブタ達はハクロウに稽古を貰っていたのだ。
そしてもう何十回目の敗北にうちひしがれていた俺である。
「ほっほっ。ワシも危うかったですぞ?」
なんて言いながらも木刀を器用にクルクル回し、飄々と余裕綽々な

ハクロウ。
こんのクソ爺。
何が危うかったですぞ、だよ。隠形法に更に磨きが掛かってやがる。
前回は《並列高速演算》と《絶氷者（ヴィネア）》で対処し反撃まで出来ていたと言うのに今回は掠りすらしないってどうなってんだ。
防ぐので精一杯、次第に体力の限界を向かえ負けてしまう、その繰り返しだ。
どうするべきなのか。
俺がハクロウ攻略に熟考していると遠くから俺を呼ぶ声が聞こえてきた。
「……ん、今誰か……」
声のした方向に視線を向けると遠くから手を振りながら駆け寄ってくるシュニィとシュニィに手を引かれるクロベエの姿があった。
「お、シュニィにクロベエどうかしたのか？」
「えっとねおにもつがあるんだってさ！」
そう言われクロベエが抱えていた包みに目を向ける。
「もしかして出来たのか？」
「んだよ、完成したもんで早く渡したかったんだ」
ぽわぽわ。
へらっとやんわり笑いながら包みを手渡すクロベエ、早く見て見てとソワソワしている。
何というか可愛いおじさんだな。
あれだ、クリスマスプレゼントを贈ったお父さんみたいだ。喜んでくれるかな？気に入ってくれるかな？みたいな感じだ。
それじゃあクロベエ作の刀を見てみようかな。
俺の背後では好奇心に満ちた輩がぞわぞわ。
「お、おぉ！凄いなこれ！？」
包みを開けると出てきたのは真っ白な刀。
鞘も純白、柄も純白。
それなら刀身は？

どんな感じなのだろうか、ドキドキと緊張しながらスッと鞘から抜き出す。
すると、現れたのは白透明な刀身。
目の前に掲げれば此方を期待した目で見詰めるクロベエの姿が透けて見える。
そうだな、なら期待に応えようじゃないか。
「クロベエ！ありがとう、想像以上だよ！」
クロベイは照れて赤面する顔を隠し、頭を掻く。
「わぁ！きれいだね!!」
「ふむ、また腕を上げたようじゃのクロベエや」
「本当っす!!こんな綺麗な刀初めて見たっすよ!!」
皆からの賛辞に益々赤面して行くクロベエ。
嬉しいのには変わり無いが手放しで称賛の嵐を受けるのはやはり恥ずかしいらしく。
「んで、おらは帰るべ!!喜んでくれてよかったべ!!!」
早口で捲し立てるとクロベエは稽古場から走り去った。
「おー！ありがとうな!!」
走り去って小さくなって行くクロベエに手を振り感謝を述べると俺の刀を腰に差す。
「うん、良い感じだ。腰に来る重さが良いね」
しかし。
ザリザリ……。
ザリザリ……。
「低身長が!?」
俺の身長では腰に差すと鞘が地面に擦ってしまうんだよ！
折角の純白なのに！これじゃあ汚れるよ!!
『あー、なら《氷技工》で何か作ればいんじゃね？』
なる！
確かにね。
俺が持っている必要は無いわけだ、何か動物か何か作って持ってて貰えば良いわけか。

「ふむふむ、それじゃあ《氷結》《氷技工》」
空気中の水分を魔素で凍らせ掌に集めて行く、次第に周囲の熱を奪い冷気が大地を這う。
そして目の前に背丈程の氷を造り出すと氷に掌をスッと滑らせると形を操作して行く。
そうして造り出したのは大きなわんこ。
イメージ的にはシベリアンハスキー。
凛々しい顔立ち、逞しい四肢、氷だからカッチカチな毛並み。
氷だから吠えたりしないけど、やっぱ良いよなぁ。
「俺犬派だったんだよな。だけどさぁマンション、ペット禁止でさ買えなかったんだよ……それが氷だけど目の前に居るなんて堪らんなー！もー、よしよーし！良い子は誰だー!?」
もう、目の前の氷犬が俺に甘えてワフワフ吠えてるのが脳内変換余裕な件について。
だって仕方ないじゃない、可愛いものは可愛いのだから!!
「……何を言っておるのだ、お主は」
「いや、なんも。強いて言うなら俺の心の丈だな」
「そ、そうか。いや詳しくは聞くまい」
いや、聞かせてくれるな。
そう思っているのが丸わかりなハクロウ、だって稽古中でも無いのに隠形法つかって存在感消してるしな！
だが、そんなことはどうでも良いのだ。理解されなかろうがしったことじゃないってな。
そして、そして。
そのシベリアンハスキーの背中にサポート紛いの物を取り付け、そこに刀を差し込む。
テッテレー。
すっげぇてぇてぇなワンコが完成だ!!
「可愛いね、可愛いね！」
シュニィもシベリアンハスキーが気に入ったのか一人と一匹は目の前でキャッキャッしながら駆け回る。

なんてエモいのだろうか。
うんうん、可愛いは正義だね。
「お主刀の名は何とするのですか？」
えっ、名？
問い掛けられたのは思いがけない事だった、皆刀とか武器に名前つけてるの？
そう、視線で訴えれば返ってきたのは肯定の頷き。
さいですか。
「え、因みにハクロウはなんてつけてるの？」
「ワシは爺ゆえ、若者の真似事は合わんでの……ワシのは刀、強いて言うならば無銘と申しておきましょうか」
無銘。
え、マブくない？
敢えて飾らないスタンスは逆にお洒落でマブくないか？
なら俺も……。
「……えーと……何も思い付かん……」
『雪入れときゃ、良いんじゃねぇか？』
おお、そうだな。そうしよう。
雪ねぇ……そうだ！
「凍雪とか、どうかな？」
『凍雪か。いいんじゃねぇか？主さんの刀だ、主さんが気に入った名を付ければ良いさ』
凍雪。
降り積もった雪が地上で凍りとなり固まっている様子を表す言葉。
直感と思い付きで名付けてしまったけれど、案外ピッタリかも知れない。雪のように儚く透明感を感じさせる刀身、だが美しい刀身は触れた物を傷付ける、氷のように。
まぁ実際に切るのは俺の剣道スタイルとは合わないかなとも思ったから刃は潰して貰ったんだけどさ。
要するに模擬刀だよ。
しかも魔鉱石を基にした凍雪は魔素の通りが思いの外良い手に馴

染む、まるで手足の延長の様な感覚だ。
それに刀を持つ事は殺す、倒す以外にもある。
『刀に警戒しないと……か？』
解離者（カワリモノ）がニタリと不気味な程良い笑顔で俺の心を読んでくる。
俺にプライバシーは無いのだろうか。
項垂れるも言っていることはその通り。
「まぁそう言うことかな……」
目に見えてそこにある脅威に誰だって意識を裂かれるものだからな。
そして、俺の戦闘スタイルは待ち剣。
相手がじりじりと神経を磨り減らして隙を見付けるのが俺のスタイルだ。
勝てなくてもいい、だが相手に気持ち良くなんか勝たせてやるものか。転生前の俺はかなりひねくれてたからな。
木刀とは違った鉄の重みを感じながら、軽く素振りを行うとハクロウに向き直る。
やることは分かってるんだろう？
「……いやはや、老体をあまり苛めるものでは無いですぞ」
なんて、言いながらも剣気が木刀から漏れだしている。
「……殺る気満々じゃんか」
俺は再び構える、今度は木刀ではなく。
凍雪を構えた。
キンッ……。
おぉ、刀構えてるよ!?やっべ上がるな、これ!!
『おいおい、興奮してる場合じゃねぇだろ？無策で勝てる相手じゃねぇぞ？』
ちっちっち。
そんな事あると思いかい？解離者（カワリモノ）くん。俺の理想の癖に分からないのかな？
『……』
いや、悪かったから！

やめて、やめてくれ！
魔素を腹のなかでグルグルしないで、うぇ……気持ち……うぅえ。
ヤバい、今の感覚はあれだな。
遊園地バイキングに乗っているような気持ち悪さ、上下に揺さぶられた体内の魔素に酔ってくる。
『で、どうすんだよ』
うぅえ……それは……おぇ。
「《雪遊び》《雪隠れ》《絶氷者（ヴィーネア）》」
俺のスキル発動と共に。
辺りに雪が降り始めた、深々と降り積もり始める雪。
御披露目スキル。
《雪遊び》
その効果は雪を降らせる！
だけだ!!
しかーし、そこに合わさるは《雪隠れ》。
雪が降り始めた途端にハクロウの視線が俺から外れたのが、その証拠だ。
《雪隠れ》
その効果は雪に消える、隠れる。
霜（ジャック・フロスト）男。
種族固有のスキル、それは雪に巻かれ子供を連れ去る逸話に基づくスキル。
雪を降らし、雪に隠れ、子供を拐って消えて行く。
俺の姿が消えた事でハクロウは距離を取り己も隠形法を使い、消える。
雪に触れないよう、様子を伺っているのだろうが。
俺からは決して動かない。
お互いにお互いを捕捉出来ない状態、停滞して行く戦闘。
しかし、この停滞は長くは続かないだろう。
俺の隠形はスキルによるもので魔素を燃料に持続しているがハクロウのは技術だからな。

ハクロウがこのまま様子を伺い持久戦に持ち込まれれば俺のじり貧は必須。
だが、俺は焦らない。
目をつむり、ただその一瞬に気を張り巡らせる。
絶対にハクロウは来る、あのハクロウが隠れるだけな訳がない。
絶対的な剣術と体術。
俺のスキルを封殺し殺るつもりだろう。
待つ。
ただその一瞬の為に。
ふーーーっ……。
深い呼吸を繰り返す。
集中……集中……。

「……ッ……!!」
前方から来る気配。
俺は刀を振り上げ、切り下ろす!!
「!?……やりますな」
背後から来たハクロウに向かって。
そう、前方から来た気配は木の枝。それは氷で防ぐ。
つまり囮作戦だったと言うわけだ。
しかし、そうは問屋が下ろさないわけよ。
俺が《絶氷者(ヴィネア)》で今回行ったのは空気中の水分を氷結、雪が降っている範囲よりももっと広く展開し回転させることにより触れた対象を常時捕捉していたからだ。
さながらソナーのようにな。
だから前から投げられた枝にも気付けたし、背後から来たハクロウにも対応出来たのだ。
目に見える脅威に隠れひっそりと行っていた索敵。
リムルさんに太鼓判を押された俺の魔素操作、しかも今回は解離者(カワリモノ)と一緒に行ったので精密操作は前回の非ではない、たとえハクロウでも見破るのは至難の技だろうと山を張った。

もしバレたら勝ちは無かっただろうな。
実際この雪では索敵なんて事は出来ない、けどこの雪には別の効果が備わっている、まぁ今回は使い道無かったけどさ。
だからハクロウが距離を取らずに《絶氷者(ヴィーネア)》の索敵、捕捉前に懐に入り込まれていたら負けていたからな。
二つの意味で賭けだったわけだ。
しかしその賭けに俺は勝った。
「よっしゃー!!」
「なるほど、氷の粒に含ませた魔素でワシの位置を割り出した訳ですか……面白いですのぉ。楽しくなって参りましたな」
服に付いた極小の氷を払うとハクロウは再び構えた。
「……へっ!?」
「まさか一試合で終わりでは無いでしょうな?再びワシを捉えて見せて下さい」
そう言いながら再び隠形法で消えたハクロウ。
俺は慌てて氷を操作し索敵を始めたが。
「おえ!?何で何人もいるんだよ!!」
俺の氷ソナーには何人もの人形の反応。
前から来たと思いきや、その反応は視界に入る直前に消え失せ。真横からの一撃。
「くっ!?」
そのあとはご想像のお任せします。
敢えて言うこともないでしょう……負けたよ!!
そして試合後にハクロウが良い放った衝撃の発言に俺は愕然とするのだった。
「気当たりと言うものはご存じではないかの?」
気を放ち分身を作る技術なんだよ。
いやいや、さらっ説明してくれるなっ!?
俺からすればそんな事出来んのかよ!?!?って感じだよ。
改めてハクロウ恐るべしと実感する。
一矢報いる事が出来たけれど、実際にはハクロウとの差を再び思い

知らされた結果となった。
はぁ、今日も負けたな。
「しかし、アイデアは良かったですな。まだまだ精度に難がありますが、《魔力感知》等のスキルと合わせて使用すればより精度が増しますぞ」
フッと笑いながらアドバイスをくれたハクロウ。
まだまだ伸び代がありますぞ、そう発破をかけられたら。
やる気が出てくるってもんさ。
さぁ解離者(カワリモノ)！次の稽古に備えて計画を練ろうじゃないか！
と思っていたのだが。

『おん？主さん。何か空から来てるぜ？』
解離者(カワリモノ)が空から此方に向かってくる魔素を確認したらしく。
「は？空から？」
解離者(カワリモノ)に言われ、空を見てみれば。
確かに何か飛んできている。
馬？と人か？
「何かあったのか？」
天馬(ペガサス)に跨がり現れた謎の一団。
リムルさんからの念話は今のところ来ていないし、一応確認しといた方が良いだろうと判断し。
俺はハクロウ、シュニィと共に天馬(ペガサス)が降りた場所へと向かった。

１６話《ガゼル・ドワルゴ》

「この辺かな……おっ、いたいた』

ハクロウの稽古場から森林を抜け、魔素を頼りに進んで行くと其処には羽を羽ばたかせる天馬（ペガサス）とフルプレートアーマーで武装した人達。

『いや、ありゃドワーフだぜ？』

ドワーフ？

確かカイジン達と同じ種族だったけ、て言う事はカイジン達と同郷？

そう言えば、前にリムルさんから聞いたな何だっけか。

えー……あ、思い出した。武装国家ドワルゴンだったはず。リムルさんがエールぶっかけられたって所だったよな。

「何しに来たんだろうな……」

完全武装している様子からして遊びに来た訳じゃないよな。しかも魔素の感じは滅茶苦茶警戒しているみたいだし。

どうしたものか。

勝手に出て行って事態をややこしくするのもな。

リムルさんに報告した方が良いだろうか。

何て考えている内にカイジンや鬼人達を引き連れリムルさんがやって来た。

「久しいなカイジン、スライムよ」

「お久しぶりでございます、王よ。本日は何用で参られたのでしょうか？」

「いや何、其処スライムの本性を暴いてやろうと思ってな」

あれが王様か。

ドワルゴン王国、国王ガゼル・ドワルゴ。

精悍な顔立ちと立派な髭、渋いおじ様。見た目、ＴＨＥ・王様って感じ。

やはり王様だからだろうか魔素の質も量も他のドワーフ達に比べ段違い。しかも賢王とも呼ばれ、王でありながら剣の腕も超一流。

しかし、ガゼル王のリムルさんに対する発言は鬼人達の反感を買っ

たみたいだな、魔素が漏れ出ていますよー。
隣にいるハクロウからも剣気が漏れ出てるし、目付き悪すぎて怖いんだけど。
でもリムルさんを崇めている鬼人達には悪いけど俺からしたらガゼル王の言い分の方が正しい様な気がするけどな。
だって王様が来たのは豚頭魔王（オークディザスター）の件をリムルさんが解決したからだろ？
ジュラの大森林を壊滅させる一大事だった訳だし、しかも豚頭帝（オークロード）から魔王への進化。
不足の事態に陥りながらも見事解決して見せたスライム。
それは隣国からしたら確かめ無いわけには行かないだろう、もしかしたら豚頭魔王（オークディザスター）よりも厄介な敵になる可能性もあるわけだからさ。
「リムル様に対しあの発言。赦しがたいですな……」
「でもあっちも王様って立場があるわけだし、下手に出るわけにもいかないだろうしな」
カイジンもめっちゃ腰低い感じだし、鬼人達の殺気にリムルさんも困り顔だぞ。
対してガゼル王は澄まし顔で気にもしていない様子、その態度が更に鬼人達の気をさか撫で怒気が高まる。
嫌なピリピリした空気の中、二三言葉を交わしたリムルさんとガゼル王だったが、何故か剣術勝負をすることになってしまっていた。
「剣を取れ。剣を通してお前と言う人格を図らせて貰おう」
おお、王様もそっち系の方だったみたいだ。
拳を交え、理解する系の方だった。
リムルさんからしたら勘弁願いたい所なのだろうが、ガゼル王は殺る気満々で引く気は無いのだろう。
それに加えて鬼人達の期待の視線を受けて引き下がる訳にも行かず。リムルさんは渋々腰から刀を抜き取り構えた。
ガゼル王とリムルさんは刀を交え鋭い剣劇、数回の攻防の末。
何故かガゼル王の太刀筋その癖がとても見覚えがあった、何処だろうかと考えハクロウじゃん。

何故？
「中々成長しましたの」
「ガゼル王ってハクロウと会ったことあるの？」
そう聞けば何でも３００年ほど前にガゼル王へ剣の指南を行っていたらしい、通りで見たことがあるものだ。
なんてハクロウの昔話を聞いている内に勝負は佳境に差し掛かる、ガゼル王の威圧をリムルさんが気合いで押し返した所でガゼル王が奥義を出してきた。
だが俺と同じようにハクロウから剣の指南をされているリムルさん。見事ガゼル王の奥義を防ぎリムルさんの勝ちで勝負を終えた。
「……ところで何時まで覗き見しているつもりなんだ、ヨクル」
「……やべっバレれら」
ガゼル王の圧が弱まって、俺の魔素を感知されたのだろうか上手く隠れていたつもりだったのに流石リムルさん、いや大賢者さんだろうか。
まぁドワーフ達から隠れる必要も無くなった訳なので、ここは素直に観念して茂みから姿を現そう。
ガサゴソと茂みを掻き分け出て行くと。
先程まで何も感じなかった場所から俺が現れた事にドワーフの戦士達は驚き武具に手を掛け始めたんです。
もう、俺ビックリ。
え、え、第２ラウンド始まるの？
と、あたふたしている内にリムルさんが前に出て俺を背後に隠し。
「待ってくれこいつは俺の……親友？……だからさ！」
庇ってくれた訳だが。一言言うなら、おい、そのクエッションはなんだよと言いたい。不振がられるだろうが。
なんて一悶着があり、俺の後に続いて出てきたシベリアンハスキーが刀を背負っていた事もあってガゼル王の眼光が鋭く光ったが声をかけられる前にそそくさ逃げてきた。
失礼？粗相？
は？逃げるが勝ちと言うことわざをしらんのかね？

『ひよってんな。情けねぇ主さん』
うっせ、不必要な争いはしないんだ！
「えー、霜男（ジャックフロスト）のヨクル＝ライフです。よ、よろしく……？」
「……ふむ、霜男（ジャックフロスト）とは珍しい」
新事実発覚。
俺は珍しいらしい、なんでも霜男（ジャックフロスト）という魔物は極寒の地。
具体的にはマイナス何度の世界でしか、その存在を保てないらしい。
そもそも俺の容姿、人間の姿なのだが。本来の姿は雪だるまの様に雪が固まった姿みたいなんだってさ。
だから寒くないと溶けるらしい。
俺は特殊魔物（ユニークモンスター）で名持（ネームド）ちと二重に珍しい部類だった用だ。
改めて自身の特異性に触れてしまった訳なのだが、前ほど驚きが無いのはここ最近驚きの連続で慣れてしまったのだろうか。
まぁそんなことは今気にしたところでどうしようも無いのだから気にしない事にした。
切り替えって大事だと思う。
そして俺達はガゼル王とその部隊を客人として迎え、只今日本家屋風の屋敷にて宴会の真っ最中なのだ。
皆がどんちゃん騒ぎ、街で開発中の酒を持ってきたり、ポテトのフライ、畑で育て収穫した野菜、魔物の肉等がズラッと並ぶ。
リムルさんはガゼル王と呑んでいる。
何か真剣な面持ちで話をしているようで邪魔するのも気が引け、俺は宴会場をそっと抜け出し外に出ることに。
外のベンチに座ると懐からアイスを取り出しペロペロ。
『戻らなくていいのかよ？』
いいさ、俺は関係ないだろ？
この街はリムルさんとその仲間達の物だ、俺が変に干渉するのもな。
それにそういうの苦手だし、何か重大な決定とか責任のある仕事とか苦手だからさ。

『……そうかい……』
本当にリムルさんは凄いと思う。
魔物達の命を預かり、生活を守っているだから。
俺には絶対に出来ないな、俺は俺の身を守るのに精一杯さ。何せ臆病者の冷血者だからな。
『……違いない、それに多重人格者だしな。カハハッ……！』
おいおい、ここはそんなこと無いと言うところでは？
『言ってほしいのか？』
……いや、流石理想の君（俺）だな。
俺が外で自虐的な話に花を咲かせていた頃。
宴会場でこんな話が出ていたとは梅雨ほどにも思わなかった。
「所でリムルよ。ヨクルと言ったか、あの霜男（ジャックフロスト）は」
「あぁあいつがどうかしたのか？」
「……いや……何でもない」
なんとも歯切れの悪いガゼル王の返答にリムルは首をかしげた。
「……何かあるなら話して欲しいんだが」
「ならば言おう。霜男（ジャックフロスト）とは元来極寒の地を好む、何故なら其処でなければ生きて行けぬ故に。だがあの者は違う、この土地でも生命を散らすこと無く生きている。普通と違うと言うのは異常と言うことだ。俺は貴様（リムル）を信用しているが……あの者（ヨクル）は違う。目を離さぬ事だな」
今日知った奴に何を偉そうに。
そう思った、だが。リムル自身この世界の事、魔物の事情、その全てを把握している訳ではない。
ならばこの忠告はありがたく受け取って置こう。
「忠告は受け取る。だが、何があろうと俺がアイツを止める何せ親友だからな」
「ふっ……そうか。要らぬ世話だったな。赦せ」
「いやいいさ。俺よりもあっちの方が大変そうだしな」
リムルが後方を指差せば。
「貴様！主……モゴッモゴゴッ!!!!」
其処にはベニマル、シオン、その他魔物達によって拘束され口を塞

がれたクロウの姿。
恐らく先程の会話が聞こえていたのだろう、主を愚弄されたとあれば黙って居るわけには行かない。
「ガハハッなる程なあの者にもリムルと負けず劣らずの器があるようだ。今度はあやつの本性を暴くのも面白いやも知れんな」
「グガーーーー!!!」
「……その辺にしといてくれよ」

なんて、会話がされていたなんてな。
外でアイスを食べ、宴会場に戻ってきた俺が見たのは両手両足を拘束され口をタオルで塞がれたクロウの姿。
そしてそれを見て笑うガゼル王と困り顔のリムルさん。
「……うん？何が？」
俺には何が何だが。
とりあえずクロウをおとなしくさせようとタオルを外し素早くアイスを放り込む。
「むぐっ……!?」
物理的に黙らせる。
モゴモゴ、デカイ身体でアイスをチマチマ舐めるクロウ。大型犬か？
と、クロウをおとなしくさせた所で俺に視線が集中していたことに気付く。
「……ヨクル殿、それは何でしょうか？」
近くに居たドワーフにアイスを指差し問われた俺。
ならばこう答えるしかあるまい。
「……これはアイスだ!!ご賞味あれ!!」
アイスをばら蒔き、旨さを布教して行く。
誰もが甘美な優しいミルクの味に酔いしれる。
「ガゼル王もお一ついかがですか？」
始め目にする食べ物にガゼル王はビクッと肩を跳ねさせたがリムルさんがペロペロしてる様子におずおず受け取ると舌を這わせた。

「……旨いな……」
「良かった！もっとありますよ？今度は果実アイスなんてどうですか？甘酸っぱい口当たりが癖になりますよ！」
俺は沢山の方にアイスを振る舞った。
そりゃ、誰だって手作りを喜んで貰えたら嬉しいものでしょうかが。
まさに大盤振る舞い。
それにしれっと宴会に参加していたトレイニーさんにも美味しいを頂きました。
「リムルよ、俺は考えすぎだったかも知れんな……」
「……どうだろうな、アイツはよくわからんから」
「さぁ、もっとありますよーー!!」
「「「「アイスさいこう!!!!」」」」
アイスは皆を繋ぐ。

１７話《中央都市リムルに災害来訪》

「ワタシは魔王、ミリム・ナーヴァだぞ！挨拶に来てやったのだ!!」

と、まさかの魔王が来るとは。

時刻は数時間前に遡る。

先日、この街に訪問したドワルゴン王国、国王ガゼル・ドワルゴの提案によりこの街は正式に国として認められた。

もちろん、条件有きだが。

１つ目は国家の危機に際して相互の協力。

２つ目がお互いの技術の提供。

俺やリムルさん、多数の鬼人達が在籍しているこの街は戦力しては申し分ない。てか過剰戦力のような気もしなくないが、その戦力の提供。

あとは俺が作る魔素を与えられるアイスやリムルさんの回復薬、その他異世界由来の技術提供。

此処は何れ国として確立するだろう、その際魔物の国だからと敵対され、迫害され、力無い子達が淘汰される。

そんな可能性もありうる。だがドワルゴン王国と盟約を結ぶ事は国として存在する際に後ろ楯になってくれると言う事。

つまり、魔物の国を認めると言う事だ。

それはリムルさんにとって願ってもないことだ、リムルさんは二つ返事でＯＫしたそうだ。

これから此処は街として国として機能すると言うわけだ、ならば決めねばならない事がある。

そう、呼び名はどうするか。

一つの国家とするならば当然名が必要だろうよ、名無しの国などあるわけ無いんだし。

でも、そんなに悩む必要ないだろうな。

だってさリムルさんの国だし。

「リムルさんの名前を使えば良いんじゃね？だってここの国主はリムルさん以外ありえないんだしさ？トレイニーさんだってそう思いま

すよね？」
「ええ、その通りで御座います。ジュラの大森林盟主リムル＝テンペスト様ならば異議を唱える方は居ないでしょう」
と俺は無意識のうちに会議に口を挟んでしまった訳だ。
やべっと慌てて塞いだが後の祭り、俺の発言に乗っかる形で話しは大いに盛り上がって行き。
リグルド、ベニマル達によって何がいいか、何れがいいか等会議が勃発。
結果俺はリムルさんから恨めしげに睨まれ。
「……ヨクル……お前よくも……」
「あは……ははっ……ごめん」
こうしてテンペスト国、中央都市リムルと命名された。
国名が決まり、その他の決まりごとや雑務はトントン拍子で進み。
都市の発展と共に物流の活発化、中央都市リムル原産の特産物の開発等。
綺麗にレンガで舗装された道と商いの声。
「……綺麗な国になったなー、最初はみすぼらしい村だったのに」
ここまで来るのは本当にあっという間だったな。
俺がリムルさんにお世話になるようになってから何れくらいたったのだろう。
何て事を考えながら俺は氷を削っていた。
「ヨクルさま！かきごおりがほしいです!!」
「あいよー」
気の抜けた返答を返しながら俺はフワフワの氷を器へと盛って行き、果実を抽出して作った特性シロップを回し掛けた。
「そらシュニィ、仲良く食べろよ」
「うん！ありがとうヨクルさま！」
落とさないように慎重に受け取るとかき氷をホブゴブリンの友達と仲良く分けて食べている。
そうそう、俺も店を出したんだよ。
俺の能力と言えばわかるだろ？氷菓子屋だ。

アイスキャンディもかき氷もソフトクリームも売り出している、これがね、なかなか好評なんだよ。
魔物達が見たことも無いような氷菓子の数々は好奇心を激しく刺激し、この国に商いに来た外からの行商人も目新しい物には興味津々だったからな。
そのお陰か俺はちょっぴり金持ちなんだぜ？
まぁ、金を使うところがないから、貯まる一方なんだがな。
なんて感じでのんびりとただただ日々を過ごしていた俺、もう和やか過ぎて店番しながらうとうと船を漕ぎ始めた所で。
「……んっ？」
『主さん、こいつはヤベェ。ドでかい魔素を纏った何かがこっちに向かってきてる』
解離者（カワリモノ）の発言に只今お休みに入る寸前だった俺は不機嫌になりながら瞼を擦り、そのドでかい魔素とやらに視線を向けた。
「……えー、マジかよ……。これまた呼び出し案件じゃね？」
視線の先には空の一角を塗り替えるほどデカイ魔素の塊、それが一直線にこっちに向かって来てる。
恐らくだが何を目指してるかはわかっている。
リムル＝テンペスト。
先の大規模戦闘を皮切りに世界が、あのスライムに興味を持ち始めた結果だろう。
仮にも魔王を打倒したスライムに。しかも、今回の反応は豚魔王の比しゃない、これはリムルさんでも勝てないと思う。
だからこそ、俺は直ぐ様耳を塞いだ。
いや、無理じゃね？
俺に何が出来ると？
嫌じゃよ、死ぬくね？ヤバすぎだろこれ！
しかし、現実は無情。
嫌々気になってる俺のもとに通信が入る。直ぐ様着信を切りたい思いだが、勝手に通信されるんだもんよ。これ。
『ヨクル、すぐに来てくれ。ベニマル達が死ぬぞ、これ』

うっそやろ。
まさか、まさかと魔素反応の方を確認してみれば。
なんと鬼人達大集合。
ちゃっかりクロウも居るし。
雷なんか出しちゃってるしさ、殺る気ＭＡＸかよ。
「……ハァ……行くしかないかぁ……」
俺ごときが行ったところで何が出来るかわからないけど、行くしかないよな。寧ろ行かないと後が恐ろしい。
重い腰を漸く上げた俺は足元を凍らせるとスケートのように靴を滑べらせて行く。暫く小高い丘へと向かい移動したところで見えてきた。
バチバチとやりあっている戦場だ。
「……なにしろと？」
今しがたピンク髪の狂人がドラゴバスターとかなんとか叫びながら大穴を拵えたんだが？
ほわい？
なんと言うことでしょう！
青々とした草木が生い茂っていた丘に、巨大なクレーターが逆ビフォーアフター。
ホントに俺何するの？てか何やらされるんですか!?
俺は内心ガクブルでリムルさんに声を掛けた。
「おーい、リムルさーん！何事っすかねー!?」
「ヨクルーっ!!お前を待ってた!!」
と、ここで冒頭に戻る。
リムルさんに手招かれるまま、魔王ミリムの前に立たされた俺。眼前には幼女の化物。
めっちゃでっかい魔素を纏うミリムは正直言って恐怖しか感じない、だが、挨拶には挨拶で返すのが礼儀だろう。日本男児なもんで、剣道男児なもんで！
「どーも、ヨクルだぞ！挨拶を受けてやったのだ！」
「ブホッ……ヨ、ヨクル君!?死ぬ気なの君!?」

「いや、なんか独特な言い回しが魔王の礼儀なのかと……とりあえずお近づきの印にどーぞ」
ペコペコと会釈しながら取り出した物を手渡す、暫くそれを凝視していたミリムだが一口ペロリ。
「…な、な、な、何なのだこれはーーーー!!!!」
ふふん、驚くのも無理はない！
それは長年試行錯誤を繰り返したどり着いた究極のソフトクリームなのだから！
「甘くて冷たい……旨すぎるのだーーー!!!」
「そうだろう！例え魔王と言えど。この旨さには抗えまい……ふっふっふっ！」
「これは……なんという食べ物なのだ!?教えるのだ貴様!!」
ガシッ……!!
「え……グエッ……アガガガッ!!」
超加速で接近した狂人は俺の胸元を鷲塚むなり、めちゃくちゃに揺さぶってきた。
あー、脳が揺れるーー!!
「助けてーーー!!」
「さっさと教えるのだーーーー!!」
このピンク髪のぶっ飛んだ狂人は頭の中までピンク一緒なのだろう、教えろと喚き散らす癖に俺に喋らせる隙なんて与えない。
どうやって喋ろと言うんだ。頭凍らせてやろうかこの野郎！
リムルさんが仲裁するまで揺さぶられ続けた俺、その結果。
「おえっ……おろろ……」
キラキラを吐き出したのは言わずとも分かるだろう。
しかし、流石の魔王、俺の事など歯牙にもかけず今度はリムルさんにご執心。
まるで今来たばかりだよ？威厳たっぷりな魔王様だよ？
的なムーブでマントを翻す魔王ミリム。しかしながら、もう遅い手遅れなほど遅すぎる。
「なにが魔王だよ。魔素さえあれば魔王なのか？クソが。他人様の街

に急に来て挨拶だよwって頭ん中お花畑なのかな？」
「ヨクル、ドードー、落ち着けー」
要するに本当に只の挨拶だったわけだ。
全くもって迷惑極まりない魔王の来訪だったが挨拶が目的なら用は終わった。ならば直ぐに帰るのかと思いきや、この魔王。
「さぁ町を案内してくれもいいのだぞ！それと貴様、先程の冷たくて甘いものを寄越すのだ！」
とぬかしやがる。
氷で武装した拳骨をこの魔王の脳天に叩き……込みたかったが、いつの間にかクロウに羽交い締めにされていた俺。
じたばた暴れてみるがクロウとの対格差を覆せる訳がなく、俺は捕縛された宇宙人の用な格好でそのまま町に連行された。
ちゃっかりアイスを盗ったベニマルとミリムは許さん。
前方を歩くランガとその上に跨がるリムルさんとミリムをじと目で見てみれば俺の姿に苦笑しながらもミリムの話に相槌を返すリムルさん。
しかし、何やら話していたと思いきや急にランガを飛び降り俺を拘束するクロウから俺をもぎ取ったミリム。
なにか俺は玩具か何かなのか？おん!?
そう視線で訴えれば返ってきたのはめっちゃキラキラした瞳だった。
「うむ！貴様もなかなかの強さなのだ！強い奴は好きなのだ！リムルはマブダチだからな、貴様も友にしてやろう！」
「はぁ？何言って……」
フフンと無い胸を張るミリムの背後で悪いと手を合わせるリムルさん。
「あー、はいはい。友達ね友達。俺達友達だよー」
「うむ！貴様、名はなんという!?」
え、さっき一応名前言ったんだけど。と言いたいところだったが、きっと名前を聞きそびれたんだろう。
そう無理矢理納得させ再び自己紹介をすることに、だって無理に張

り合うと疲れるだろ？
「……ヨクル＝ライフ。よろしく」
そう言いながら手を差し出すとミリムが勢いよく掴み、一振り。
ブンッ!!!バキッ!!!
あ、腕イッたわ。!!
ミリムが手を離しリムルさんの所に向かったと共に宙に離された俺の腕はダランと垂れ下がる。
「……はぁ……殺したい……」
片手でイカれた腕に回復を掛けながら本音が零れた。
恐らく聞こえていたのは傍にいたクロウだけだろう、何故ならクロウの口角がひきつっていたからな。
街に着くと。
何やら広場に人だかりが出来ていた、ガヤガヤと不安げなホブゴブリン達の様子にまた面倒後とかと頭を振り。
人だかりを掻き分けて行けば。
倒れたリグルドの姿と初見の魔物達。
ゴブリン達の中でもリグルドの耐久力は折り紙つきだ、何せあの筋肉だからな。
そのリグルドが負傷しているならばそれなりの手練れな訳だ。
俺はそっとリグルドを助け起こすと怪我をしている胸元に手を添え回復を掛ける。
「申し訳ありません……ヨクル様」
「いんや、気にするなよ。直ぐに良くなるからな」
リグルドを倒して気分よくなったのか、高らかに宣言する魔物。
自分達は獣王国ユーラザニアの使者である。我らが王、魔王である獣王カリオンの軍下に下れ、だそうだ。
「俺はカリオン様直属のっぐはぁ!!??」
「……おー、よく飛ぶ」
二の句を告げようとしていた直属の某さんは黙らされる事に。それはもう物理的に。
しかも、この街の仲間でなく挨拶に来ていた魔王ミリムがめっちゃ

殴った。
「マブダチの仲間に何をするか貴様ーーーー!!!!」
「ホントにマブダチになってよかったんすか？これ。国際問題になりません？」
「ぐぬぅ……」

18話《人間のお客さん》

魔王ミリムと魔王カリオンのタブルパンチ、突撃テンペスト国を受け、カリオンの使者をミリムが殴ってしまうという暴行傷害事件から数日。

全くもってあの事件には肝を冷やした。

ここテンペスト国は建国から数週間、国としてはまだまだ若輩にも関わらず国主は絶賛魔王注目のリムルさん。加えてここジュラの大森林は大国に挟まれる領土である。

今までは暴風竜の加護のもと不可侵領域だったが暴風竜はリムルさんの腹の中。

いつかは他国からの接触があるだろうとは思っていたけれど、まさか他国の使者を殴り飛ばす事になろうとは。

それが同じ魔王の手であったとしても、難癖つけられて此方が不利になる条件を飲まされる可能性もあるのだから。

と、頭を当初は抱えていたものの。

「平和だねー……」

「平和なのだー！」

「へいわだー！」

俺は今縁側でミリムとシュニィの三人で仲良くアイスを楽しんでいた。

あの事件以来、使者を送り返したユーラザニアからは一切の音沙汰無しだった。

余程ミリムが魔王として位が高いのか殆ど不問みたいな感じで収まりつつあった。

「うむ！やはりアイスは旨いのだ！もう一本欲しいのだ!!」

棒アイスの最後の一口を頬張ったミリムは冷たさと甘さに舌鼓を打ち更なるアイスを求めにじり寄って来る。

確かにアイスを一本、二本と求めてしまう気持ちは分からなくもないが。

「駄目だろ。リムルさんから食い過ぎ注意くらってんだから、マブダ

チとの約束は守らないとなー」
「ぐっ……ぐぬぅ……確かにそうなのだ、約束は守らねばな……！」
だが、目線はアイスに釘付けだぞー。
仕方なしにこっそりアイスを取り出してやる。
「しー。リムルさんには内緒だぞ？」ニカッ
「う、うむ！ありがとうなのだ！」
「あ、ヨクルさま、いけないんだ！リムルさまにつげぐちしないと…！」
「あ、あわわ！ちょっと待つのだ！シュニィ！はんぶんこしよう！なっ！だからリムルには言わないで欲しいのだ！」
てな、感じでシュニィとミリムは何故か仲良しになっていた。まぁ確かに見た目の幼さも雰囲気も似た感じだからだろうか？
初対面から意気投合まで秒殺だったからな。
と楽しげにアイスをペロペロする二人を眺めていた俺だった訳だが。
断じてショタコンではないので勘違いしないようにっ!!
仲良くアイスを片手に談笑していたのだが、何やらジュラの森林奥に複数の気配を感知した。
俺がなっ!!
『いや、俺だよっ!!』
いやいや！俺も感知出来てたしー!!
解離者（カワリモノ）と軽く言い合いをしながら俺は腰を上げた、ミリムとシュニィにお代わりのアイスを預けてだ。
だってこいつらやりすぎるんだもん。小さな子供と一緒だ、簡単だったはずの買い物があれよあれよと何時間にも及ぶという不思議現象が起こってしまうからな。
それにゴブタの警備隊も感知場所から離れているし。
放っておいても大丈夫かも知れんが、この街の近くで死亡なんてされたら目覚め悪いし。
俺は絶氷者（ヴィーネア）で地面を凍らせるとスィーと滑って行った。
街を抜け、ジュラの大森林を滑って行くと土埃が立つ場所が見えて

きた、気配は複数。
内1つは魔物か。
「……ふむ、助けるかー」
コキコキ、手首を軽く鳴らした感じで土埃の中に滑って行く。
やはり、人間がでっかい、えー……あれは……蜘蛛か？なんかよくわからん魔物に襲われてた。
『ありゃ槍脚鎧蜘蛛（ナイトスパイダー）だな、あいつら死ぬんじゃね？』
ふむふむ、やはり蜘蛛か。
いつ割り込もうかと考えていたが、丁度良いタイミングで人間の男が手にしていた剣が折れてしまったようなのでこれ好機と割って入る事に。
颯爽と茂みから飛び出した俺、目の前で蜘蛛の足か？なんか鎌のついた足？前腕？なんか知らんけど。
とりあえず鎌に切られそうになっていた人間を背後に庇い、蜘蛛に向かい掌をむける。
「よっとっ解離者（カワリモノ）」
『絶命せよ』
蜘蛛は俺の声を聞くと一度痙攣した後、その巨体を地面に横たえた。すでに目に光は無く、鼓動も途絶えた。
「おー、初めて使ったが便利な物だな。呪詛って！」
『呪詛』
解離者（カワリモノ）に統合されたスキル。
対象を呪い行動を強制する。
強い呪いには多量の魔素が消費され、呪いに掛ける対象の魔素量と自身の魔素量を比べ劣っていれば簡単な呪いでも多くの魔素が必要となる。
「格下の対処にはもってこいだな」
『おいおい、主さんよー。呑気にしてるとこ悪いんだが、目茶苦茶警戒されてっぞ？』
解離者（カワリモノ）に指摘され、助けた人達をぐるりと見渡せば皆が一様に武器を俺に向けていた。

おっつ。
やっべー。魔物から助けたけど、俺も魔物だし。
しかも皆面識無いわー。そりゃ、警戒されるわー。
参ったなー。……よしっ……ここは必殺技に頼るしかないな！
「リムルさんの使いで来ましたー。お怪我はありませんかー？」
見たかリムルさんに丸投げ。
リムルさんならジュラ⊠テンペスト国の国主、知名度は抜群の筈だ。新米の国とは言え、使者と名乗った俺を攻撃すれば国対国となるはず。
まぁミリムみたいなのがこの人間達の中に居たらどうしようもないがな！その時は俺も渋々戦おう。ただしリムルさん人間殺すの嫌がるから拘束することになるけど。
「リムルさんの？」
おっしゃーい！来たー!!
この機を逃すな俺！
人間達が二の句を告げる前に畳み掛ける！
人間がこのタイミングで来た理由は大体検討がつく、恐らくはオークロードを討伐した者の調査。
話によるとこのジュラの大森林は大国と隣接しているらしい、しかも最近ガゼル王と共に国として機能している。
ならば視察と調査だろう。
味方になるか敵になるか、交渉し互いに不可侵となるか。そこら辺はどう落ち着くか分からないが、めんどくさい話は勘弁被る訳で。
「リムルさんをご存知で？ならばこう言いましょう。ようこそ、我等の国へ」
うっし。
この流れで街に案内してリムルさんに丸投げしてやろう。えっ？敵だったらどうするか？
いやいや、言っては悪いがこいつらにはリムルさんどころか俺にすら傷つけることも出来まいよ。ケラケラ。

◆◆◆

「……って訳で連れてきましたっ！」

「……何がって訳なんだよっ！バカっ！」

助けた人間達を連れて客間まで案内した俺、道すがら通りかかったベニマルにリムルさんへ客だぞーっと伝えて。

ベニマルからの伝言で来たのだろうリムルさんに当初から予定してた丸投げを実行した。

勿論、結果は反感を買ったようだったが、気にしない。

だってめんどくさそうなんだから、てなわけで案内終了した俺はそそくさ客間から退室、もとい逃亡を謀ったが。

「……おい……お前どこ行く……？」

ガシッ……!!

擬音通り、まさしくガチ掴み。襟ではなく首をだ。

「ぐえっ!?」

まさか、首を掴まれると思うか？

否、断じて否だっ！

カエルが踏みつけられ絶命する一歩手前みたいな声が出たのは俺のせいじゃないリムルさんのせい。

渋々、逃亡を失敗した俺は未だに痛む首と軽い酸欠で目頭に浮かんだ涙を拭うと席についた。

一人は憤慨し、イライラとした様子を隠すことなく誰かさんに向けてくる。

一人は、てか俺は未だにブーブー不貞腐れ痛む首を擦る。

そんな雰囲気で話を切り出さなければいけない人間達の心境や如何なものか。だが、この雰囲気を断ち切り話を進めなければいけない、てか話さんと来た意味ないし！

「……え……ゴホンッ……私はフューズと申す者、ブルムンド王国の自由組合支部長を任されております」

フューズの用件とは森の調査を行っていた三人組と故人である英雄のシズさんとやらの供養と先日のオークロードの件だった。

まぁ正確にはオークディザスターだが、とりあえずリムルさんが先だって人間国に忠告としていたお陰で対策も取れたとそしてオークロードの対処をしてくれたリムルさんへのお礼だったらしい。
えっ？俺は？とかは言わないお約束だ。
後はお察し、今度はオークロードを片したリムルさんが驚異になるのではないかという危惧。
だが、そこは安心何故ならガゼル王のお墨付きなのだから。
とここまで話した所でフューズの脳内はパンクした、リムルさんが抱える戦力と資材、技術に驚いたのだろう、無理もない。
そして、フューズと三人組を除いた。その他多数。
見るからに荒くれ者という感じの集団に発言件が移る。
「なんでスライムが喋ってんだよ」
「ブフォッ!!アハハッ!そこ突っ込むの!?だれも触れなかったのにっ!?あー、腹痛ぇー!!」
案の定、黙らされたがな。物理で！
して、こいつらはファルムス王国からの調査団であった。
そもそも、調査団はリムルさんの街にくる予定ではなかった、あくまで調査対象はオークロードであったのだから。
しかし、ファルムス王国ブラックだねー。
調査に行くと言うのに装備は安物ときたもんだ。しかも、荒くれ集団が言うこと聞かなきゃ契約魔法とやらで強制労働だと、鬼畜の所業！
しかしなかなかどうして荒くれ者と言う割りに団長のヨウムは義理に厚く仲間からの信頼も厚い男であった。
「あ、なんか嫌な予感するわ。オークロードの討伐はしれ渡っていない、何故なら知れていたら調査と言わずリムルさんの討伐くらい話が膨れ上がっていても言いはずだ。ならば……オークロードの討伐は上の管理職くらいしか知らない。ならば今なら影武者を作れる、リムルさんへのヘイトが格段に減るわけだ……つまり、俺に面倒事が降りかかる!!」
「……流石よくわかってんなヨクル！ヨウム君、君英雄にならない

?」

今、ヨウム君英雄化計画（予定）の火蓋が切られた!!!

１９話《暴風大妖渦》

「えー、リムルさんから貴方達を任されてしまいました。ヨクル＝ライフ。よろしくー……さてとりあえず係稽古しよっか？」

ヨウム英雄化計画が（予定）から本人の意識を確認した後に（本格）となり、やはりと言うべきかヨウム育成ゲームは俺に任されることとなった。

刀の扱いはハクロウがピカイチでそのつぎに悔しながら次席に俺という扱いだ。

ならば何故ハクロウに頼まないのか？簡単だ。リムルさんからしたら俺の方がヨウムの打ち込みに良いということ、俺の戦闘スタイルはかなり受け身だからな。

「本当に真剣でいいのかよ？」

「え、ああ。問題ないさ、当たらなければ問題ないんだし」

凍雪の刃紋を撫でながら。当てられるなら当ててみろ、そう言わんばかりのヨクルの発言に勘に触ったのか青筋を浮かべながら剣を強く握り締める荒くれ者達とヨウムに。

「寧ろ当ててみて……？」

ケラケラと笑いながら煽るヨクル。

今、燻った怒りの火種に灯油をぶっかけ業火となる。

「おらぁぁぁぁぁぁ!!」

我先にヨクルに突撃し剣を大きく上段に振りかぶり振り下ろす、しかし剣が完全に降り下ろされる直前、凍雪で剣の腹をスッと真横にズラしてやれば、剣はヨクルを避けるように斜めに走り地面に刺さる。

立て続けに畳み掛けようと迫る剣の数々をヒラリヒラリと避けて行くヨクル。

摺り足で凍雪で対捌きで時々ヨウム達の身体へ凍雪の打撃か入り刀の異様な冷たさに身を震わせる。

数分後。

凍雪を鞘に納め、懐からアイスキャンディーを取り出し口に含んだヨクルは鼻歌混じりに帰路へ。

ヨクルが去った後には荒い息使いで地面に倒れた調査団、ヨウムの死屍累々。
何とかヨクルを追いかけようとか身体に鞭打つが、疲労で全く動かない身体はもがき身体に土を付けるだけだった。
「……一撃も当てらんねぇのかよ……化物が……」
しかし、流石はリムルさんに英雄にと提案されるだけのことはある、ヨウムは次こそはあのヘラヘラ笑うにやけ面をぶん殴ってやると決意を固くするのであった。
「ふんふーん。しかしまぁ、結構根性あるもんだね。絶氷者（ヴィーネア）で身体能力低下していってるのに粘られたからなー」
『……マジで陰険だな……主さん……』
ケラケラ。
解離者（カワリモノ）が何か言ってるが、知らん知らん。やはり上達と言うものはとことん苛め抜いた先にあるんだよ。
ハクロウにぶちのめされた俺が言うんだから間違いない、ヨウム達がどこまで耐えられるか見物だね。
『ホンット……マジで……今の顔、やべぇぞ？』
「……ヘラヘラ……剣道ってこうじゃなきゃね。切っても死なない剣術が剣道だ、ならとことん殺らないとな？」
『主さんって急にスイッチ入るよな……』
「さぁ、楽しくなってきたぞー!!」
凍雪をクルクル降りながら、口に加えたアイスキャンディーを噛み砕いた。

◆◆◆

「食らえや!!」
「よっと、まだ大振りだな。もっと小さく、足を使えー」
カンッ……キンッ……!!!
稽古を開始して数十分。
既に残っているのはヨウムだけ、唯一生き残っているヨウムも恐ら

くは体力は限界、今ヨクルに打ち込んでいるのは最早根性、気力で無理しているのだろう。
しかし、そこからが打ち込み稽古の肝だろう。
限界を超えてこそ向上があるのだ!!
「さぁーこーいーー!」
「うおりゃあぁぁあ!!!」
腹に籠った充足した気合いは剣先を震わせ、力が込められる。ヨウムにとっても打ち込めるであろう最後の一撃。
遠間からジリジリと足を使い間を詰めて行くヨウム、そして一足で切り合える間になると、フッと息を止めた。
勝負は一瞬。
中段から右上に切り裂く鋭い一撃、しかしヨクルはそれを読んでいた剣激がくるであろう箇所に凍雪を構え受け止める瞬間。
ヨウムの剣先は凍雪に触れる直前に切り返し、右上段から左上段に。
「くらえやぁぁぁあ!!!」
咄嗟にバックステップでかわしたヨクル。
全てを込めた一撃をも避けられたヨウムは限界を迎え、ゆっくりと地面へと倒れた。
「……くっそ……またダメだったか……」
と悔しげに呟くと意識を暗転させた。
「……へー……やるじゃん!」
しかしヨウムの一撃は外れたが、カスッていたのだ。
ヨクルの胸元から脇腹に掛けてスッと切られた服を摘まみながらヨクルは倒れたヨウムに賛辞を送るとそっと口の中にアイスを突っ込んだ。
「…げぼっ!?!?何しやがる!!」
突如捩じ込まれた冷たい物体に意識を無理やり覚醒させられたヨウム、だが意識は覚醒しようと身体は既に動かずアイスを吐き出す事しかヨクルに抗議する術がない。
「あー、酷いんだ!俺のアイスを吐き出すとは許せん」

おらおら。
ヨウムが吐き出す度に再度突っ込まれるアイスキャンディーの踏襲にヨウムは叫んだ。
「ゆっくりと気絶させてくれよぉぉぉぉーーー!!!」
やったね、ヨウムの剣術、根性が成長したぞ!!
そして着々とヨウム育成ゲームは進んでいった。
実践は俺が担当とことん苛め英雄足る精神と実践での剣術の向上、俺が足らない細かな剣術の技術はハクロウが装備等はシュナとクロベエの合作。
と、順調に進んでいたのだが……。
予想外な訪問に一旦育成ゲームは中止を食らう羽目となったのだ。
それは森妖精(ドルイド)の訪問だ。
かつてテンペスト国設立の際に立ち寄った森妖精(ドルイド)の一人、しかも、その姿は傷付き魔素の乱れが目立つ。
「リムル様、ヨクル様。このような姿で訪問されたことを御許し下さい、私はトレイニー様にお仕えしている森妖精(ドルイド)でございます。直ちに戦闘の準備を暴風大妖渦(カリュブディス)が復活し、此方に向かっております……!」
「暴風大妖渦(カリュブディス)……!って何だ?」
俺としてはそもそもの存在が分からないので何が危険なのか理解できないんだよね。
皆が森妖精(ドライアド)の警告に生唾を息をのみ身構えてるのかがな。
『暴風大妖渦(カリュブディス)ってのはでっけぇ魔物よ。恐らくは厄災クラスの魔物だ』
へぇー、厄災?ミリムと一緒?
それって結構ヤバいのでは?
「それがこっちに向かってるのか……何で?」
「恐らくは復活したばかりで魔素が足りないのかと推察しております、ですので魔物を食らい魔素を補充するのが目的かと」
ふむ、復活したばかりでご飯が欲しいのか。
ならば降りかかる火の粉は払わねばなるまいよ、しかし魔王級と言われるとミリムしか参考が居ないからな。

いまいち対策と言われてもと思うところだが。
「……てか魔王級なら、ミリムに倒してもらえば良いんじゃ？俺たちはそのサポートみたいな？」
それが一番手っ取り早く確実なのではと思った俺だった、ミリムだってこの街に来てから戦闘は極力しないという約束だったようだし身体が鈍ってるだろう。
案の定、俺がそう提案すればミリムは目をキラキラさせ、リムルさんに許可を貰えるのを今か今かと待っているではないか。
だが、俺の提案はバッサリ切り捨てられた。
リムルさんにでは無く、周りの仲間に。
「いえ！我々の力を見せる時です！リムル様！」
「……リムル～！」
鬼人達の我らの街は我らの力で守るのだという主張と。
久々に暴れたいのだっ！と言わんばかりのミリム。
結果は。
「……俺達の力を信じろミリム、俺らの事は俺らで何とかするから……なっ！ヨクルッ!!」
トンッ……！
肩に掛けられた腕に俺は渋々頷いた。
「……はぁ……また戦いか……戦闘の日々は魔物の本分なのかね……」
深いため息と共に俺の背後にもやる気満々のクロウとシュニィを振り返り、再び深いため息を吐くのだった。
「やってやりましょう、ヨクル殿！」
「うん……！僕もがんばるよ……！」
「……あ……うん……頑張ろーね……」
そうしてまたもやテンペスト国は大規模な戦闘に巻き込まれて行くのだった。

２０話《大激闘》

「……ということで、一旦君の育成中止ね。怪我しないように街で避難してるように」

暴風大妖渦（カリュブディス）進行に伴いヨウム一団には一旦避難しておいて貰う事となった。

此方は戦闘の準備やらで大忙しいな訳で構っている暇がないのだ。

だが、ヨウムとしては納得が行かないらしい。

「いや、そりゃないぜヨクルさん！俺達だってアンタらに世話になった！加勢するぜっ!!なぁお前ら！」

そうだっ！そうだっ！

「いやいや。折角育てたのに死んで貰っちゃ困るんだよ？分かる？邪魔だから避難してて」

はっきりとそう言ってやりると激昂し食って掛かるヨウム、俺は胸ぐらを捕まれ足が宙に浮く。かぁー高身長が!!

負けじとヨウムの胸元に手を当てる。こっそり絶氷者（ヴィネア）で体温と体力を奪ってやれば胸ぐらを掴んでいた手は悴み自然と力が抜けて行く。

スタッ……！

地面に降り立つ俺は項垂れるヨウムの肩を軽く叩きスキルを解除する。

「分かってくれよ。俺も君らを守れるか分からない、君らは良い奴だこんなところで死ぬなよ。それに俺達が死んだら後は任せたぜ？英雄様よっ」

そう言い残すと俺は部屋を後にした。

閉めた扉の奥から打撃音と怒号が響いたが確認することなく俺は戦場に向かった。

あ、そうそう。

フューズと三人組もこの街での生活をエンジョイして休暇を楽しんで貰っていたのだが、急に大型モンスター来訪じゃん。

だから、街の住人達と避難して貰う予定だ。

お客様だからな、怪我して返すようなら此方の沽券に関わるってものだろう。
それに、負けるとは思わないがもしものことを考えれば暴風大妖渦（カリュブディス）の情報を残しておかなければならないし、俺達が死んだ後、街の住人の保護も検討して貰わなければならないからな。
リムルさんもそれを考えているんだろうな。たぶん。
さてと。
傍らに凍雪を背負わせたシベリアンハスキーと背後にシュニィとクロウを引き連れ。
俺はリムルさん達のいる広場へ向かった。
そこにはこれから、来るであろう暴風大妖渦（カリュブディス）との戦闘を行うと宣言するリムルさんの姿。
やはりそこにはフューズさんも居た。
「こんちは、フューズさん。あんまり話出来なかったから最後に話しますか？」
「ヨクル殿……縁起でも無いことを仰るな」
「ヘラヘラ。まぁ負けるつもりは無いけど、万が一があるじゃん？そこはリムルさんからも聞いてるっしょ？」
そう聞けばヒューズさんは言葉に詰まったようで、二の句は告げられなかった。
「……ヒューズさんも良い人だから、任せられるよ」
「……ハハッ……随分と私は信頼されているようだ……貴方もリムル殿と同じく魔物らしくない方ですね」
「そりゃそうでしょ。俺、元は魔物じゃないもん」
「!?……それはどういう……」
ヒューズさんが驚いたように目を丸くする姿をしてやったりと悪戯が成功した子供のようにニタニタ笑った後。
俺はその場を後にした。勿論ヒューズさんの問いには沈黙で返した。
「ヨクル。準備はいいか？」
「おうよ！リムルさんこそ遺書は書いたか？」

「抜かせ。死ぬつもりなんかねぇよ！」
「だよなー！とことんやってやろーじゃないか！」
おおおおおおおお!!!!!
俺とリムルさんの宣言に皆が拳を突き上げ吠える!!
俺達はヤル気満々、今なら魔王だって倒せるさ！
そうして、俺達は決戦の地へ進軍した。街の住人、ヒューズ組、ヨウム一団も今頃街から避難しこの戦いの結末を見ているのだろう。
決戦の地はドワルゴンへの街道である、広く街からも離れている。道を整備し舗装してくれたゲルド達には申し訳ないが、直すの手伝うから許して。
暴風大妖渦（カリュブディス）。
俺はこれから戦うであろう敵のことを考えていた。
ヴェルドラの因子がなんたらで魔物の死骸を依り代にして復活するとかなんとか。
魔物の脅威度的には厄災級だが力だけなら魔王に匹敵するらしく、そして持っているスキルがとにかくキモい！
『魔力妨害』と『超速再生』その諸々＋お供の小判鮫（メガロドン）も『魔力妨害』を持っているという。
俺のスキル泣かせ、しかし超至近距離から魔素をぶちこめば効くんじゃないか俺は思う、てか思いたい。
じゃなきゃまたしても俺お荷物だし。
それに俺には秘策があるんだよ。
リムルさんにもそれは話してある、発動のタイミングは俺に委ねられてるからな。
と考え込んでいる内に結構時間が足っていたらしい。
『来るぜっ！』
上空に高密度の魔素を感知。
それはリムルさんも同じようで俺と同じ空をじっと見ていた。
まだ距離があるが空に黒い影が現れた、それは悠々と空を泳ぎゆっくりと此方に向かってくる。
次第に輪郭がはっきりとしてくると影の全貌が明らかに。

「あれが暴風大妖渦（カリュブディス）……天空の支配者ね」
青い鱗がビッシリと身体を覆い、鯨のような髭を生やしたでっかい口と黄色い単眼。
周りにはお供を侍らせた魔物。
「やっぱ！想像よりキショくね!?」
いま決戦の火蓋が切られたのだ！
現れた暴風大妖渦（カリュブディス）あーんど小判鮫（メガロドン）に向かい。
大将ベニマルの黒炎獄（ヘルフレイム）をお見舞いしてやる、黒い炎の結界が敵を焼き尽くさんと業業、燃え盛る
だが、炎が収まると落ちてきたのは小判鮫（メガロドン）一匹のみであった。
「えー、ベニマルさーん加減したんすか？」
「俺は全力でやったわ!!」
ベニマルに肘で突っついて煽ってやる。
しかしまぁ、ベニマルの火力は生半可じゃない、それが一匹を仕留めるのみとは『魔力妨害』想像よりも厄介かもな。
「さーて、俺達も行きますか！シュニィ！クロウ！周りの雑魚を蹴散らすぞー！」
「おー!!」「ハッ！お任せを!!」
各々が眼前の敵を屠らんと行動する、俺とシュニィとクロウ。その他にソウエイと忍者隊。カビル達ドラゴリザード隊。ランガ＆シオン。
そしてリムルさんは後方彼氏となっている。
「さてー、クロウ！シュニィを持て！」
シュニィがクロウの掌に乗り、クロウが腕を思い切り振りかぶる。
このあとは想像できるだろう。
《豪雷鬼神（ごうらいきじん）》
《冷たい顕現（イタカ）》
クロウの肉体に黒雷が走り、筋肉が膨れあがる。
一方シュニィの肉体には冷気が漏れ、氷の武装が身体を覆う。
「放てーーー!!!!」
「ハッ！行ってこいシュニィ!!」

「はーーい!!」
ドゴンッ……!!!
振り抜かれた豪腕は空気を大地を割り、シュニィは弾丸のように空に打ち上がる!
「シュニィー!やっちまえー!!」
《冷たい顕現(イタカ)》
再び発動されたシュニィのスキル『冷たい顕現』は周りを浮遊する小判鮫(メガロドン)へ狂気を伝染させる。
これは魔素でもたらされた現象ではない。これは本能的恐怖、宇宙的恐怖。
死してもなお、生理的に受け入れがたい狂気は正気を失わせ発狂をもたらす!
「「「ギャオアアアア!!!」」」
発狂した小判鮫(メガロドン)は混乱し敵味方問わず噛みつく、遣えるべき暴風大妖渦(カリュブディス)のヒレにも噛みつき、鱗を剥ぐ。
「よーし、畳み掛けろー」
その後は順当に一匹に対して複数で、味方のカバーを行いミスを拾い誰一人掛けること無く命大事に!
高笑いしながら敵の返り血で真っ赤になるシュニィ、黒い流星と化したクロウ。
首をぶった切るシオンの首斬り包丁。ベニマルによって作られた鮫の丸焼き。
それと目につく小判鮫(メガロドン)同士の共食い合戦。
「うわー、話には聞いてたが恐ろしいスキルだな」
絶氷者(ヴィネア)で造り出したでっかい鷹に乗り、リムルさんがいる上空まで飛行した俺、開口一番言われたシュニィのスキル。
まぁ想像は出来たけど流石クトゥルーの系譜。
近くに迫る小判鮫(メガロドン)の目に凍雪を突き刺し、絶氷者(ヴィネア)を使い内側から凍結させる。
「まぁ味方ならオッケーでしょ」
『主さん。今の鮫から『魔力妨害』を奪っといたぜ』

「お、ナーイス。さてとあれどうする？」
「どうしたもんかな……攻撃を通そうとも鱗が邪魔で鱗を剥ごうにも『超速再生』が即時鱗を再生する……」
「俺ならスキル凍結させられるけど……近寄れるかね」
暴風大妖渦（カリュブディス）の周りを高速で回転する鱗の本流に苦笑い。
「まぁでもやってみる価値はあるっしょ、死ぬわけにはいかんからね」
「だな、俺もサポートするからやってみろ！ヨクル！」
「おうよ！」
鷹を操り暴風大妖渦（カリュブディス）へ接近して行くヨクル、近づくにつれ密度を増してく鱗の弾幕。リムルさんが何か新しいスキル『暴食者（グラトニー）』で鱗を食い付くし。
俺に道を作ってくれる、絶氷者（ヴィネア）の操作を解離者（カワリモノ）に任せ。俺は氷技工で鷹の操作に全神経を注ぐ、時に囮の燕を造り鱗を誘導してのらりくらりと避けて行く。
すると暴風大妖渦（カリュブディス）の単眼からビームが発射されるがビームに沿って眼前まで近づき急上昇。
そして暴風大妖渦（カリュブディス）の上空にやっとこさたどり着いた俺は大きく息を吸い込むと急降下。
空中で鷹から飛び降り凍雪を巨体に突き立てる。絶氷者（ヴィネア）で刀に氷を何重にも纏わせ巨槍のように形成すると思いっきり突き刺す鱗を砕き肉に深く深く刺さった凍雪へ。
「絶氷者（ヴィネア）!!氷尽くせ!!!」
今持てる全魔素を注ぎ込む。
パキパキと音を立て、突き立てた肉が血液に霜が降り氷結して行く。身体能力、スキルをも巻き込み。
凍って行くが……何か違和感がある。
「……何か……中に居る？」
『解析したぜ。こりゃユーラザニアの使者だな、名前は……フォビオって奴らしい。ミリムーミリムーって呼んでんぜ？』
「へ？それって……おっつ!?いってー!?おい！解離者（カワリモノ）！防御は任せてただろがっ!!!」

悪事を働いてる俺に気づいたのだろう、鱗の一点集中攻撃に堪らず逃げ出した俺は解離者（カワリモノ）に叫ぶ。
『仕方ねぇだろ、こちとら解析してんだ馬鹿野郎がっ!!』
「なっ…このっ……ふぅ……今はそれよりリムルさんにも伝えないとな」
今は怒りを抑えよう、大丈夫クールに行こうぜ。
てな感じで再び鷹を造形し背中に着地した俺はリムルさんのもとへ急ぐ。
「リムルさん！」
「ヨクル！」
「あいつの目的はミリムだっ！」（カリユブディス）
あれー？なんで知ってんの？
……愚問だった、リムルさんには大賢者大先生がいるんだったわ。俺の苦労とは一体？
と思ってると話を聞いていたのかミリムがすぐ近くまで飛んできており、首をかしげていた。
「呼んだか？」
「あぁ、ミリム。あいつの目的はお前らしい、分かるよな？」
「……？……!!わかったのだ!!任せるのだ！マブダチよ!!私に掛かれば一瞬だぞ!!」
「ミリム！核は傷つけるなよ！手加減だ！て・か・げ・ん!!」
「任せるのだ!!私の『竜眼』（ミリムアイ）には全てお見通しなのだ！見よー！これが手加減というものだーー!!」
《竜星拡散爆（ドラゴバスター）》
ミリムの両手に集まる輝く魔素の粒子は一際強く輝くと幾つもの流星が暴風大妖渦（カリユブディス）の身を焼き、抉り、蒸発させて行く。
あまりにも圧倒的な力を前に。
俺は思った。
やっぱり最初から任せれば良かったんじゃないのか？
と。

21話《大勝利からの宴会祭り》

「えー無事、危機を乗り越えた我らにかんぱ～い!!」
「「「かんぱーい!!!」」」
「もっと酒を持ってこい！足らんぞ足らんぞっ!!」
「良い呑みっぷりではないか!!かんぱーいなのだ!!」
と、ただいま絶賛宴会中で御座います。
我々は無事に暴風大妖渦（カリュブディス）の脅威を退けることに成功し、大健闘を称え食えや呑めや騒げや状態な訳である。
俺の知らん間に来ていた、トレイニーさん達やドワーフ達とガゼル王も宴会の席についていた。
だが、まぁ詳しく言えば倒したのは俺達では無くミリムであって。
黒幕も捕まっては居ないのだから、脅威が去った訳ではないという問題もある。
と言うのも。
思い出されるのはミリムが暴風大妖渦（カリュブディス）が爆殺死散した後、肉の焼ける匂い焦げた嫌な黒煙の中からプスプスと煙を立てながら落ちてきたフォビオをキャッチさせられた俺は焦げた臭いに顰めっ面をしながら嫌々、そっと地面に下ろした。
横たえたフォビオの肉体、その胸元に気色の悪い肉の塊。
ドクンッ……！ドクンッ……！
それは未だに熱く高く鼓動を打つ。
「……おえっ……マジキモい……」
「おい、可哀想だろ！」
「それが……核ってやつなんでしょ……？取れるのそれ……？」
暴風大妖渦（カリュブディス）は話によると、核を元に精神的肉体を構築し復活と封印を繰り返す化物だったはず。
なら核を分離させただけではまた某かの依り代を使い復活するだろう。
「なぁ、ヨクル。お前これ凍結できる……？」
は？

「……だから、これ……凍結させて……？」
は？俺にこれを触れって？
触れっていうの？
「嘘でしょ……？嘘と言ってよ……!?」
だが、リムルさんの目はガチだった。
確かに絶氷者（ヴィネア）で核としての機能を凍結させてしまえば簡単に取り外せ、リムルさんの暴食者（グラトニー）とやらで喰ってしまえば2度と復活はしないだろうよ！
だけど……!!
くぅー触りたくないー!!
「……苦肉の策だ……！」
凍雪をゆっくり抜き取ると核にそっと沿わせると核の鼓動はピタリと止まり、肉の表面に霜が降りる。
核が完全に停止したことを確認したリムルさんはヒョイと核を取り除くとパクり。
「良くあんなゲテモノ喰えますね」
その数分後。
無事に核の摘出に成功したフォビオはミリムの攻撃によるダメージは残っていたが意識を取り戻した。
と共に自分の置かれている状況を直ぐ様理解したのだろう、リムルさんに向かい深く土下座をし謝罪した。
「スマン！……いやスミマセンでした！今回の一件は全て俺の一存によるものだ！罰するのは俺だけにしてくれ！カリオン様は関係ないんだ!!なんとか俺の命で許して欲しい……！お願いだ……!!」
いやいや、許す許さないの問題じゃないだろう。
肝は何故こうなったか、だ。
「貴方は何故カリュブディスの封印場所を知っていたのですか？あれは我ら森妖精（ドライアド）しか知り得ぬ場所、偶然見つけたとは言わせません」
トレイニーさんがそう問い詰めればフォビオはぽつぽつと語り始めた。
カリュブディスの封印場所を教えてくれたのは二人組の仮面の道

化であったと、そしてそれは泣いた仮面と怒った仮面の二人組。
はて？そう言えばオークロードの一件でも似たような話が出ていたような。
「中庸道化連だ。奴らは何でも屋だと言っていた」
ゲルドの話でオークロードの一件、ゲルミュットと結託していた道化はフットマンであり、その裏でカビルにも接触していた道化、ラプラスとなのる者も現れ。
さらにはミリムの話では本当の黒幕は魔王クレイマンでは無いかという話も出てきて。もうしっちゃかめっちゃか。
「……あー、もう頭こんがらがってきた！とりあえず今日はお開きにしよう！折角皆いるんだし！勝利の祝杯でも上げよう！リムルさんいいだろ!?」
「うーん、そうだなー。みんな頑張ってくれたし、援軍を頼んだガゼル王も来るだろうしな。来てもう終わったよーなんて言おうものならどうなることやら。よしっ！今日は宴会だ！」
「そこのフォビオも来るだろ？」
と俺が声を掛ければ、何いってんだこいつみたいな顔されたんだが酷くね？
「はっ!?俺は許されないだろう!!」
「だってお前騙されたんだろ？こっちの被害は無いしリムルさんも気にしてないでしょ？」
「まぁな、寧ろフォビオも被害者みたいなもんだし。ミリムもいいよな？」
「うむ！一発殴りたかったが我慢してやろう！カリオンもそれで良いだろう？」
……ん？カリオン？
すると、ミリムが顔を向けた方から歩んでくる人影。
「やはり気づいていたか。よう、そいつを殺さずに助けてくれたこと礼を言うぜ」
大柄で金髪、筋骨隆々。
この世界の男はイケメンかマッチョしかおらんのか!?

なんともワイルド系イケメンである男がユーラザニアを治める魔王カリオンらしい。
「魔王カリオンが出向いてくれるとはな。俺はリムル☒テンペスト、この森の魔物達で作ったテンペストの盟主だ」
「フッたかだかスライムが国を興すとは……」
とカリオンは言葉を濁すとリムルさんをそして何故か俺を凝視する。
「お前ら豚頭帝(オークロード)を喰ったな？」
「え、俺は喰ってないけど……リムルさんはそりゃもう爆食でしたけど、でも仕方ないじゃないか。じゃないとこっちが死ぬところだったんだから」
「お前……黙ってろよ。馬鹿が露見するぞ……？」
「くッ……ふはははは！面白い奴だ！ミリムが気に入るわけだ！改めて悪かったな部下が暴走したようで。俺の責任だ、ここは俺の不始末で一つ許して欲しい。今回の件は借り一つにしておく、何かあれば俺様を頼ってくれて良い」
おー、意外。
魔王ってもっとぶっ飛んでる奴なのかと思いきや、義理堅いんだな！
しかもナチュラルに俺様って似合ってるのがまた。
そしてリムルさんは貸しをその場で使い、カリオンは貸しを返すこととなった。
それはユーラザニア国とテンペスト国間での不可侵協定。
と、これで一段落かと思いきや。
突如激しい打撃音が響いたかと思うと先程まで土下座していた場所にフォビオの姿は無く、カリオンの足元その数メートル先でピクピクと痙攣をしていた。
「めっちゃ体育会系やん……！てか待って待って！」
血だらけのフォビオを肩に担ぎ、颯爽と帰ろうとするカリオンの手を俺は掴んだ。
「あ？何だ？まだ俺様に何か用があんのか？霜男」

「あぁ、そっか自己紹介がまだだった。俺はヨクル＝ライフよろしく。それでこれから宴会なんだ。不可侵協定を結んだなら、問題ないだろ？一緒に親睦を深めよう！」
一人より二人、二人より沢山。
宴会は人数が居れば居るだけ楽しいものだ。
それにテンペスト国には物珍しい物が沢山あるはず、此方に興味を持たせて貿易関係に持ち込めれば更に安泰と言うものだろう。
「ぶっ……ふはははは!!貴様、ヨクルと言ったか、面白い奴だ！そうか、そうか親睦か仲良くはするべきだよな？クククッ……！」
「おうよ！お近づきの印にはい！これ！」
懐から取り出したるはいつものアレ！
「……？何だこれは……？」
「あれー？魔王様知らないの？これはアイスキャンディーだ！めっちゃ旨いんだからなっ！」
俺から受け取ったアイスキャンディーを訝しげに見た後、男は度胸と言わんばかりに噛み砕く。
「！……ふむ、なかなかどうして……旨いものよ」
「あっ！ズルいのだ！ズルいのだ!!私にも欲しいのだ!!」
「ほれ！ミリムは大活躍だったから大サービスだ！持ってけ泥棒!!」
アイスの大盤振る舞いをした後に皆で仲良く宴会に向かったのだった。
これが騒動の結末。
俺は目の前の器に注がれた果実酒をチビチビ呑みながら思う。
俺は何をするために転生したのだろうか……と。
死にたくなかった。それもあるだろう、だが実際第二の人生を経て俺はどうしたいのか……それが分からなくなってきた。
リムルさんには明確な目的がある。その第一として魔物の国、テンペスト国を建国した。
なら俺は……？
とまで考えていた所で俺の意識は現実に戻された。後頭部の激しい痛みでた。

「いってぇ!?何すんだよ！カリオン!!」
「わはは！俺様誘っておいて一人で呑むなんざ許せん！酌をしろ！ヨクル」
絡み酒かよ。
未だジンジン痛む頭を擦りながら、並々と果実酒を注ぐ。と共に一気に呑み干すカリオン。
そして、再び俺の前へ器を突きつける。
その顔はニタリと挑発的な笑みを浮かべて。
ならば乗ってやらねばなるまいて！
俺も器に入っていた果実酒を一気に呑み干すとカリオン並びに俺の器へ並々と酒を注ぐ。
「「乾杯！」」
ゴクゴクッ……プハァ！
「なかなかやるじゃねぇかヨクル」
「へへっ……まだまだこんなもんじゃないわい！」
２杯、３杯、４杯、５杯。
次々と空になって行く酒樽に周りのテンションも爆上がり。
呑めや、呑めやの掛け声を受け胃に酒を流し込んでいた俺だったが、遂に限界を迎えた。
「……う……もう……げん……かい……」
俺はカリオンにもたれ掛かるようにしてギブアップ、勝者はカリオンとなった。
皆の歓声が頭に響く。
「流石カリオン様！ヨクルなど敵ではありません!!」
とフォビオ。
「ヨクルさん！あんたはこんなもんじゃねぇだろ!!」
とヨウム。
お前らいつの間に仲良くなったんだよ……。
こうして宴会は大成功で終わった。
カリオンも満足したようで、果実酒並びに俺の特性アイスのレシピを欲しがっていたそうな。

「ヨクル、宴会への招待感謝する。この街はいい、魔王による圧政も無く皆が生き生きと人生を謳歌している。その様は実に気持ちの良いものよ」
俺はカリオンに連れられ夜風を浴びていたら、そんな事を言い出すカリオン。
なんだ急にと思いながらも、俺は思ったままを口に出す。
「……当然だ……リムルさんが盟主なんだからな……うぇ……」
「ふっ……そうだな。リムルにヨクル、その名覚えておこう」
「ケラケラ……俺は覚えられる程の者じゃねぇさ……」
俺は酔いに負けてそのまま寝てしまった。
「ククククッ……俺様の肩で寝るような胆力を持つお前は大した事あると思うけどなぁ」
そう言い笑っていたカリオンの言葉は俺には届かなかった。
後日、滅茶苦茶ネタにされ弄られたのは言うまでも無いだろう。

２２話《ユーラザニアの使節団》

テンペスト国、中央都市リムル。
現在、破壊された街道の復旧に汗水垂らしていた。
と、言うのも皆さん御存じカリュブディスとの戦闘で怪我人こそ居なかったが街への損害は少なくは無かったからだ。
ゲルドの指示の元、流石職人と言わざる追えないスゴ技でひび割れ粉々になっていた筈のレンガを次々と治して行くという作業に終われていた。
あ、そうそう。そういえばヨウム一団も国に帰ったんだよ、ちなんと英雄譚のシナリオも考えからな。最初こそ小汚ない荒くれ者って感じだったヨウム達だったが、別れ際の姿は英雄に相応しい顔立ちだったと思うぞ。
後はミリムか。
ミリムも帰ったよ、やっとな。
なにやら仕事があるらしい。もしやこのまま永住するのかとも思ったが要らぬ心配だったようだ。
それから数日後。
ユーラザニアとの使節団交流の知らせが届いた。
使節団に任命されたのは幹部候補のホブゴブリンが数名、纏め役のリグル。そして団長にはベニマルが選ばれた。
他国への交流。
カリオンとは既に宴会を通じて仲を深めたつもりだが、国王と国の雰囲気とは別物だろう。
それに良い点はどんどん取り入れ互いに発展していこう、おー！という意味合いも多分に含まれており、極め付けは今後付き合っていけるのか。
我慢をしながらの関係とはいつか崩壊すると決まっているからな。
「任せたぞ。ベニマル」
「ええ、この目でユーラザニアには信頼に足るのか見極めて来ます」
「おおー、かっこいいじゃん。お土産もよろしくー！」

「たくっ……遊びに行くんじゃ無いんだぞ……！」
「ええー、なんかリムルさんと対応ちがくね？塩対応すぎじゃね？」
「俺は敬う人物を分けてるだけだ」
「ストレートにグサッとくるんだけど……」
とそんなやり取りをしつつ。
ベニマル達はユーラザニアへと出発した。
「……じゃあ、こっちも歓迎の準備……？」
「そうだな。彼方に失礼の無いよう此方も礼を尽くさないとな」
テンペスト国としてユーラザニアの使節団を迎える準備に取りかかった。
先ずは迎賓館での持て成し。
折角来て貰うのだからテンペスト国でしか味わえないような料理や酒を楽しんで貰いたい。
後は街の清掃、あ、そうそう。
俺ねベスターっての初めてここであったんだよね。聞いた話によるとヴェルドラの洞窟でポーション作成してんでしょ？知らんかった。
てか、知らなかったの俺だけ？
ていう、初の発見もありつつ。
準備は着々と進んでいた。
すると、なにやら。
街の外から見知った魔素を感知した俺、何だ何だと街道まで出てみれば。
「おりょ？ヨウム君じゃないか、どったの？お早い再開となったね！」
「よぉヨクルさん！近くを通りかかったもんで、挨拶にな！」
「おお、そうか、そうか。悪いな今ちょっとばかしバタバタしててさ。クロウ！ヨウムが来たことリムルさんには伝えてきて！」
俺が呼び掛けると何処からともなく雷と共に現れたクロウは言伝てを頼むと直ぐ様消えた。
「悪いね、ゆっくりするといいよ。迎賓館はわかるよな？そこに行っててくれ、多分リムルさんも居るから」

じゃっ!!
片手を上げヨウムに伝えると俺は次の場所へと急いだ。
俺の仕事と言うのは氷像の作成だ。
ユーラザニアは獣の国だろ、だから動物の氷像を飾ってるわけさ。
その日の夜には久々にヨウムと稽古したよ。
結構鈍ってるかと思いきや、稽古は欠かさなかったらしい。関心関心、まぁ一撃も当たらなかったがな。
まぁ、そんなこんなで慌ただしく準備をしていた訳だが。ユーラザニアの使節団来訪まで本当にあっという間だった。
使節団来訪、当日。
馬の馬車ならぬ、虎の馬車で来訪した使節団を俺達は迎えた。
迎えたのだが。
カリオンの三獣士の物腰柔らかそうな蛇の美女のアルビス。
そしてその次に出てきたのがスフィア。
このスフィアが曲者だった。
開口一番スライム風情が盟主だとやら傍に控えていたヨウム達を見て矮小で小賢しく卑怯と罵詈雑言の嵐。
それには俺も少しカチンと来た。
「おいおい、このヨウムさんはな!!オークロード討伐の立役者、英雄様だぞ!?あまり人間を嘗めるなよスフィアとやら。奢り、慢心した魔物を討伐するのは何時だって人間さ!それになーヨウムは俺の弟子だ!!弟子を愚弄するのは師匠である俺が許さん、即ちぶち殺すぞテメェってこった!!」
「……ヨクルさん……!」
「お、おい。ヨクル?分かってるか?」
ええ、わかってるとも。
「ぶち殺せって事ですよね?勿論!」
「わかってねぇよ!?全然わかってねぇから!!」
カリオンには悪いけど。
臣下を一人失わせてしまうな……はは、これじゃあミリムを笑えねぇや、もし国際問題になってしまったら俺が責任を取ろう。

ヨウムはヨウムで侮辱された屈辱を返してやるらしく。
グルーシスという獣人と戦い力を示すようだな、軽く見たところグルーシスとやらはヨウムで勝てるか勝てないか半々の丁度いい相手みたいだな。
……だが、負けようものなら次の稽古は5割増し決定ですな。
そう内心呟けば、なにやら第六感で感じ取ったのかヨウムは此方を恐る恐る振り返って顔を青くしていたので俺なりの激励をくれてやろう。
そうすれば贈る言葉はやはりこれに限る。
ぶ・ち・こ・ろ・せ
「……サーイエッサー……」
「……お前も苦労してるな……」
何々これから戦う相手とシンパシー感じてんだよ、全く。
ヨウムへの激励も終わったことだし、俺は俺の相手に向き直る。
コオオオオ……!!
魔素が周囲の水分を凍らせ白い煙となり地面に注ぐ。
「……さてと、殺られる準備はいいかな？スフィアとやら……俺の氷は死ぬほど冷てぇぞ？」
「面白い、スライムの配下がどの程度か俺が確かめてくれる！」
俺は両手に魔素を凝縮、スフィアが飛び上がり俺に向かってくるのを受け止めた。
単純な腕力では俺は負けるだろう、なら殺ることは一つ。
「《動くな》」
「!?……なにっ!?……かはっ……!?」
『呪詛』による拘束からの『絶氷者（ヴィネア）』で触れた両腕の凍結。
プラス凍結で奪った腕力を上乗せした腹パンを見舞う。
勿論此方の『絶氷者（ヴィネア）』での凍結を与える。腹部への打撃、凍結による体温低下で吐血と共に白い息が吐き出され、そのまま後方に吹き飛ぶスフィア。だが逃がさない。
氷技工で造形した茨で両足を拘束、徐々に体力を奪い、蒼白し低体温で震える顔を見ながら拳を構える。

カタカタ奥歯を震わせているのは寒さからか恐怖からか。それは分からないが……終わりだな。
拳に特大の魔素を練り込んだ氷の渦をスフィアに放つ。
だが、それはスフィアの前に割り込んだリムルさんの『暴食者（グラトニー）』に喰われ跡形もなく消失した。
「ヨクル……やりすぎた……！」
「……え……だってリムルさんぶち殺せって……」
「言ってねぇよ!!何をどうやったら脳内変換でそうなるんだよ??!!」
早い話が力試しという奴だったらしい。
わざと此方を焚き付けるような事を言い、戦闘に持ち込み武力を示せ、そう言うことだ。
ならば俺はまんまと嵌められた訳だ。
「はぁ……俺マジで切れて馬鹿みたいじゃん……スフィアさんも悪かったよ、寒かったろ？今暖かい飲み物持ってくるから」
「い……や、あんたが……ヨクルか……流石カリオン様が認めた奴だよ……完敗……だ」
スフィアさんに纏わりつく氷に触れ『絶氷者（ヴィネア）』による凍結を解除しながらそっと布を肩から掛けて身体を温める。
その日の夜には迎賓館で歓迎の催し物が行われた。
リムルさんはテンペスト国自慢の果実酒を振る舞い。
案の定果実酒は好評であった。
がテンペスト国の果実酒の生産、その過程で果実の纏まった収穫に難色を示したら、ユーラザニアの果実を此方に流してくれると言う話じゃないか。
しかし、話はそれで終らないリターンがあるからこその貿易なのである。
事実ユーラザニアは生産された酒の輸出を求めてきた。
まぁそこはリムルさんも触れる程度にし深くは踏み込まない、餅屋は餅屋とよく言うだろう。
本題はテンペスト国の貿易大臣に任せ、歓迎の席を離れたのだが。
「……大丈夫か？昼間はかなり熱くなってた、お前にしては珍しい

じゃないか」
　まさかこっちに来るとは思わなかった。
「……そうですね。俺らしくない、でもどうしても許せなかったんですよねー。ヨウムのこともリムルさんを馬鹿にされたことも、今日来た奴に何がわかんだって……恥ずかしい話、俺はこの街に携わる皆を家族みたいに思ってるんでしょうね。ヨウムだって俺の弟子だし、柄じゃないけど弟子は可愛いもんでしょ？」
　ケラケラ笑って茶化しながら冗談っぽく話してみるけど、本当に許せなかった。
「……うん、わかるよ。俺も同じ考えだからな……」
「……リムルさん……」
「……しかし、あれはやりすぎだ……！」
　そういいリムルさんからのチョップを甘んじて受けた俺は、苦笑で返すのだ。

23話《盟主代理って何ですか？》

使節団がテンペスト国を出立して数日が立つ。

「今度はお前がユーラザニアに来い！……あの……あっ案内してやるっ!!」

とスフィアさんからの別れの挨拶を受けたのは記憶に新しい。何故か頬が赤かったようだが、昼間から酒を呑んでいたのだろうか？

そう呟いた後にめっちゃ憐れみの目で見られたんだが、解せぬ。

因みに帰ったのはアルビスさんとスフィアさんだけだぞ。

獣人の若者らは勉強の為にテンペスト国に残った。

ユーラザニアには無い建築、食に工芸品、見るもの全てが物珍しいのだろう、視界に入った端から目を輝かせ尻尾をフリフリ。

うん、可愛い。

と獣人達を案内しながらごくごく和やかな日常を過ごしていた俺。

ユーラザニアの使節団が戻ると同時にベニマル達もユーラザニアから帰ってきて。益々活気が溢れる街となりつつある中央都市リムル。

土産話によるとベニマルはユーラザニア滞在中にカリオンに喧嘩を売ったらしい！なんともベニマルらしいと言うか何と言うか。

まぁ笑われてあしらわれたらしいがな。

カリユブディスに壊された街道も着々と修復が進んでいるし。

先日リムルさんはドワルゴンでの盟主として宣誓と演説を行ったらしい、俺は留守番だったが。お供していたシュナやシオンの話だと凛々しいお姿だったよう。

演説した当人はガゼル王からのダメ出しの嵐で少し落ち込んでいたが、何はともあれ。

こうして、ドワルゴンとの国交も順調。ユーラザニアとの関係も良好。さぁ、いよいよ国として流通や貿易をガンガン回し、益々の発展をさせていくのかと思いきや。

「俺、暫くここ留守にするから。よろしくな盟主代理！」

「……はい……？」

突然の盟主代理に任命される羽目になった俺。
いやいや、なんで?急にこれから軌道に乗って街を発展させてくんじゃないの!?
そう詰め寄った俺にリムルさんは話してくれた。出掛ける用事というのは同郷の友から託された忘れ形見の生徒を助けに行くと言うもので。
そんな真剣な顔で、深刻そうに言われてしまっては俺は言葉に詰まってしまう、ズルい人だ、ズルくて優しすぎる人だよ。本当に。
「……あー、もう!どうなっても知らないからなっ!!」
「アハハッ!信頼してるぞーヨクル!」
こうして短い間だがテンペスト国及び中央都市リムルを任されるとこになった俺。
はい、盟主です。代理ですがっ何か?
と言うことでヨクルです。
執務室の椅子って座り心地やべー……あー、リムルさんいつもこんな椅子に座ってのかよー。鞣した皮のすべすべ感、降ろした腰を重力のままに受け止めるクッション性。
「…あー、やばー……何と言う脱力感……」
ポカポカした日差しも相まって俺は盟主代理あしからぬ姿でグデーと手足を投げ出しクルクル椅子を回している。
だが、バタンッと強く開け放たれた扉に驚き椅子からずり落ちた。
何だっ!何だっ!
執務机からそろりと出入り口を見れば……。
「ヨクル様!!リムル様から盟主という大役を受けているというのに何とだらしのないお姿!!こんなことではリムル様の名に泥を塗るおつもりですか!!」
ぶちギレ寸前のシュナ、その背後で自身が怒りを買っている訳では無いと言うのに恐怖に顔を強張らせたベニマルの姿。
「……えーと……すまん……」
「すまんではありません!!先ずは服装ですっ!!」
服装?

そんな変だろうか？俺は自身が今、というかこっちでずっと着ている真っ白のTシャツとパンツを眺めるが。
別段、不味い服装だとは思わないんだが……？
しかしシュナはそうは思わなかったのだろう。
俺は威圧的に靴音を立てるシュナによって半ば無理矢理執務室から連行されする事となった。
執務室からの去り際、ヒラヒラと手を降って見送るベニマルに対し俺はニッコリ満面の笑みでこう返してやるのだ。
そっと右手を突きだし中指を立てるのだ。
シュナ腕を引かれ連行された先、外ではまさに首輪を付けられた犬の散歩の様であった。
皆の視線が痛すぎるが腕を振りほどこうにもシュナの腕はまるで岩石のよう、乙女には酷い言いようかもしれんが、ホントにそれな。
だって爪が肌に食い込んでる、てか刺さってる。なんか赤いの流れてるんですが？
あ、気にしない方向なんですね、さいですか。
そうして連れ込まれた先はシュナの服飾工房。
投げ込まれるようにダイナミックに入室した俺はごろごろと転がりうつ伏せで倒れこむ。
すると前方に見えるは男の足？
足にそって視線を上にあげて行くとそこにいたのはドワーフ三兄弟。
ガルム、ドルド、ミルドであった。
「お、こんちは。はじめまして……かな？」
「おおう。面と向かって話すのは初めてかも……しれんな」
ガルムは俺の腕を引き上げ、立ち上がらせると服についた埃を叩いてくれた。
わお、紳士やん。
「にしても……兄ちゃん。顔立ち良くて肌も白くて綺麗なのに、服が……こりゃシュナちゃんが怒るわけだわ」
「えー。そんなに変かなー？」

「変ですとも!!仮にも盟主代理！そんなお姿では訪れた方々に示しがつきません!!今！此処で！貴方の服を製作致します!!」
「……あ、はい……よろしくおねがいします……」
そう面と向かって変って言われるとさ、傷付くよね……。
それなら作って貰えば文句は言われないだろう、どんなものになるか正直言えば少し楽しみになってきた所だ。
先ずは採寸。胸部、腹、腕、肩幅等を計測して行き。
生地選び。仮縫い。試着。手直し等々……。装飾は色の組み合わせは、動きやすさは通気性は保温性は……。
目の前で徐々に組上がっていく衣服に感動を覚えながら同時に手間が掛かるものだなと感心していた。
この街で着られている衣服は主にシュナが製作している。俺のだから凝っていると言うわけでも無いだろうし。これだけの作業量を街全員分行っているのかと思うと脱帽しかあり得ない。
そうして出来上がった衣服に袖を通す。
さらさらとした手触り。肩も回りやすく張るような窮屈さは微塵もない、なのにだらしない感じには見えない。
「うん、良い感じだ」
主に色合いは白と蒼の二色。
白を基本とし襟に蒼のラインが入ったシャツに胸元に光るラインストーンの青い雪の結晶。
黒いパンツ、正面から縦に入る白いライン。
極めつけが長らく締めることが無かった黒いネクタイ、どうやってこんなの作ってんの？
とシュナや三兄弟の勤勉さ手先に器用さに脱帽でございます。にしてもネクタイなんて前世で毎日巻いていたが、久々に締めると何やら気持ちが引き締まるような思いだな。
「ありがとう、大切にするよ」
「えぇ、これこそ盟主様として相応しい服装ですっ！」
「だなっ！兄ちゃん、随分男前になったぞっ！」
「……!!」

そして俺は新たな衣装を手に入れる。
パリッと真新しいシャツを身に纏い、盟主代理としての仕事をしっかり努めようかなと気持ち新たに街へ歩みを進めた。
「では、街の警備を強化します。現在、中央都市リムルにはユーラザニア。ブルムンド。ドワルゴン。それぞれの国家から商人、交易商人、観光客が沢山訪れる。それは良い、街が賑やかなのは良いことだ。それに伴い問題が発生する」
「あの、問題とは……？」
シオンが何が問題なのだろうかと首を傾げながら挙手、気付いてる者は居るだろうが敢えて俺が答えよう。
「外部からの脅威に弱くなったと言う事だ。リムルさんからの約束事で人間との争いを禁じているな、だがそれでは人間から武力で攻撃された際に俺達は大幅に遅れを取ることになる。誰しも受け入れるリムルの街だが、その分悪意のある人間も容易く入れると言うこと……俺達は魔物だ。ヨウムにフューズさん達みたいにすべての人間が俺達を理解してくれるわけではない、俺達魔物は強いが強いからこそ人間達は恐怖し自身の平穏の為に排除を望むかもしれん、目的の為なら知恵を数を頭を手段を選ばないのが人間だ」
「本当はリムルさん不在の時に色々手を加えるのはどうかとも思ったが……しっかりしろと叱咤されたからな……」
こちらを見詰め微笑むシュナに頬を掻きながら困ったように笑うと宣言した。
「中央都市リムルに監視氷像の設置及び関所を設置する」
俺の宣言後、早速取り掛かった。
中央都市リムルに入国する道へ関所を設置、魔力を関知する氷像の設置と交代制での門番。
少しでも不振な動きをすれば氷像が捕縛し解析、記憶を奪い取る。
そして、街の店、屋根、等々に監視カメラ代わりの氷像を設置。その全ての視覚を俺と共有させる。
これで街の全てを監視できる訳だ。
リムルさんが戻る迄は俺が皆を仲間を守る。

勿論訪れた人達も守って見せる。
「……さて、何事もなくやり遂げられますかね……」
しかし、ヨクルの願いとは裏腹に着々と悪意は直ぐそこ迄近づいていたことをこの時のヨクルは知らなかった。
『……お前らは俺が命に変えても護ってやるっ!!!』

２４話《……命をかけて……！》

リムルさんから盟主代理を任命されて数日がたった。
現在、中央都市リムルでは事故、事件はまだ確認されておらず。平和な日々を謳歌していた。
関所での警備も今のところ順調だ、何人か盗賊崩れが不法侵入を試みたが氷像の監視を逃れることは無く。関所の設置は成功だったろう。
あ、それと。
数日前にまたヨウム達が街を訪れている。え？暇なの？と言わざる終えない。
俺が盟主代理だと言ったときのアイツの顔、稽古を厳しくしたのは当然の摂理だろう。
しかも今回は女連れだぞ。ミュウランと名乗る、その女。鼻の下をデレデレと伸ばすヨウムに額を押さえたものだが……。
ミュウランとやら体内に何か混じっていたのを感知した。もっと詳しくと胸に手を当ててしまったのは不可抗力だ。何故叩くんだヨウム。
ミュウランの心臓に纏わりつくように、締め付けるように動く魔素の動き。
胸に手を当てた際、羞恥心よりも恐怖心が顕著に現れた反応と言い。何か事情を抱えているのだろうが……変に刺激して激昂されても迷惑なんで、とりあえず放っておく事にした。
念のためミュウランにはマーキングを付けておく、何かしようものならその心臓は凍り付くであろう。
つまり……そういうことだ。
だが、それ以外は順調そのもの。
最近は盟主として仕事をしていたから、久々に氷菓子屋さんの方に顔を出していた俺、やはり人の流れが活発になったからか物珍しい氷菓子は皆の目を引き大盛況。
「はい！アイスキャンディー三本ねっ！楽しんでっ！」

「うんっ！おにいちゃん、ありがとう！」
アイスキャンディー三本を可愛らしい少女に手渡す、少女は大切に落とさないように手に握るとテトテト走り去って行き。
お母さん、お父さんなのだろう。三人で仲良くアイスキャンディを食べる姿に平穏を感じ胸の内が温かくなって行く。
「……はぁ……全く平穏を楽しめない無粋な輩が来たようだな……シュニィ、クロウ、店番を頼んだぞ。俺はちょっと出てくるからさ」
「はいっ！おまかせをっ！」
「うむっ、任されよ」
二人に店番を任せ俺は関所へ向かった。
氷像の視覚を共有させ、氷像が現在見ている映像が流れる。
そこには三人の男女。
体格の良い男と糸目の優男、それと高飛車な生意気そうな女。
感知の情報では常人よりも魔素が高く、身なりを鑑みるに民間人では無さそうであり、顔立ちは古くから見覚えのある日経の顔立ちだった。
関所で門番をしているゴブタ達の元へと急ぐ。
『痴漢っ!!この魔物痴漢しましたっ!!』
ねっとりと肌を舐めるように粘着質な魔素を孕んだ言霊は人々の脳に干渉しその言葉が真実であるかのように誤認する。
女がニタリと笑った、恐らくこの後に起こるであろう罵倒や批難を想像し嫌味たらしく笑ったのであろうが、そうは行かんね。
「ちょい待ち。こいつの好みはシオンみたいなナイスバディだ。お前みたいなちんちくりんに興味はねぇんだよ。変な誤解は止めて貰おうか？え？小娘……！」
騒ぎが広がる前に言葉に含ませた魔素を停止させながら背後に……あれ、あのー……ゴブタの友達を庇い避難するように指示する。
ゴブタ達は未だ人だかりになっている民間人を避難させ遠ざけていると。
解離者（カワリモノ）から批難の声が脳内に響く。
『……名前覚えろよ……』

しかたねぇだろ！俺にはリムルさんみたいに完全記憶出来ないんだから！
『いや、あれは大賢者が記録してんだろ？』
え？そなの？ならお前が覚えろよ!!
『……メンドクセェ……』
脳内で自身と喧嘩していたら、俺が小馬鹿にした小娘が再び魔素を高め始めたのを感じ。
視線を鋭くする。
恐らく最近の小娘の言う事など大体予想が出来るであろう、言った言葉を実現する能力ならば。
『死…』
『黙れ』
「……っ!?……!!!」
「おい、どうしたんだ？さっさと殺せよ？なぁ！」
小娘は声が出せないことに驚愕しパクパクと口を動かすが溢れるのは空気の漏れる音のみ。
漸く仲間の異変に気付いた男達は小娘の肩を揺するが、小娘はそれどころでは無いだろう。
「さてさて、君らは何処の国からの刺客かな？正直に話して貰えると助かるんだけどね」
魔素を高が高まり足元のタイルがパキパキ凍り付いて行く、異様な光景に三人の刺客は何を相手にしているのか気付いたのか。
ジリジリと後退して行くが逃がすわけがない。
先ずは小娘を潰す。
絶氷者（ヴィネア）を発動させ、足元の霜を真っ直ぐ小娘へ伸ばし足を凍らせる。
仲間は随分と薄情なのだな。小娘が凍り、恐らく能力も使えないと判断したのか小娘の肩を押し見捨てた。
「絶氷者（ヴィネア）、凍らせる奪え」
小娘の身体を氷が覆い尽くし、その息を止めさせた。
最後の小娘の顔は可哀想なものだったよ、嘗ての俺のよう寒さに震

え声も出せずに死んだのだから。
だが、後悔はしない。
殺らねば殺られるのだから、俺の仲間は死なせない。
『……狂言師(マドワスモノ)を奪ったぜ。呪詛と組み合わせるか？』
おう、そうしてくれ。
『うし、狂言師(マドワスモノ)と呪詛を結合。新たなスキル。呪う笛吹(ハーメルン)きを獲得』
《呪う笛吹(ハーメルン)き》
・集団催眠：魔素に触れた対象の脳を操作し傀儡にする
・魔笛：呪いの笛を聞いた者を殺す、対象の選択は出来ない。
「え、使えな。仲間殺したら意味ねぇじゃん……まぁ集団催眠は使えるかな」
『まぁ。そのうち対象の選択も出来るようになんじゃね？』
「てきとー……えーと、さてさて……」
使えない能力はこの際置いておこう。
それよりも今は眼前の敵だな。
未だ残っている二人の男。
しかし、男達は逃げるどころかニヒルに笑っていた。
その理由を直ぐ様、理解することに。
街の至るところで大規模な爆発、悲鳴が響く。
焦って氷像と視覚を共有すると至るところに鎧を着こんだ兵士の数々。
炎、風、雷、土。
あらゆる魔法が飛び交い魔物の血が流れる。
「くそっ!!こいつらは囮だったかっ!!」
氷像を操作し兵士の対処をしようと魔素を操作するが、突如魔素が霧散し氷像の動きが止まる。
『おいっ！結界が張られたぞっ!!!聖魔破邪の結界だ！気を付けろっ!!しかも他に二種類も張られてやがる、一つはシュナの嬢ちゃんだが……あと一つは……』
「……いや、それよりも急務は皆の安全だ!!!」
皆の元へと急ぐ、しかしそれは背後からの攻撃に無抵抗になると言

うこと。
二人の刺客は今もなお健在、それよりも優先することがある。
剣が飛んでこようと、背中に強烈な打撃を受け内蔵が破裂しようと、脈動回復を全力で掛け普段の半分も力が出ていないが無いよりましだ!!
「絶氷者(ヴィネア)!!!」
背後の二人を拘束、皆の守護の為に氷の砦を結界の性で全然魔素が安定せず構築に時間がかかるが何とか操る。
それでも足りない、足りない!!
力がっ……仲間を守る為の力が!!!
結界の効力故か段々と弛緩して行く手足と朧気に霞む魔素。
だが、例え力が足らなくても。ここは守る!絶対に!!
『……スキルを獲得したぜ。……博愛者(アイアルモノ)』
《博愛者(アイアルモノ)》
・自己犠牲：自身の命あるかぎり仲間を守護する。ダメージを全て肩代わりし仲間は怪我を負わない。
「ははっ……お前(仲間)らは俺が命に変えても護ってやる!!!博愛者(アイアルモノ)!!!」
『麻痺耐性獲得。火傷耐性獲得。物理耐性獲得。斬劇耐性獲得。火傷耐性獲得。気絶耐性獲得。毒耐性獲得。眠り耐性獲得。混乱耐性獲得。耐性を結合、状態異常耐性獲得。精神汚染耐性獲得。状態異常無効獲得。暴風耐性獲得。水流耐性獲得。全属性耐性獲得。即死耐性獲得。即死無効獲得。』
脳内に走る世界の声の連続と肉体に走る恐らく激痛であろうダメージの数々。
内蔵は潰れ、喀血で口から溢れ鉄の味が口内に満たされる。四肢は折れ肉が骨に突き刺さり抉れ砕ける。
だが痛みは無い、痛覚無効で感じないから……だけど。
皆はそうじゃない。きっと痛かったろう、辛かったろう、涙を流したのだろう。
俺のスキルが発動する前に死んでしまった仲間も居たかもしれない、俺の力不足が招いた結果だ。

だから、俺は最後に足掻いて、みようと思う。
今、俺は皆のダメージを肩代わりし何度も死ぬであろう攻撃を受けている、脈動回復でなんとか命を繋いでいる状態故に即死無効を獲得した……だから使える能力が出来た……。
「かはは……折角シュナに作って貰ったのに……台無しじゃ……ねぇかよ……呪い笛吹き（ハーメルン）。魔笛」
眼前で暴れる二人を掠れ始めた視界で収め、笑った。
「ヘラヘラ……人を殺すなら殺される覚悟はあるんだろ？一緒に死んでくれや……カハッ…ゴフッ……」
なんか二人が騒いでいたが俺にはもう何も聞こえてはいない耳なんてとっくの昔にイカれたさ。
掌に現れた黒いラッパを震える腕で口元に当てるとそっと息を吹き込んだ。
プォォォォ……!!!
死の音色が街に木霊した。
その音色は敵の命を枯らし殺して行く。
しかしその光景を目の前で生き絶える兵士を眼前にしながらも、魔物や観光客の身には何も起こらない。その理由は簡単に想像がついたであろう。
リムルと共に街を護っていた守護者だった人物。
ふざけているようで何処か憎めない、飄々としているが熱さを秘めた人。
ヨクルが行っているのだろうと。
兵士が倒れている光景に安堵しながらも何処か胸騒ぎが止まらない。
どうしてなのか……。
ラッパの音色が収まると同時に周りを囲っていた氷の砦が崩れ落ちた。
「……え？……どうして……？」
誰がか呟いた。
何故？今崩れたのか？

ヨクルが解除したのなら何故、目の前にあの人は居ないのか。
クロウとシュニィは主の元へと駆け出した。
大丈夫だ、あの人は死んでしまう訳がない。
あの人は問題ないと、少し出てくると言っていたのだ。
大丈夫……大丈夫……大丈夫!!
自らに言い聞かせるように何度も何度も唱える二人は血濡れの大地に沈む白い主人を……。
ヨクルの死体がそこにはあった。
「……あ……あぁ……」
あああああああああああぁ!!!!
ヨクルの死体を抱き締め、冷たくなっていく体温に掌から溢れる命の雫。
クロウは主を抱き締め天に吠えた……。
シュニィはヨクルにすがり涙を流す……。
ヨクル☒ライフ……死亡。
並び人間の子供を庇いシオン……死亡。
その他、数人が致命傷を受け出血死。
被害が最小に抑えられたのは一重にヨクルによる功績が大きいであろう、しかし被害は零であったわけではないのだ。
皆は冷たくなる仲間に死を実感し悔やみながらも戦いは幕を閉じた。
魔物側も犠牲を負いながらもヨクルの魔笛により人間側にも凡そ1万人の兵士を失う大打撃を与え撤退を余儀なくされた。
『……告……ヨクル☒ライフ……魔王への進化が可能となりました。……実行しますか?』
「……」
『実行しますか?·実行しますか?·実行しますか?』
「……」
『……』

２４．５話《仲間の死》

「嘘……だろ……ヨクルっ!!」

そこには自身が信頼し盟主代理を任命した友が横たわっていた、腕は骨折し肉を突き破り露出した骨、腹は凹み内蔵もミキサーに掛けたようにグシャグシャ。

綺麗であった白い肌は血で汚れ痣も見受けられる。

友の亡骸。

そしてこれまでの時間を共にした仲間達の死はリムルと言う人物の根幹を揺るがし亀裂を入れる。

何故こうなった。

魔物の国が原因か。魔物の国など認められぬと大国からの圧力か。

何故、何故、何故、何故っ!!

リムルが課した人間とは争うな。その言い付けを守った結果、ヨクルは一人で一万もの兵士と刺し違える事となった。

「あぁ悪いのは全部俺じゃないか……」

過去に引き摺られ、今を見ようとしてなかった。

人間とは手を取り合えると信じてやまなかった。

そのツケがやってきただけじゃないか。

力あるものを。理解が及ばないものを。人間は悉くを淘汰してきた、その歴史を知っていた筈だったのに。

だから、ヨクルは関所を設け警備を強めた。街に散らばる氷の欠片がアイツの努力を物語っているだろうが……。

「クソッ……」

しかし、いくら過去を後悔しようがもう遅い。

死した肉体が甦りリムルに微笑みかけたりなどしないのだから。

だが仇を打つにしろ、泣き寝入りするにしても……ヨクルは手懸かりを残してくれていた。

ヨクルの魔素残子、それは新たに街に来たであろう女から発されており、恐らく今回の一件に関わっている容疑者。

それを確かめないことには、このどうしようもない感情を抑え込めろと言う方が無理だろう。
「ヨウム、その女をこっちに寄越せ」
ヨクルの魔素の残子を辿った先、胸の中心から氷が広がり震えるミュウラン。
そしてミュウランを庇うように立ちはだかるヨウム。
「リムルさんっ！待ってくれ!!」
「黙れ。俺は今戯れ言に付き合ってやれる程、余裕は無いんだ。それにヨウム、こいつはお前の師匠の仇からもしれないだぞっ！」
濃く濃密なリムルの魔素に当てられたヨウムとミュウランは血の気が失せ青い顔を浮かべるがそれでも引かない。
こいつは悪くないんだと擁護するヨウムにリムルは操糸を操作しヨウムを椅子に拘束する。
「お前は黙っていろ……大人しくしてれば危害は加えない……さて、お前が街に結界を張った本人だな……」
「……ッ……」
リムルの問いは返答を必要としていない。確信を持ってお前だと指を指されている。
そう理解したミュウランは下唇を噛み覚悟を決めた。
どっちにしろ失敗した自分はアイツに殺されるのは目に見えてる、なら少しでも愛した人と一緒に。
「ヨウム。私貴方を愛していたみたい……ごめんなさい……幸せになってね……」
ミュウランは涙を目尻に浮かべながら微笑み愛した人へさよならを告げた。と共にリムルの腕がミュウランの胸を貫く。
パキンッ……!!
胸の氷が宙を舞いゆっくりと後ろに倒れて行くミュウラン、ヨウムはその光景を歯を食い縛りながら見ているしか出来ない。
「うあぁぁぁあっ!!!!リムルッ!!!!許さねぇ!!」
「……はぁ……俺だって本当はこんなことしたくねぇよ。でもこうでもしないとまともに話出来ないからな……」

何を意味のわからないことを。と言い掛けた言葉は起き上がった人物を見た途端に息が詰まり声に成らなかった。
「……あれ、私……何で……？」
何故か胸を貫かれ絶命した筈のミュウランが起き上がり自身も不思議そうに貫かれた胸に触れている姿があったからだ。
「さて、お前のバックには誰がいる？嘘は許さん、真実のみ話せ。さもなくば……わかるよな？」
「ええ……心得ています。私の心臓を手中にし指示を下していたのは魔王、クレイマンです……」
その後ミュウランは全てを語った。
オークロードの一件、カリュブディスの一件、そして今回の一件。その全てに魔王クレイマンは関わっていたのだ。
「……許せると思うか……？」
仲間を殺され、同郷であったヨクルも死んだ。
これでまだ他種族と揉める訳にはいかないと自分を殺し納得し怒りを呑み込んで許すと言えるものか？
「……断じて否だっ!!ぶち殺してやるよ魔王クレイマン……!」
その瞬間。
中央都市リムルの街に重厚な魔素が重くのし掛かった。だが、それを苦に思う者は誰一人として居なかった。
これはリムルの怒り、悲しみ、不甲斐なさ、様々な感情を孕んだもの。
こんなに我々は思っていただけている。
そう感じさせる魔素に皆は感謝し決意を固める。
そう、これは開戦の狼煙だ。
同時刻。
中央都市リムルが襲撃された件を知った三人組。
ヨクルとも街の皆とも知らない中ではない、恐らくは心配で訪れたのだろう。
しかし、どうにしてもタイミングが悪い。

ガバル、ギド、エレン。
人間によってヨクルをシオンを仲間達を殺害されたばかり、傷も癒えないままに街に訪れた人間に視線が刺さる。
それでも、エレンの歩みは止まらない。
確かな意識を持ち視線や罵倒の中を進んで行く。その後ろに隠れるように怯えた様子で着いてくるガバルとギドに呆れながら。
エレンはリムルの執務室に通され。
漸くリムルと対面したエレンは絶句する。
あんなに優しくかっこよかったリムルさん。だが、今の姿を見てその面影は微塵も感じない。
しかし、それでも話さなければならない。
「リムルさん。皆さんをまだ救えるかもしれません……！」
ざわっ……!!!
執務室に重苦しくのし掛かる重圧。雰囲気の話でも空気が重いわけでも無い。
言葉通り、リムルさんの怒気と共に放たれた魔素が空気を震わせ、息が止まる。
「……どういうことだ？冷やかしなら……わかってるだろうな……？」
「……古いお伽噺で、こんな話があるんです……」
エレンはポツポツと話し出す。
かつて友の竜を蘇らせた少女の話を……。
「なるほどな……こりゃ魔王になるしか無いようだな……」
こうして、リムルさんの一団はファルムス王国から進軍してきていた人間達を千切っては投げ、肉をネジ切っては炭にして、沢山の人間の命を捧げ。
覚醒魔王となったリムル。
皆を蘇らせたらしい……。
「……って……嬉しいけど。リムルさん怖っ……」
後に話を聞いた俺はそう呟くしか出来んかった。

確かに俺が死んだ事でそこまで思ってくれるとは嬉しい限りですけど、それで。ん？覚醒魔王とやらになってしまったリムルさんに何か申し訳無い。

しかし、俺の脳内にも何か、聞こえるんだよね。

《魔王の進化を行いますか？行いますか？》

とりあえず、次回に続くって事で!!!

２５話《覚醒魔王なりました》

フワフワと空を漂っていた俺は心地の良い感覚に脱力の境地へと至っていた。このまま空の碧に溶けて消えていくんだろうか、なんて頭がお花畑的な思考に陥り、アホみたいな事を考えていたんだが。突如猛烈な吸引力に引っ張られ、地上に広がる真っ黒なブラックホールに吸い込まれ。

地上に引き摺り下ろされたと同時に背中から走る強烈な痛みに目を覚ます。

空の眩い太陽に目を細めると見知った顔が俺の顔を至近距離で凝視していたことに気付いた。

「おはます。……リムルさん」

「……蘇生を確認、無事で何よりです。ヨクル＝ライフ」

ん？なんか変？

口調が何か機械的？それじゃあまるで……。

「大賢者先生みたいな口調して、どうしたんすか？」

「現在の私は大賢者ではありません。知識之王（ラファエル）です」

「……ん？なんて？」

「知識之王（ラファエル）です」

「はぁ……そうっすか……えっとリムルさんは……？」

「リムル＝テンペストの意識は現在、深い眠りの中に居ます。進化の最中と伝えた方が分かりやすいでしょうか？」

ふむ。

要するにリムルさんが進化の真っ最中で行動できないから代わりに大賢者先生改め知識之王（ラファエル）先生が反魂の術？とやらを行っているらしい。

てか、俺が生き返ったのもそれのお陰みたいだ。

状況確認を行っていた俺の後方から微かに聞こえた物音に背後を確認しようと振り返った瞬間に。

「ヨクルさまー！」

「主殿!!」

眼前に広がる逞しい筋肉の塊に俺は押し潰され揉みくちゃにされる。
「……ぐふぅ……くる……じい……」
圧迫された肺は酸素を取り込めず、酸欠に陥りかける。何とか腕を伸ばしてシュニィかクロウなのか分からないがギブギブと身体を叩き伝えようと奮闘する。
しかし、俺の蘇生に感極まった二人には届かず、それはそれで少し嬉しかったりしたが。
そろそろ本当に限界だった俺は視界が暗転し気絶した。
意識の最後に二人の叫びを聞いたが俺は答えることは無かった。
暫くして……。
「ん……んぁ？ここは……何処……？」
深い闇から覚醒した俺は見知らぬ地で目覚めた。
気を失う要因となった二人は勿論、知識之王となっているリムルさんも俺と同じく冷たくなった仲間達も見当たらず。
ただただ殺風景な雪景色が広がっている。
頭上の暗く分厚い雲から深々と降る雪の粒。
とりあえず横になっていても仕方がないと思い、立ち上がり服に付いた雪を叩き落とす。
「さて、どうしたもんか」
「どうするんだ？」
「それを今から考えるんだろうが、お前も考えろよ」
「あぁ、だが考える必要はねぇがな」
何時もの如く俺の解離者（カワリモノ）という名のイマジナリーフレンドと会話をしていた俺だったわけだが。
何か変だ。
何時もより声が響かないな、それに少し後方から声が聞こえるんだけど、何故なのか？
何気なしに声のする方向を見てやれば、そこには俺がいた。
ふむ、俺が立っている……ん？立ってる??
「……お前……まさか？」

「ピンポーン。正解だ、主さん。俺は解離者(カワリモノ)、面と向かって話すのはこれが初めてだな」
まさかの答え。
すると俺が現在居る場所も見当が付く。
「ここは俺の脳内なのか？」
「またまたピンポーン！大正解だぜ!!」
なんでまたこんな事になってるんだ。
そう考えてたのが表情に出ていたのか解離者(カワリモノ)は俺が問いかけるよりも早く答えを口にした。
「主さんは魔王になる気はあるか？」
「……なんだって？悪いな耳が馬鹿になっているようだ、もう一度ゆっくり話してもらってもいいかな？」
「ま・お・うになる気はないかー？」
おうっ……まさかの聞き間違いでは無かった。
てか何で急に？
と思い返した時、そう言えば死ぬ前になんか声が聞こえてきていた気がするような、しないような。
「……まぁ……なってもいいか。リムルさんもなったみたいだし、置いて行かれるのは寂しいし、あいつらにも2度とあんな顔させたくねぇし」
「……そうか、ならやってやろうぜ主さん！」
解離者(カワリモノ)の指示通り俺は目を閉じ深く呼吸を整え魔素を高める。
片手に伝わる確かな体温に解離者(カワリモノ)と手を繋いでいるのだろうという体感。
そして。
急激な眠気と共に俺の意識は暗転した。
《魔王(ハーヴェスト・フェスティバル)への進化を開始します》
「身体は任せておけ」
こうして魔王へと進化することとなった俺。
なんか理由も確かじゃないし、ろくに決意みたいなものも無いけれど何かあいつら(クロウとシュニィ)が泣いている姿は見たくないと思ったんだ。

だから魔王になる。
俺が守れる範囲には限界がある、それは自覚しているだけど俺の手の届く範囲は絶対に守りたいし俺も死なないようにするんだから。
んで、長い眠りから覚めた俺は信じられん者を目にすること。
「……な、な、なんだお前!!」
目を覚まして直ぐに見たのは俺。
そう、俺。瓜二つの俺の姿。
なんか、めっちゃデジャブを感じる出来事にまさかと思いつつ問い掛けた。
お前は誰だと。
「解離者改め双子之王だぜっ!!スキルで実体ＧＥＴだぜ！」
「なぬー!?」
目覚めて直ぐの俺は双子之王に連れられリムルさんの所に案内されていたんだけど。
なんかみんなめっちゃ強くなっててヤバって感じ。
あれだな、適当説明勘弁だけどホントにそんな感じっす。
街ですれ違う人に解析してたけど、なんかユニークスキル持ってる人が沢山居たわけですよ。
「目を覚ましたか、ヨクル。リムル様がお待ちだ」
途中であったベニマルから爽やかな笑顔で先を促されたんだが、解析してみると、やはりベニマルもユニークスキルを持っていて。
双子之王の説明では進化の際にギフトとやらが傘下の魔物に与えられたらしい。
ならあいつらも貰ってたりすんのか？
てかさ……。
「……お前呼びづらいんだよ、長いんだよ名前がよ！なんかスルーしてたけど何でお前実体があんだよ！スキルって説明雑すぎ笑た！」
「今さら!?仕方ねぇだろ！ホントにスキルなんだからよ!!後で詳しく説明してやんよ！今はリムルに挨拶すんのが先だろが！」
「はぁ!?たくっ……とりあえず説明は後でいい。今はそれよりも急務がある！てめぇにアダ名をつけてやる！呼びづらくて敵わん!!」

「……はぁ……お前名付けの重要性まだ理解してねぇのかよ」
うっわ、自分の顔で自分が呆れ返されるなんて思いもしなかったわ!!
「知らんがな。いちいち双子之王（ヘンゼルとグレーテル）って呼んでられっかよ。……そうだな……『アダム』とかどうよ？」
その瞬間に急激に失われた魔素にクラっと立ち眩みした俺だが、その体感で確かに名付け出来ているのだなと確信する。
「……おっとと……うしっじゃあ改めて宜しくなアダム」
「たくよ……おうっ！よろしく！」
とアダムとの親睦を深めリムルの所に向かった俺、しかしながら不本意な事に開口一番言われたことはなんだと思う？
「何でお前まで魔王なってんだよ!!」
「えーー??だってなれるらしいから!?なってた方がいいんじゃねみたいなっ？」
「軽いよ!?フワフワかよ!!」
「いーじゃんか！俺だけ仲間外れかよ!!寂しいじゃんか!!」
「餓鬼か！貴様!!」
なんだい、なんだい。あんな言い方あるものかね、誰が命がけで街を守ったと思ってんだい。
なんてリムルさんも後悔しているであろう事を蒸し返して弄る訳にも行かず、自身の心の中で思い。
少しいじけて唇を尖らせてそっぽを向いたけど。
「……その、あれだ……悪かったな……お前のお陰で街が守れた」
振り返ると真剣な表情で頭を下げたリムルさん。
「……そこは……ありがとうって言ってくださいよ。謝ってほしい訳じゃないっすから、俺も……その……仲間なんですからっ…！」
少し気恥ずかしい台詞に顔が少し熱くなり、誤魔化すように頬を掻く。
そんな俺に笑みを溢しリムルさんは感謝の言葉を俺に贈ってくれた。
「あぁ、そうだな。ありがとうヨクル、街を、仲間を守ってくれて」

「うす……！」
と、こんな感じでがっしり握手を交わした俺とリムルさん。
いやー、改めて絆を感じたね俺は。うんうん。
ちなみにリムルさんの無駄に整いすぎている美人フェイスで頬を赤らめるなんて所業、主に童の貞の方には刺激が強すぎるのではと思ったのは口が裂けても言えんな。
なんて思いながら自身の氷菓子屋に歩を進めていたんだが、前方から迫る魔素に気付くと足を半歩引き腰を落とすと衝撃に備える。
数秒後。
歓喜の咆哮と共に訪れた重みに僅かに拮抗して見せたが、それも数瞬と持たず俺は地面に倒れ混んだ。
胸を圧迫し肺から空気が漏れる。
「……お前ら……くるしっ……どけっ!!」
「おかえり！ヨクル様っ!!」
「戻られましたかっ!!主殿!!このクロウ目覚めを待ちもうしたぞ!!」
視界いっぱいに映る俺の仲間。
あぁ、こうして熱を重みを感じて改めて思う……本当に守れたんだな俺の、この小さな手でも……と。
なら返す言葉はこれだろう。
「……ただいま……！」
「おーい、俺もいるんだけどな……もしもーし……」

26話《改めまして極悪霜男です》

と先日晴れて覚醒魔王となることとなった俺ことヨクル＝ライフでしたが。

進化に伴いまたしてもスキルが変わっておりました。

そのもっとも足る物が双子之王（ヘンゼルとグレーテル）ですねー。

リムルさんへの挨拶を済ませた俺は自室に戻ると俺にそっくりな双子之王ことアダムに向き合い、手を組むと。

「さて……説明を求む」

うん、説明を求めた。

だって、仕方無いじゃん!?進化したらしい俺自身何が何やら良くわからんし、理解する努力なんかしてる暇あれば分かる奴に聞いた方が早いわけで。

いやいや、思考の放棄だって？まぁまぁ、待つんだ。

それの何が悪いのかな？

てな感じで開き直りな俺は現状の説明をアダムに求めた。

するとアダムも素直に説明に入ってくれた。あれれ？進化して性格も進化したのか？

多少煽って来るのかと思いきや、ヨクルさん驚き。

何て事もバレてるのだろうか、アダムは額を押さえ天を仰ぎつつ話し出す。

「だな。先ずは主さんの種族が変わってるな、前は霜男（ジャックフロスト）だったが今は極悪霜男（ジャアクフロスト）だな」

極悪!?

マジか、てことは他のスキルも変わってたりすんのかな？

実際自身に解析を掛けてみた結果。

雪花之女王（シンデレラ）・双子之王（ヘンゼルとグレーテル）・脈動回復・大自然・魔力感知。

各種耐性。

状態異常・精神異常・全属耐性等々。

数は減ったけど纏まって進化したスキル達。
「ちな双子之王（ヘンゼルとグレーテル）がもっとも優れているのは多重存在が含まれている所だ。同じ空間、時間に同じ存在を作れるスキル。一対多数を強制的に作れる。このスキルのお陰で俺も存在している」
わぁお。
詳しく見てみればなぁにこれ？
双子之王（ヘンゼルとグレーテル）
・森羅万象
・多重存在
・並列高速演算
・解析
・理想の君
・守護
雪花之女王（シンデレラ）
・絶対零度
・氷細工
・灰雪被り
・幻想
前に見たことがあるスキルもあるが、真新しいのもチラホラあるな。
特に雪花之女王（シンデレラ）。
これまで凍結、氷結、停止、奪取等の氷由来の力。
その全てが合体し強化されたであろう名前をしている絶対零度。
実際に使ってみないと効果の程はわからないが、絶対強いでしょ！
そして灰雪被り。
そう、正しく雪花之女王（シンデレラ）なスキル。
詳細はまだ分からず、後々の確認になるだろうが、何処まで行っても俺は俺、雪と氷と寄り添う存在。
今になって思う、俺ってそんなに冷たい人間だったのだろうかと。
……いかんいかん、なんか思考が脱線してしまっている。
「てか何故に童話縛りの名前なんかねー。リムルさんなんか天使とか

悪魔の名前なのにな。まぁいいか、強くなったのは確実なんだろうし……はぁ……俺は一体何処に向かっているのやら……」
「……だな。いいんじゃねぇの？後々目的地なんて決めればよ。それはそうと……ヴェルドラそろそろ復活すっかもよ？」
「……マジ？」

◆◆◆

「……マジだー」
アダムの言葉通りにヴェルドラは見事復活を果たした訳だ、何故か人形態で。
金髪で均等の取れた筋肉質な長身、まるでヤンキー待った無し。
しかしながら周りは皆魔物な訳で俺自身も魔王で魔物であるから、見た目なんぞは今更感が半端ない。
だが、こうして改めてヴェルドラの信頼というか寧ろ信仰みたいな物は絶大だったのだと思い知る。
誰も彼もがヴェルドラの復活に歓喜し歓声をあげ、皆で喜びを分かち合うお祭り状態で。
俺は人の波に飲まれ、ドラム洗濯機の如く目を回しながらどうにかヴェルドラ並びにリムルさんの所へたどり着く。
既に息は絶え絶えだがな！
それにしても近くで見ると尚ヤンキーだな。俺はマジマジとヴェルドラの周りを歩きながら観察する。
「なんだ、なんだっ！我が友よ！感動の再開だなっ！」
「……うぐっ!?は、離せっ！」
高身長から繰り出される激しい抱擁は俺に逃げる余裕を与える間もなく低身長を愚弄するかの如く抱き潰され。
まるで潰れたカエルのよう。
離せと言うのに、この馬鹿力のドラゴンは一向に力を緩める様子は無く。寧ろ強める始末。
「……このやろ……」

「ワハハハ!!戯れは楽しいなっ！」
ならもっと楽しませてやろう！
こっそり雪花之女王（シンデレラ）の絶対零度を発動させ、すこし腕の力を停止させてやろうと思ったんだけども……。
「……ありゃ？」
蓋を開けてみれば、停止させるだけのつもりが。
ヴェルドラの腕がまるでガラス細工の様な氷になり、何故か氷が覆っている腕は完全にその機能を停止させていた。
そう力を入れると言う機能ではなく、腕としての機能を止めていた。
「……やべ……解除、解除」
そっと氷に触れると共に蒸気を吹きながらガラスが割れるようにもともとあった腕に戻っていた。
「うむ、ヨクルも強くなったな！我は誇らしいぞっ！」
自身の腕が無くなったも同義だと言うのに。懐が広いのか、そもそも気に止める事でもなかったのかヴェルドラは変わらず豪快な笑みを浮かべていた。
「さいですか。俺も会えて嬉しいよ、友達に」
「友達……くぅ～!!なんと良い響きかっ！ではっヨクルよ！我は街を散策して参る！リムルの中で楽しげか場所には目星をつけていたからな！ワハハハ!!」
そう振り向き様に言い残すと脱兎の如く走り出していた。全くもって落ち着き無く、辺りを巻き込み颯爽と去っていく正に……。
「……暴風だな」
「終わったか？」
既に見えなくなったヴェルドラを見送った後、建物の影から現れたアダム。
久々の再開だからと気を聞かせてくれたのだろうか。
いや、違うな。
こいつ絡まれるであろう事を予期して隠れて過ごしていたな。
「一応、顔見せは終わったのか。てかお前隠れてやり過ごしやがった

だろ、今度ヴェルドラの前に突きだしてやる。俺の苦労を味わえ」
「勘弁しろよ……」
こうして、リムル並び俺は覚醒魔王と呼ばれる存在に進化したのだった。
事の結末は人間国への落とし前。やられたからやり返した結果の進化だった訳ではあるのだが。
しかし、そうなんだー、へー。
と流してくれる訳もなく、以前から存在し猛威、威光を示していた魔王連中は誰もが突然現れた魔王に興味をあらわにして行く。
魔王となった。
数日後、魔王達からお茶に誘われちゃった――w――w